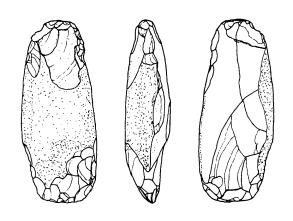
一般国道475号東海環状自動車道

宮山遺跡

発掘調査報告



1 9 9 9

三重県埋蔵文化財センター



南北に長い三重県は、その気候風土も所々で変われば、育まれてきた歴史も大きく異なる場合がございます。したがって三重県のいたる所で、その地域独特の文化が芽生えることもございます。そのことを如実に表してくれたのがこの度ご報告いたします宮山遺跡ではないかと思います。

宮山遺跡は、三重県でも最北端に近い鈴鹿山系の藤原岳の麓に位置し、古くから地元で貴重な遺跡であることが知られていましたが、この度の発掘調査により、弥生時代の石斧の製作遺跡であることが判明し、高い注目を集めました。

宮山遺跡の所在します員弁郡の「いなべ」は、『日本書紀』などにも登場します古代氏族の「猪名部」に通じ、木工の匠として活躍したといわれています。彼らの重要な仕事道具でもある斧が古く弥生時代に遡り、この地域で作られたのも縁なきこととは思えません。

こうした重要な成果が明らかになった宮山遺跡は、現状保存が困難なため記録保存というか たちになりましたが、わたくしどもに課せられた責務のひとつとして、その膨大な記録を整理 して報告書として公開することであると考えています。今後、この成果が各方面で活用される ことを切望いたします。

最後になりましたが、調査にあたり御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様に厚くお礼申し上げます。そしてこの報告書が地域の歴史と文化に対する御理解の深まりの一助になることを願いますとともに、県民の皆様の文化財保護へのより一層の御理解と御協力を祈念いたします。

平成11年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井 與 生

例 言

- 1. 本書は、平成7年度に三重県が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した一般国道475号東海環状自動車道建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査にかかる報告書のうち、宮山遺跡の報告書である。
- 2. 宮山遺跡は、三重県員弁郡大安町片樋に所在する。なお、本書では遺跡名を営山遺跡とするが、同一名称をもつ他の遺跡と区別する場合には、片樋宮山遺跡とすることを薦める。
- 3. 調査にかかる費用は、建設省中部建設局の負担による。
- 4. 発掘調査は、次の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

A地区 小菅文裕

B地区 竹内英昭

C地区 竹内英昭·清水弘之

D地区 清水弘之·小菅文裕

E地区 小菅文裕

調査協力 東員町教育委員会

現場作業 社団法人中部建設協会

5. 当報告書の作成業務は、担当職員が行ったほか、以下の者の補助があった。また、遺構・遺物の写真は、清水 弘之を中心に、竹内・小菅が撮影した。

釜谷実加代·宮本理美·藤田有紀·樋口 愛·楠 純子·石橋秀美·日紫喜勝重·長野恵子

- 6. 当報告書の執筆者は目次にその氏名を記したほか、とくに寄稿いただいたV-1 については、文頭にも明記した。なお報告書全体の編集は森川幸雄の監修を受け、竹内が行った。
- 7. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略、所属は調査当時)

八賀晋 (三重大学人文学部)、岩野見司 (東海学園女子短期大学)、田中欣治 (津市立三重短期大学)、赤塚次郎・石黒立人・堀木真美子 (愛知県埋蔵文化財センター)、佐藤由紀男 (浜松市博物館)、森 勇一 (愛知県立高等学校)、岩花季口・日下徳重 (大安町郷土資料館)、松本 覚 (藤原町立藤原中学校)、川戸達也・葛山拓也 (四日市市教育委員会)、中井正幸・鈴木 元 (大垣市教育委員会)

- 8. 宮山遺跡については、既に『一般国道475号 東海環状自動車道 埋蔵文化財発掘調査概報 II 』(三重県埋蔵文化財センター 1996) および『東海環状自動車道発掘調査ニュース』No.5・6にその調査途中の概要を報告したが、本書をもって正式報告とする。
- 9. 本書で用いた地図および遺構実測図等は、国土調査法の第Ⅳ座標系を基準とし、方位の表示は座標北とする。 当遺跡では磁北はN6°30′W偏(昭和60年現在)となる。
- 10. 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
- 9. 本書で用いた遺構表示略記号は、以下の通りである。 SB: 掘立柱建物 SH: 竪穴住居 SK: 土坑・土壙墓 SX: 墳墓 SZ: 平地住居・その他
- 12. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。 各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ι		前	Î	言				(竹内英昭	∄)
	1		事	業の	概	要・		•••••	···· 1
	2		調	查σ	方法	法·			···· 1
	3		調	査の) 経 i	過・		•••••	2
П		位	置	と現	境			(竹内英昭	3)
	1		地	理的	環境	境·			3
	2		唐	辺の)縄]	文~	- 古墳時代の遺跡	•••••	3
Ш		譋	査	の成	果			(竹内英昭	3)
	1		A	地区	【の】	調査	£		
		(1	()	遺	構	••••			7
		(2	2)	遺	物	••••			···· 7
		(3	3)	小	結	••••			9
	2		В	地区	【の記	調査	Ē		
		(1	(遺	構	••••		•••••	10
		(2	2)	遺	物	••••			10
		(3	3)	小	結	••••		•••••	14
	3	•	С	地区	【の】	調査	Ē		
		(1	()	遺	構	••••		•••••	18
		(2	2)	遺	物	••••			27
		(3	3)	小	結	••••			····37
	4		D	地区	【の記	調査	Ē		
		(1	(1	遺	構	••••		••••••	····59
		(2	2)	遺	物	••••		•••••	····59
		(3	3)	小	結	••••		•••••	····59
	5		E	地区	【の記	調査	Ē		
		(1	()	遺	構	••••		•••••	62
		(2	2)	遺	物	••••		•••••	62
		(3	3)	小	結	••••		•••••	66
IV				成果				(竹内英昭	
	1		縄	上文	器	につ	DV17	•••••	····70
	2		縄	文明	期の	の平	² 地住居について	•••••	····70
	3		弥	生中	期の	の住	E居群の特徴と広がり	•••••	71
	4		磨	製石	斧	の製	l作とムラの性格について	•••••	71
							墓について		
参	考	•	伊	勢地	地方(の磨	5製石斧の例	•••••	····82
V		考	:	察					
	1		石	斧石	i材の	の分	析	(堀木真美子	-) 89
	2		塺	製石	斧隼	製作	工程の復原とその流通	• (竹内英昭	(1)

挿 図 目 次

第1図	調査地区割図(1:3,000)	··· 1
第2図	遺跡分布図(1:50,000)	
第3図	宮山遺跡周辺地形図(1:10,000)	
第4図	遺構配置図(1:1,000)	
第5図	A地区遺構図(1:300) ······	7
第6図	A 地区出土遺物実測図〈1〉(12·13は1:2、14∼17は1:3、他は1:4) ··············	8
第7図	A 地区出土遺物実測図〈2〉(1:3) ·······	
第8図	土器棺墓SK18実測図(1:10)	
第9図	B地区遺構図(1:300)	
第10図	住居跡SZ36実測図(1:80)	
第11図	竪穴住居跡SH1実測図(1:50)	
第12図	B地区出土遺物実測図〈1〉(1:4) ·······	
第13図	B地区出土遺物実測図〈2〉(1:4) ····································	
第14図	B地区出土遺物実測図〈3〉(1:3) ······	
第15図	竪穴住居跡SH2実測図(1:50)	
第16図	C地区遺構図(1:300) ······	
第17図	竪穴住居跡SH4出土遺物(1:4)	
第18図	竪穴住居跡SH3・4実測図(1:50)	
第19図	竪穴住居跡SH5・6出土遺物(1:4)	
第20図	竪穴住居跡SH5・6実測図(1:50)	
第21図	竪穴住居跡SH7出土遺物(1:4)	23
第22図	竪穴住居跡SH7実測図(1:50)	
第23図	竪穴住居跡SH8出土遺物(1:4)	
第24図	竪穴住居跡SH9出土遺物(1:4)	…24
第25図	竪穴住居跡SH8実測図(1:50)	
第26図	竪穴住居跡SH10出土遺物〈1〉(1:4)	
第27図	竪穴住居跡SH9・10実測図(1:50)	…25
第28図	竪穴住居跡SH10出土遺物〈2〉(1:4)	
第29図	竪穴住居跡SH11出土遺物(1:4)	
第30図	竪穴住居跡SH11実測図(1:50)	
第31図	竪穴住居跡SH12出土遺物(1:4)	
第32図	竪穴住居跡SH12実測図(1:50)	
第33図	竪穴住居跡SH13出土遺物(1:4)	
第34図	竪穴住居跡SH13実測図(1:50)	
第35図	掘立柱建物SB14(上)·SB15(下)実測図(1:50) ······	
第36図	掘立柱建物SB16(上)・SB17(下)実測図(1:50)	
第37図	C 地区出土遺物実測図〈1〉(1:4) ······	
	C 地区出土遺物実測図〈2〉(1:4) ······	
第39図	C 地区出土遺物実測図〈3〉(1:4) ····································	35

第40図	C 地区出土遺物実測図〈4〉(1:3) ······36
第41図	C 地区出土遺物実測図〈5〉(1:3) ······38
第42図	C 地区出土遺物実測図〈6〉(1:3) ······39
第43図	C 地区出土遺物実測図〈7〉(1:3) ·······40
第44図	C 地区出土遺物実測図〈8〉(1:3) ·······41
第45図	C 地区出土遺物実測図〈9〉(1:3) ·······42
第46図	C 地区出土遺物実測図〈10〉(1:3) ······43
第47図	C 地区出土遺物実測図〈11〉(1:3) ······44
第48図	C 地区出土遺物実測図〈12〉(1:3) ······45
第49図	C 地区出土遺物実測図〈13〉(1:3) ······46
第50図	C 地区出土遺物実測図〈14〉(1:3) ······47
第51図	C 地区出土遺物実測図〈15〉(1:3) ······48
第52図	C 地区出土遺物実測図〈16〉(1:3) ······49
第53図	C 地区出土遺物実測図〈17〉(1:3) ······50
第54図	C 地区出土遺物実測図〈18〉(1:3) ······51
第55図	C 地区出土遺物実測図〈19〉(1:4) ······52
第56図	C 地区出土遺物実測図〈20〉(1:4) ······53
第57図	C 地区出土遺物実測図〈21〉(1:4) ······54
第58図	C 地区出土遺物実測図〈22〉(1:4) ······55
第59図	C 地区出土遺物実測図〈23〉(1:4) ······56
第60図	C 地区出土遺物実測図〈24〉(1:4) ······57
第61図	C 地区出土遺物実測図〈25〉(1:4) ······58
第62図	D地区遺構図(1:300) ······59
第63図	D地区出土遺物実測図〈1〉(1:3) ······60
第64図	D地区出土遺物実測図〈2〉(1:3) ······61
第65図	D地区出土遺物実測図〈3〉(1:4) ······62
第66図	E 地区遺構図(1:300) ······63
第67図	方形周溝墓SX19実測図(1:100主体部は1:50)65
第68図	方形周溝墓SX19出土遺物実測図(1:4)
第69図	前方後方形墳丘墓SX20実測図(1:300)
第70図	前方後方形墳丘墓SX20推定復元図(1:200) ······67
第71図	前方後方形墳丘墓SX20出土遺物実測図(1:4) ·······67
第72図	E 地区出土遺物実測図(1:4,381のみ1:2) ······68
第73図	E 地区ほか出土遺物実測図(1:3) · · · · · · · · · 69
第74図	北勢地域出土の磨製石斧〈1〉(1:3)83
第75図	北勢地域出土の磨製石斧〈2〉(1:3)84
第76図	中勢地域出土の磨製石斧〈1〉(1:3)85
第77図	中勢地域出土の磨製石斧〈2〉(1:3)86
第78図	中勢地域出土の磨製石斧〈3〉(1:3)87
第79図	中勢地域出土の磨製石斧〈4〉(1:3)88
第80図	塩基性岩の分布域と磨製石斧出土遺跡92
第81図	磨製石斧の製作工程図(1:6)97

付 表 目 次

笙 1 表	A 地区土器観察表 ······	74
70 1 20	7.260.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11	
第2表	B地区土器観察表 ······	75
第3表	C 地区土器観察表(1)	76
第4表	C 地区土器観察表(2)······	77
第5表	C 地区土器観察表(3)······	78
第6表	D地区土器観察表(1)······	79
	D地区土器観察表(2)······	
第8表	E地区土器観察表	81
	表面観察および比重測定結果	
	薄片観察結果	
第11表	蛍光X線による全岩化学組成	91

図 版 目 次

巻頭図版	宮山遺跡出土の磨製石斧	図版1	塩基性岩類偏光顕微鏡写真
図版 2 上	A地区全景	図版2下	A地区全景(南から)
図版3上	B地区全景	図版3下	B地区全景(北西から)
図版4上	B地区住居跡SZ36(南から)	図版4下	B地区住居跡 S Z 36炉跡
図版5上	B地区住居跡群(南東から)	図版5下	B地区住居跡SΖ38(南西から)
図版6上	B地区土器棺墓SK18(南から)	図版6下	B地区竪穴住居跡 S H1(南西から)
図版7上	C地区全景	図版7下	C地区全景(北から)
図版8上	B·C地区を望む(南東から)	図版8下	C地区竪穴住居跡 SH2(南東から)
図版9上	C地区竪穴住居跡 S H3・4(北西から)	図版 9 下	C地区竪穴住居跡SH5・6(北西から)
図版10上	C地区竪穴住居跡 SH7(北西から)	図版10下	C地区竪穴住居跡 SH8(南東から)
図版11上	C地区竪穴住居跡 S H9・10(北から)	図版11下	C地区竪穴住居跡SH11(東から)
図版12上	C地区竪穴住居跡SH12(北西から)	図版12下	C地区竪穴住居跡SH13(南西から)
図版13上	C地区掘立柱建物SB14(南東から)	図版13下	C地区掘立柱建物SB15(南西から)
図版14上	C地区掘立柱建物SB16(北東から)	図版14下	C地区住居跡SZ40(南東から)
図版15上	D地区全景	図版15下	D地区全景(南から)
図版16上	E地区遠景(西から)	図版16下	E地区全景
図版17上	E地区方形周溝墓SX19検出状況(東から)	図版17下	E地区方形周溝墓S X 19(東から)
図版18上	E地区方形周溝墓S X19(西から)	図版18下	E地区方形周溝墓SX19周溝内土器出土状況
図版19上	E地区前方後方形墳丘墓 S X20 (南西から)	図版19下	E地区前方後方形墳丘墓S X 20(西から)
図版20	A地区出土遺物	図版21	B地区出土遺物(1)
図版22	B地区出土遺物 (2)	図版23	C地区出土遺物(1)
図版24	C地区出土遺物 (2)	図版25	C地区出土遺物(3)
図版26	C地区出土遺物(4)	図版27	C地区出土遺物(5-1)
図版28	C地区出土遺物 (5-2)	図版29	C地区出土遺物(6-1)
図版30	C地区出土遺物 (6-2)	図版31	C地区出土遺物 (7-1)

I. 前 言

1. 事業の概要

一般国道475号東海環状自動車道(北勢〜四日市) 建設工事事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務の全体 に関する経過と調査体制については、「権現坂遺跡・ 東村城跡」の発掘調査報告書で詳述する。したがっ て、当報告書では全体に関する事項は割愛する。

2. 調査の方法

宮山遺跡は、員弁川右岸の河岸段丘上に立地し、 調査前の地目は林であったが、かつては畑に利用されたこともあったようで、人頭大ほどの礫により各 所有地を区切る地境としていたようである。

調査対象となった宮山遺跡は、道路延長でおよそ600mにも及ぶことから、平成6年度に試掘調査を行い、遺構あるいは遺物の認められた箇所を中心に調査地の設定をおこなったが、未買収の用地を含むため、試掘の及ばなかった箇所もあり、全体の調査予定面積を確定することはできなかった。

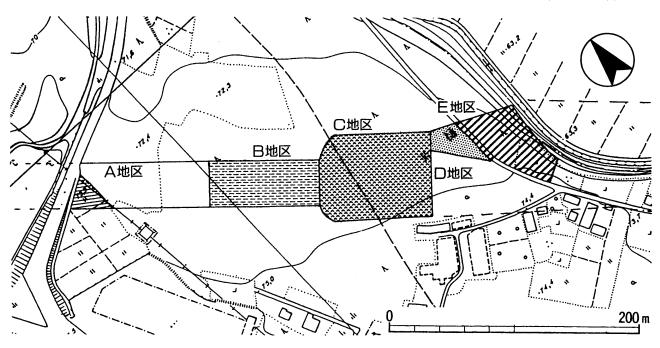
試掘結果を受け、平成7年度は調査区をA~E地区の5つの小地区に分け発掘調査を実施し、他の地区は用地買収が完了次第、試掘調査を実施し、次年度以降、本調査を進めることとした。

A地区は、他の調査区のように連続しておらず、 飛地的な位置にあるが、本来宮山遺跡とは別の遺跡 と認識した方が良いかもしれないが、事業地内遺跡 としては同一遺跡との扱いにした。

調査はまず木立の伐採から始め、B地区およびD地区をバックフォーによって表土の掘削と可能な限りの抜根を行った。その後、B・D地区の終了後は再び排土を戻し、C地区ならびにA地区、E地区へと調査をすすめた。調査にあたり調査区をあえて分断した状態で連続させなかったのは、排土の仮置き場に苦慮したからである。

B地区とC地区には、機材や排土の運搬、および 他調査区への通路とするため、調査区の周縁に沿っ て、作業用道路を設けたが、これについては、調査 の最終段階近くで撤去した。また、E地区について は、遺構の一部が現道下にも及ぶことが判明したた め、現道の迂回路を設定し、該当部分についての調 査を行った。

各調査区は、国土座標に合わせて4m間隔に地区 杭を設置した。その際、座標値の100m単位を大地区 として区切り、その中を地区杭によって25分割され たものを小地区とした。各大地区毎に北から南へA



第1図 調査地区割図(1:3,000)

~Y、西から東へ1~25の記号を与え、大地区の名称と組み合わせて表示した。

調査にあたっては、柱穴(ピット)については、 各小地区ごとに通し番号を与えた他、住居跡等の遺構については、各調査区ごとに通し番号をつけ、現 地調査および遺物整理に活用した。しかし、本報告 にあたっては、すべての遺構番号を反故にし、新た に遺跡全体を通しての連番として再編成した。従っ て、宮山遺跡の各遺構番号は、本報告書をもって正 式なものとする。

3. 調査の経過

調査はまずB地区とD地区を並行して実施した。 B地区では全体的に風倒木の痕跡と考えられる黒色 土を埋土とする不定形な土坑状の落ち込みが多かっ たが、埋土中に主として縄文晩期の土器を包含して いることから、一部については遺物の採集を目的と して掘削も行った。

表土掘削後、B地区のほぼ全体から円形の小柱穴が多数検出され始め、掘立柱建物を想定して柱並びの検討を始めたが、柱穴の配置からは方形建物よりむしろ円形建物と考える方が妥当という見解に達し、縄文晩期を中心とした平地住居を想定するに至った。

D地区は遺物が出土するものの、調査区内は風倒木に加え、「クロクワ」と呼ばれる天地返しが行われている箇所が広く占め、このため遺構の検出がきわめて困難な状態であった。

B・D地区調査終了後、8月26日に現地説明会を 実施した。

B・D地区を埋め戻した後、C地区およびA地区、 そしてE地区の調査を開始した。C地区は表土の堆 積も浅く、遺構も一部削平を受けていると考えられ たため、重機による表土掘削は最小限に留めた。

調査区内の北東寄りの箇所に竪穴住居跡などの遺構が集中しており、幸いその箇所には風倒木は少なく、遺構の検出は比較的容易であった。

C地区の表土中にも石斧およびそれに関連する遺物が散布しており、極力その収集に努めた。

他と調査区の立地が異なるA地区は、遺構は不明ながらも、縄文時代以降の各時代の遺物が出土し、付近に別の遺跡が存在する可能性が考えられる。

E地区は、表土掘削前から調査区内に古墳状の高まりが認められたため、その部分については表土の除去も人力で行った。

古墳状の高まりは、その後古墳ではなく弥生時代 後期末の方形周溝墓であることが判明し、さらに調 査区内の別の位置から検出された土坑についても前 方後方形周溝墓の周溝の一部である可能性があげら れるに至った。

ただ、遺構の遺存状態は非常に悪いため、周溝というより連続する土坑状の浅い窪み程度にしか確認できなかったが、後方部の一部は次年度以降の調査区へと延びる可能性もあり、課題として残る。

調査期間中は、調査指導員として浜松市博物館の 佐藤由紀男氏、財団法人愛知県埋蔵文化財センター の赤塚次郎氏および石黒立人氏を招き、佐藤氏には 主としてB地区の遺構・遺物およびC地区の遺物に ついて、赤塚氏には主としてE地区の墳丘墓につい て、そして石黒氏にはC地区の遺構・遺物について それぞれ指導および助言を賜った。

A・C・E地区の調査終了後、11月25日に再度現 地説明会を実施した。

各調査区の面積および調査期間は、おおよそA地区が530㎡、B地区が2,600㎡、C地区が5,600㎡、D地区が650㎡、E地区が2,500㎡で、B・D地区が平成7年5月8日~7月31日にかけて、A・C・E地区を同年9月4日~平成8年1月18日にかけて調査を実施した。

Ⅱ.位置と環境

1. 地理的環境

遺跡が所在する三重県北部は、北勢地域とも呼ばれ、木曽三川や伊勢湾を隔てて愛知県と、養老山系を隔てて岐阜県と、さらに鈴鹿山系を隔てて滋賀県と結ばれる地域である。

三重県北部でも鈴鹿山系の一つ藤原岳あるいは竜 ケ岳山麓部に位置する宮山遺跡周辺は、山間部を除 けば県内でも屈指の降雪地帯であり、山地から吹き 降ろす冬季の季節風も冷たい。

鈴鹿山系の烏帽子岳や三国岳から端を発する員弁 川とその支流は、この地域の平野の発達に大いに貢献し、北勢北部地域を横断し、伊勢湾に注いでいる。

宮山遺跡はこの員弁川右岸の段丘上に立地するが、 低地部との比高が10m以上に至り、急峻な段丘崖を 形成している。また、遺跡の北側は、現況では徐々 に傾斜し、員弁川支流の青川によって画される。

この青川は、鈴鹿山系から端を発する中小河川で、 山地部を抜けてから扇状地を発達させ、奥村や麓村、 中山などの現集落沿いに流路をとり、麻生田の段丘 下付近で員弁川と合流する。

2. 周辺の縄文~古墳時代の遺跡

宮山遺跡(1)周辺では従来、縄文~古墳時代の遺跡の存在がいくつか知られていたが、発掘調査された例は少ない。

遺跡の存在については昭和前半を中心とした鈴木 敏雄氏や地元の員弁高校郷土研究部による精力的な 遺物採集による成果に負うところが大きい。

宮山遺跡と同じ青川流域には、奥村遺跡(10)や中山遺跡(11)があり、磨製石斧などの石器や弥生土器などが採集されている。また宮山遺跡自体も、以前から縄文時代の遺跡として知られており、とくに今回の調査区の東側にあたる「団子の宮跡」と呼ばれる地点は特に遺物が集中して採集できる所として注目されており、大安町片樋に所在する大神社の神宝とされている石剣・石棒・御物石器は、ここか

ら出土したといわれている。

員弁川右岸の低地部に張り出す微高地に立地する 北勢町瀬木の川向遺跡(8)では、平成5年に発掘調 査され、縄文時代中~後期を中心とする遺構・遺物 が出土した。

青川流域の南、宇賀川流域にも下小原遺跡(15)、野々田遺跡(13)、照光寺遺跡などがやはり縄文~弥生時代の遺物が採集されている。とくに野々田遺跡や照光寺遺跡からは、縄文早期の押型文土器が含まれ、前期に属する北白川下層式の土器も多く認められる。

同様に昭和26年に名古屋大学によって調査された 中大野遺跡(16)でも、北白川下層式の土器が出土 している。また宮山遺跡の北方、員弁川を遡った北 勢町治田外面には平成6年度に発掘調査された権現 坂遺跡(5)から、縄文晩期の土器棺墓などがみつかっ た他、石剣等も出土した。

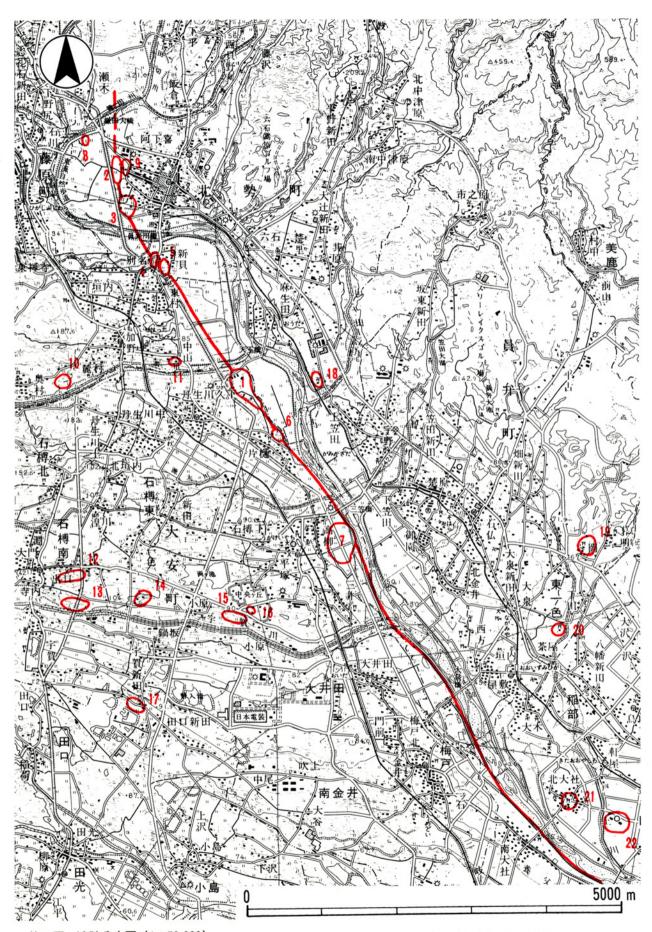
また宮山遺跡の南東、同じ段丘上に立地する大久 保城跡でも、乳棒状の磨製石斧が出土しているほか、 すでに土取りで全壊しているが、同じ東海環状自動 車道の路線内に所在した高柳遺跡(7)からは、チャー ト片が採集されている。

さらに員弁川を挟んだ対岸の段丘上に位置する覚 正垣内遺跡(3)でも、縄文後期初頭の中津式期の竪 穴住居跡を含めた遺構・遺物が発掘調査され、さら に員弁川を下った東員町北小社の山田遺跡でも、縄 文晩期の土器棺墓が確認されている。

弥生時代の遺跡はこれまで概して当地域周辺では 知られていなかった。東村城跡(4)から前期の土器 が出土したことから、当地域にも遠賀川文化が波及 していたことが判明した。

また、員弁町東一色の大谷・奥田遺跡(20)では、昭和60~61年にかけて発掘調査され、弥生中期の竪穴住居跡が確認されている。さらに後期には東村城跡や川向遺跡で遺物の出土が知られている。

古墳時代の遺跡としては、宮山遺跡とは員弁川と その氾濫原である沖積地を挟んだ台地部に、全長43 mの前方後方墳の1号墳を中心とした麻績塚古墳群



第2図 遺跡分布図(1:50,000)

(18) が所在する。現状では2基のみだが、周辺は開発が進んでいるため、当初はさらに多くの数にのほるものと思われる。

麻績塚古墳群から員弁川を下った東員町北小社の 猪名部神社古墳群(21)の1号墳も全長30m弱の前 方後円墳とされているが、麻績塚古墳群の例からす ると、前方後方墳の可能性も捨てきれない。

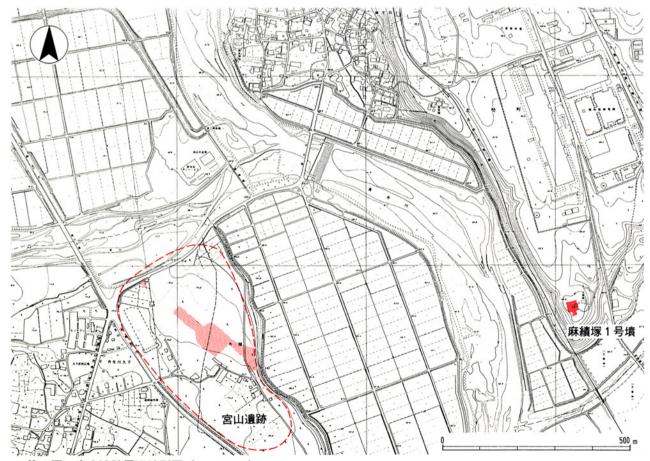
北勢町阿下喜の大西神社古墳群(9)は、現在の大 西神社の敷地内に所在し、現在では1号墳および2 号墳のみがかろうじて墳丘の高まりを残している。

昭和4年頃の道路改修工事により、横穴式石室が 露呈し、鉄刀や玉類、須恵器などが出土している。

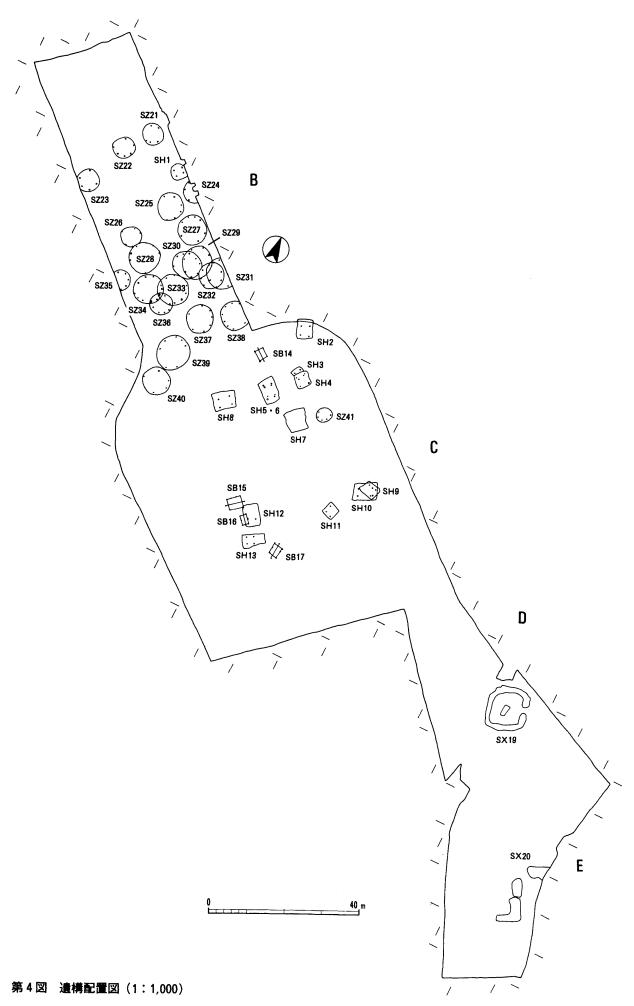
員弁川左岸の員弁町岡の岡古墳群(19)では、前 方後円墳と推定される1号墳を含む3基の古墳が分 布しており、横穴式石室を埋葬施設とする3号墳か ら6世紀前半代に相当する須恵器類が出土している。

また、宮山遺跡の南方、大安町石槫東でも下小原 古墳群(15)と呼ばれる18基以上からなる小円墳群 が存在する。一部が発掘調査され、横穴式石室を主 体部とする7世紀前半頃の群集墳と考えられている。 下小原古墳群が所在する字賀川沿いには、南林古墳群 (12)、上小原古墳群 (14)、字賀新田古墳群 (17) など、十数基程度を単位とする小古墳群が点在する。

古墳時代の集落遺跡については、北勢町阿下喜の 上惣作遺跡(2)では古墳時代前期や7世紀代に下る 竪穴住居跡や掘立柱建物がみつかっているが、周辺 では他に明確なものが少なく、その実態はまだ不明 な点が多い。



第3図 宮山遺跡周辺地形図(1:10,000)



Ⅲ.調 査 の 成 果

1. A地区の調査

(1) 遺 構

A地区は、他の調査区とはやや位置が離れ、青川 右岸の堤防沿いにあたり、調査前は水田および畑地 であった。

調査区内の土層は、耕作土下には砂質土の堆積が 基本で、段丘礫層は地山とした無遺物層にも認めら れず、A地区西側から延びる扇状地性の地形を呈し ていると考えられる。

遺構は溝状のものが南北方向に延びることが確認 されたが、断面観察からは耕土下の遺物包含層の上 面から掘り込まれており、時代的には近・現代のも のと判断される。出土遺物もみられなかった。

その他、ピットあるいは土坑状の落ち込みが検出 されたが、出土遺物もなく、遺構として判断できる ものかは定かでない。

(2) 遺物

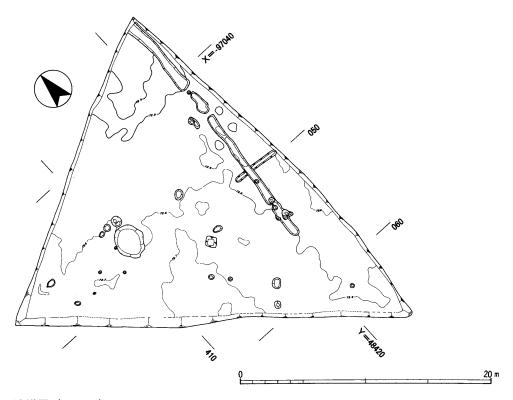
出土した遺物はすべて包含層からで、遺構に明確 に伴うものはない。弥生土器を中心に、若干の縄文 土器、土師器などの土器類が出土したほか、磨製石 斧、敲石などの石製品および銭貨が出土した。

縄文土器(15)は、いわゆる縄文後期の磨消縄文をもつ深鉢形土器片である。口縁部には山形の突起部が認められる。

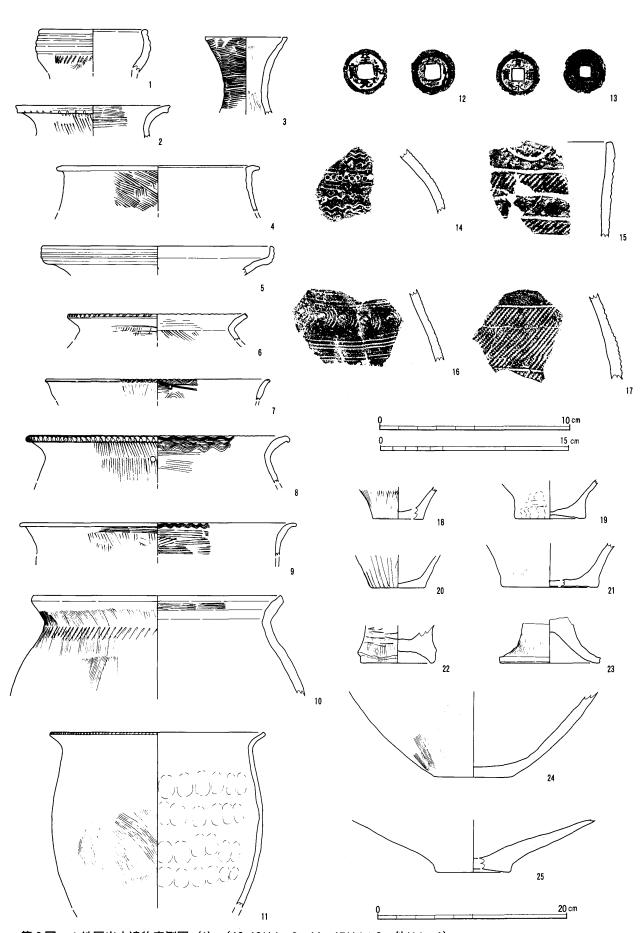
弥生土器(1~11·14·16~25)のうち、(1) は袋状口縁をなす細頸壺形土器(以下、煩雑を避けるため「形土器」の表現は省略する)で、口縁部外面に凹線文が巡らされている。(3) は、外反して開く細頸壺で、不連続な直線文を外面に巡らす。多気町花ノ木遺跡S K23などの類例から、中期中葉でも前半のものと思われる。

(5) も受口状口縁をなす細頸壺で、口縁部外面に は凹線文が巡る。(2·5) は口縁部外面の凹線文を指標とすれば中期後葉に属するものであろう。

(14·16·17) はいずれも壺の肩部の破片であるが、 (17) は沈線で画された縄文帯をもつ。中期中葉でも



第5図 A地区遺構図(1:300)



第6図 A地区出土遺物実測図〈1〉(12・13は1:2、14~17は1:3、他は1:4)

前半段階に相当するものである。

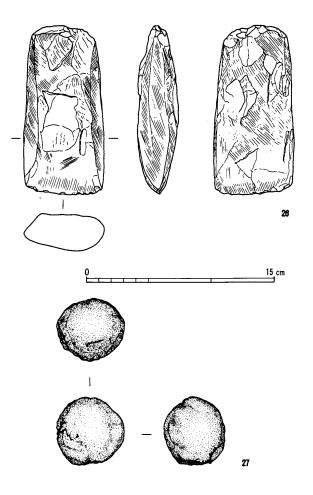
甕 (2·4·6~11) は、いずれも口縁部が外反し、外面はハケメ調整するものである。(7~9) は、口縁部内面にハケ原体による波状文を巡らす。

(18~25) はいずれも底部片で、(23) は壺あるいは鉢類の脚台とみられ、(22) もあげ底状となり、外面に剝離痕が認められることから、脚台部となる可能性がある。

磨製石斧(26)は、両刃で全体を丁寧に研磨されている。側縁に面をもたないことから、弥生石斧と考えられるが、石斧の横断面形は扁平に近く、いわゆる「太型蛤刃」の形態をとらない。刃部には両面に使用痕が認められる。

敲石(27)は、球形に摩滅したもので、石斧等の 製作のための工具と推定される。

銭貨(12·13)は、(12)が「至和元寶」で初鋳年 代が至和元年(1054年)とされる北宋銭でる。銅銭 で字体は真書である。また、(13)は江戸時代の「寛



第7図 A地区出土遺物実測図〈2〉(1:3)

永通寶」で、字体は真書である。

(3) 小 結

A地区では弥生土器を中心とした遺物を含む包含層は認められたものの、同時代の遺構は確認することができなかった。従って遺物は、付近からの流れ込みと思われ、そのうち弥生土器は中期中葉から中期後葉にかけてのものである。宮山遺跡のなかでも縁辺部か、あるいはA地区の西側に別の遺跡が存在することも予想される。

2. B地区の調査

(1) 遺 構

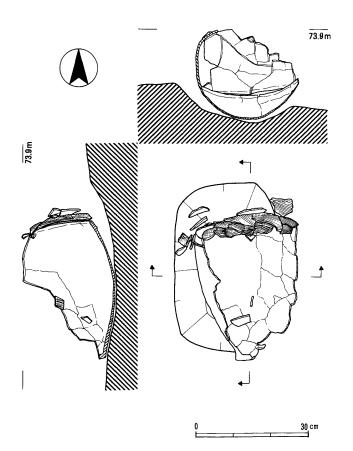
B地区はA地区の南に位置し、C地区とは連続するもので、調査の都合上、便宜的に両地区を分けたものであるが、後述するようにほぼ遺構の性格もC地区とは異なる様相をみせる。

B地区は河岸段丘面から青川に向かって傾斜する 斜面の一部を含む。遺構・遺物は段丘面である南半ほ ど多くみられ、下方に傾斜する北半には少ない。

調査前の地目は山林で、北半は畑地にも利用されていたようであり、調査区を横切って延びる「猪土居」が存在した。「猪土居」は石垣と土手を組み合わせたもので、猪による農作物の被害を防ぐもので、宮山遺跡の周辺地域でも他に数箇所で認められるようである。

また、B地区の調査区外になるが、南に隣接して 北勢地域に特徴的な灌漑用の横掘り井戸である「マ ンボ」が存在することも判明した。

B地区の遺構としては、縄文晩期の土器棺墓、弥



第8図 土器棺墓SK18実測図(1:10)

生中期の竪穴住居跡、そして多数のピット群が検出 された。また、遺物が出土するものの、明確な土坑 にならないものは、「風倒木」によるものと判断し、 遺構としては扱わなかった。

土器棺墓S X 18 B地区の南東部で検出された。 土器棺は、上面の一部が破壊されていたが、大木の 根に守られていたようで、比較的良好な残存状態で あった。口縁部を若干上方に向けた単棺形態をとる もので、別の個体の土器片で口縁部を閉塞していた。

これに対し、墓壙の撹乱は著しく、底面の一部が 痕跡程度確認されたに過ぎない。残存した墓壙の規 模は、長軸方向0.45m、短軸方向0.3m、深さ0.1m ほどである。

住居跡 S Z 21~39 B地区の南半を中心に多数の柱穴群が検出された。出土遺物の伴うものはごく限られているため、時期を特定することは遺物の面からは難しいが、柱穴群の配列を考えた場合、環状あるいは多角形の平面形を復原するのが適当と思われる。

これらを遺構として認識すると、その性格として 最も妥当なものは平地式構造の住居跡であり、実際 S Z 37は、ほぼ中央付近に炉跡と考えられる焼土が 伴う。

ただ、炉跡はこれ1基しか認められず、他の住居跡には伴わない。また、柱穴の配列も規格的とは言い難く、主観的な判断となる危惧も感じる。確実に住居跡と判断できる類例の乏しい現状では、可能性に留めておきたいが、いわゆる平地住居跡と考えた。

これらは大きいもので径8m、小さいもので径5mでやや不整形のものも含めて、環状あるいは多角形の柱配列を基調とするものである。

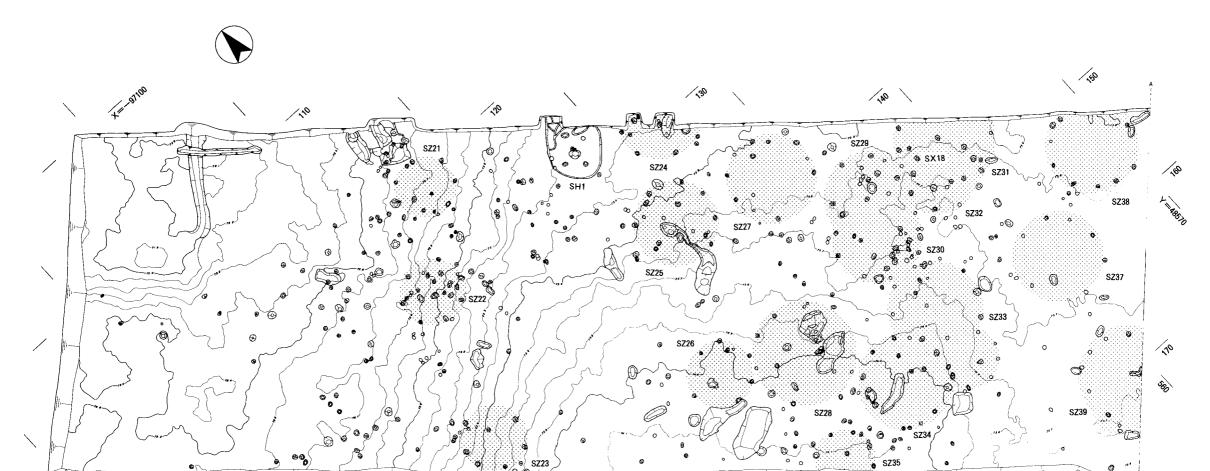
竪穴住居跡SH1 B地区で1棟のみ確認しえた。 平面形は円形となるものと思われ、径4.3m、深さ 0.15mをはかる。

ほぼ中央に炉跡があり、周囲に拳大ほどの礫が配 されており、炉を囲んでいた可能性が大きい。

東寄りには竪穴住居に伴う土坑が確認され、弥生 土器片が出土している。

(2) 遺物

B地区からは全体的に縄文晩期の土器片と若干の



第9図 B地区遺構図(1:300)

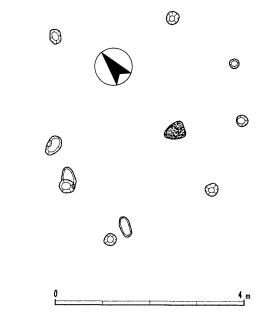
18

520

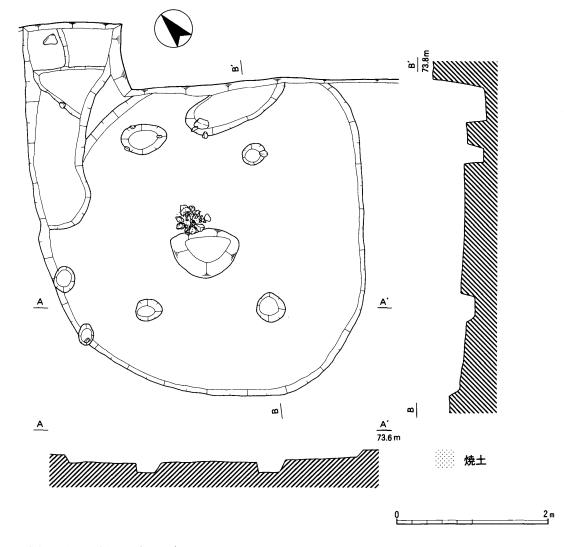
弥生土器片が出土しているが、それより時代の下る 遺物はまったく出土していない。

遺構出土のものとして、土器棺墓 S X18の縄文土 器深鉢 (28·29)、竪穴住居跡 S H01の (42·44) など がある。

- (28) は土器棺の蓋に利用していた深鉢で、体部下半を欠くが砲弾形を呈するものと思われる。口径34.5cmをはかり、外面は粗い二枚貝による条痕を施し、口縁端部を肥厚させ、内傾する面をもつ。内面は丁寧にナデ調整されている。いわゆる樫王式に併行する条痕文系の土器と思われる。
- (29) は口径29.4cm、器高36.4cmの深鉢で、口縁部からやや下がった位置に素文の突帯を一条貼り付ける。底部は平底で、口縁部と体部の境にはとくに段ないし沈線などは認められないが、口縁部は条痕文が残されるのに対し、体部はケズリ調整が施され



第10図 住居跡SZ36実測図(1:80)



第11図 竪穴住居跡SH1実測図(1:50)

ている。突帯文系土器としては最終末に属するものである。

竪穴住居跡 S H 1 出土の (42·44) はいずれも**翌**口 縁部片で、(42) は住居埋土より、(44) は住居内の 土坑から出土した。

(42) は口唇部にキザミメを施すのに対し、(44) は口唇部に 2 個単位の押圧を加え、山形状の突起としている。体部上半は外面にどちらも直線文をめぐらしていることが確認できる。

その他B地区からは縄文土器 (30~32·45~50·52·53·56~65)、弥生土器 (33~41·43·51·54) が出土している。

(30·31·46·47·53) は縄文晩期の突帯文系土器で、いずれも深鉢あるいは変容壷と呼ばれるものである。うち、(30·31) は口縁部から下がった位置に幅広の〇字状の押圧を加えた突帯を一条巡らすもので、突帯下は条痕を施す。

(53) は肩部片に同様の突帯を巡らすことから、 二条突帯文の深鉢となると思われる。

また(46·47)は、細かく押し引いた痕跡的な突帯 を巡らすもので、突帯文系土器のなかでも最終末の 様相を示すものである。

(49) は口縁部下に二条の幅広の沈線を施すもので、細片であるため詳細は不明であるが、浮線文系 土器と考えても良いものである。

(32·50) は口縁部が内弯気味に開く無文の深鉢片である。

(52) は二条単位の沈線間に縄文を施す縄文後期 前葉の福田KⅡ式あるいはその前段階の中津式に相 当するもので、後期の土器はこれ1点のみである。

(48·56~65) はいわゆる条痕文系土器で、樫王式併行のものが多いと考えられるが、(56) は山形に重なる条痕文を施すもので、水神平式に併行する可能性がある。

弥生土器 (33~41·43·51·54) のうち、広口童 (38) は口縁部内面に横位の条痕を施す。類例を求めると、津市四ツ野 B 遺跡などにみられ、前期の遠賀川系の広口壷の器形をもちながらその器面調整に条痕を施すという、いわば東西折衷的な土器となる可能性が大きい。

(40・41) は口縁端部が肥厚し、口唇部の上端と下

端にキザミメをめぐらすもので、(41) からすると体 部上半には櫛描直線文を施すとみられる。

(34) は台付蹇の脚台部とみられる。脚台は低く、 八の字に開く。

石鏃(55)は、宮山遺跡の調査区全体を通じて唯一出土したもので、基部の一部を欠くため、全形は不明である。サヌカイト製と考えられる。

(3) 小 結

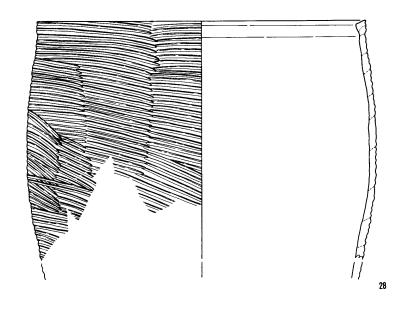
B地区は、弥生時代中期の竪穴住居跡が1棟、縄 文時代晩期の土器棺墓が1基検出されたほか、住居 跡となると考えられる柱穴群のまとまりを確認した。 住居跡と判断する確証はないが、SZ36は中央付近 に炉跡と考えられる焼土坑が伴うとみられる点や、 竪穴状の掘り込みがみられず柱配列が円弧を描くこ とを積極的に評価すれば、平地式の簡易的な住居群 と考えておきたい。

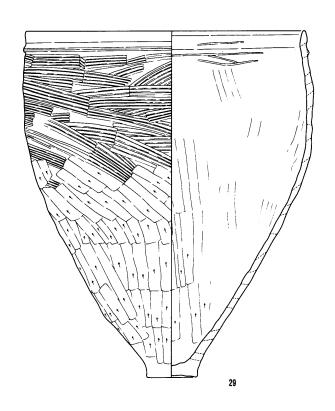
またその時期についても、柱穴からの出土遺物は 少ないものの、包含層を含めたB地区全体で、縄文 晩期末と弥生前~中期の遺物に限られるため、住居 跡群もこの時期に所属する可能性が大きい。

土器棺墓S X18は、単棺形式をとり口縁部をやや上に傾けた横位に安置したものである。棺に使用した土器は、外面に煤痕のある深鉢形土器で、別個体の土器で口縁部を蓋している。

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡SH1がある。 弥生時代の竪穴住居跡はC地区にも存在するが、S H1はこれらとは異なり、住居の平面形が円形とな る。出土遺物から弥生時代中期前半に遡る可能性を もつ。

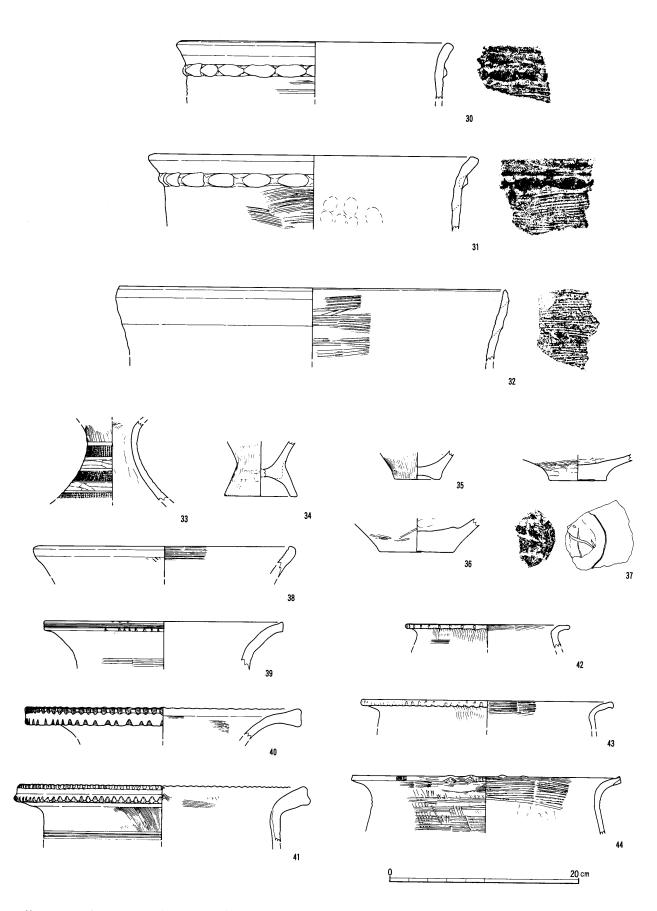
以上、B地区は調査区の範囲内でみる限り、縄文時代晩期末の居住圏であったと考えられるが、竪穴住居は確認されず、簡易的な構造と考えられる平地式の住居となる可能性の大きい柱穴群が多数検出された。炉跡はSZ37のみでみられたが、焼土も薄く、長期間使用されたとは考え難い。従ってこれらが住居跡群としても、一時的あるいは季節的な利用であったことを推定したい。



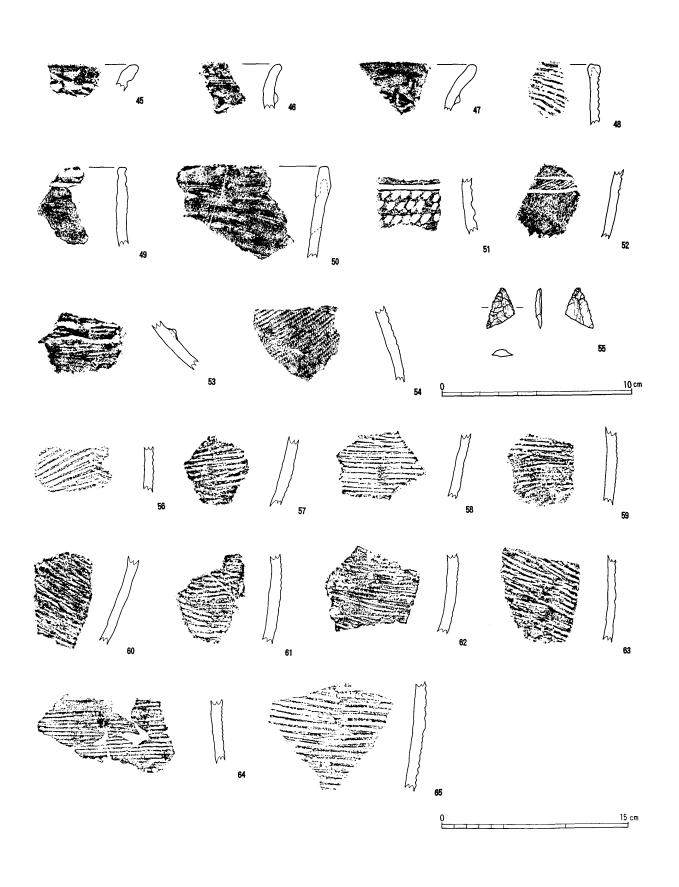




第12図 B地区出土遺物実測図〈1〉(1:4)



第13図 B地区出土遺物実測図〈2〉(1:4)



第14図 B地区出土遺物実測図〈3〉(1:3)

3. C地区の調査

(1) 遺 構

C地区は段丘上に立地し、今回の調査区のなかでは最も面積が広い。調査前の地目は植林地であったが、さらに以前は畑地であったこともあると伝えられている。そのためか、地境を示すとみられる石列がほぼ字切図の通りに現地で確認することができた。

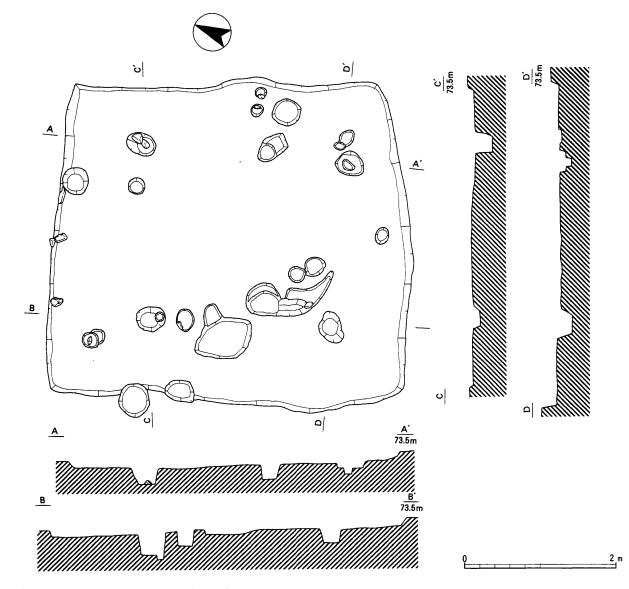
調査区全体を通じて、表土直下はすぐに地山であり、表土層も浅いところでは数cmしか堆積しておらず、このため遺構面は本来より相当削平を受けていると考えられる。

遺構は弥生時代の竪穴住居跡12棟、掘立柱建物 4 棟、B地区でみられたような平地式の住居跡 2 棟が 検出された。また、出土遺物もほとんどが弥生時代に限られるが、調査区の南西方でわずかに山茶椀が出土している。C地区ではB地区でみられたような縄文晩期の遺物もほとんどみられず、従って当地区で出土した石製品は弥生時代に属する可能性が大きいと考えられる。

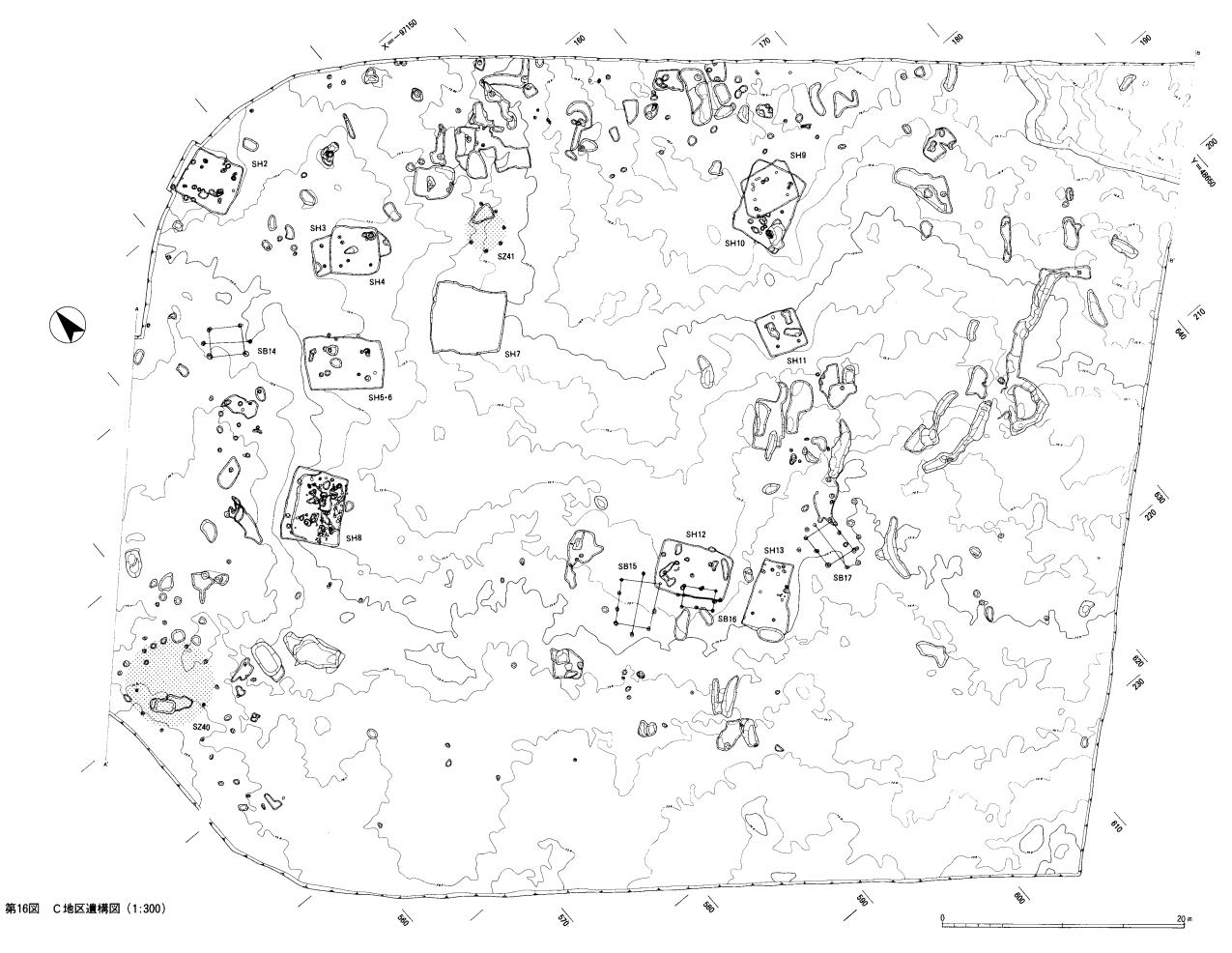
竪穴住居跡SH2 (第15図)

長辺4.7m、短辺4.2mの若干長方形の平面形となる。主柱穴と考えられる小柱穴を4個所検出できた。しかし、炉跡は現状では確認できず、埋土中にも焼土等は混入しておらず、炉がほとんど使用されなかったか、あるいは竪穴住居自体の使用期間が短かったとみるべきであろう。

出土遺物は、埋土中から弥生土器が若干みられた



第15図 竪穴住居跡SH2実測図(1:50)



のみで、住居床面から出土したと考えられるものは なかった。

竪穴住居跡SH3・4 (第18図)

重複するSH3およびSH4は、SH3が古く住居跡のほぼ半分ほどがSH4によって破壊されているが、主柱穴は確認できた。

SH3は残存部分からすると、平面形が一辺3mほどの正方形の住居跡とみられ、SH4は一辺4mほどの同じく正方形であり、SH3よりひとまわり大きい。ともに主柱穴は4本からなる。また、炉跡は焼土などの痕跡を含め、どちらからも確認することができなかった。

遺物はSH4に伴う弥生土器が若干出土した。

竪穴住居跡SH5・6 (第20図)

竪穴住居の平面形では重複がみられなかったが、 主柱穴と考えられる4本単位のピットが2組確認で きたため、2棟の竪穴住居の存在を考えた。

現状では長辺6.5m、短辺4.3mの長方形の平面形を呈すが、これがSH5とSH6のどちらの平面形を示すものかは明らかにし難い。やはり炉跡は確認

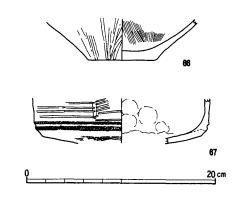
できなかった。埋土中より弥生土器が若干出土した。

竪穴住居跡SH7 (第20図)

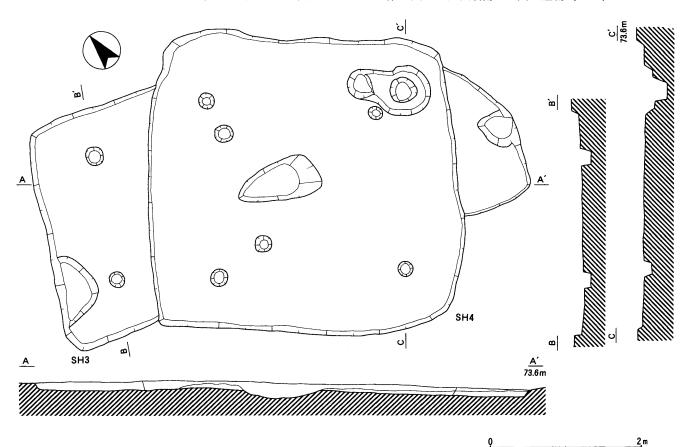
竪穴状の掘り込みのみが検出され、主柱穴などはまったく検出できなかったが、遺構埋土や周辺の状況などから、竪穴住居跡と考えて誤りはないものと思われる。長辺6 m、短辺5.6mのやや長方形となる。埋土から若干の弥生土器が出土した。

竪穴住居跡SH8(第22図)

長辺6m、短辺4.7mの長方形の平面形を示す。



第17図 竪穴住居跡SH4出土遺物(1:4)



第18図 竪穴住居跡SH3・4実測図(1:50)

住居跡内から多数の大小の礫が乱雑に混じっていた。 なかには石斧の原石として使用可能なものも含まれ ており、礫の一部は住居内に持ち込まれたものもあっ たのではないかと思われる。

やはり炉跡は明瞭でなく、弥生土器が若干出土した。

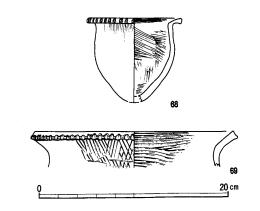
竪穴住居跡SH9・10(第27図)

2棟が重複して検出されたが、SH9が古い。

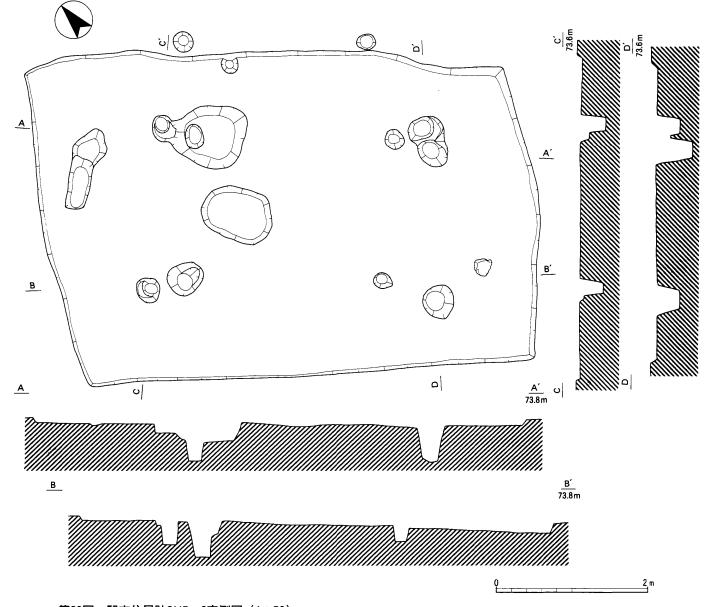
SH9は平面形が長辺4.4m、短辺3.5mとやや長 方形に近く、SH10の方は長辺6.3m、短辺4.5mと 長方形となる。

SH9では炉跡が確認できなかったが、SH10は ややに片寄った位置に焼土がみられ、炉跡の可能性 が大きい。しかし焼土は薄く、炉があまり使用されていなかったような印象を受ける。

またSH10の南隅付近に土坑状の落ち込みが検出



第19図 竪穴住居跡SH5・6出土遺物(1:4)



第20図 竪穴住居跡SH5・6実測図(1:50)

されたが、木の根との重複もあり、SH10に本来伴うものであったは明らかでない。

出土遺物はSH9に伴うとみられるものが若干あるほか、SH10からは2個体分の壷が一括して出土した。

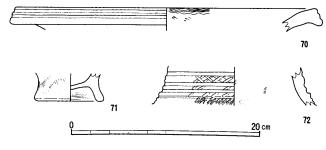
竪穴住居跡 S H 11 (第30図)

一辺3.5mほどの正方形の竪穴住居跡で、他の竪穴住居跡と比べるとやや小型である。炉跡は確認されず、埋土中より若干の弥生土器が出土している。

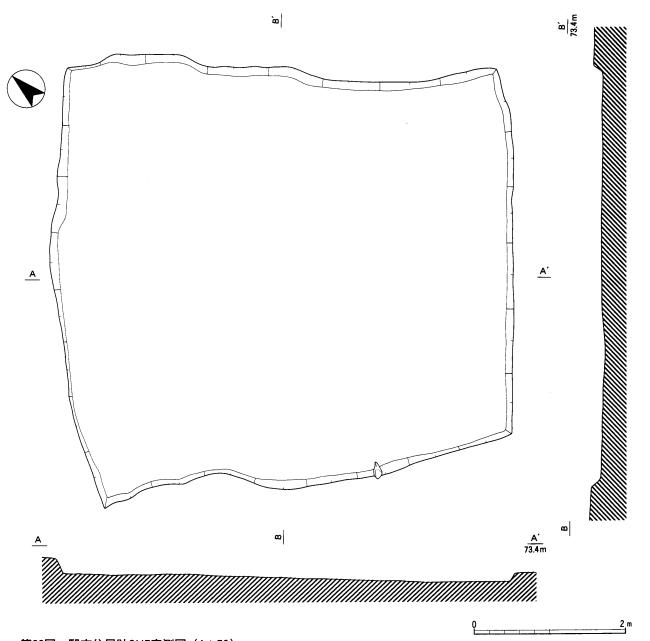
竪穴住居跡 S H 12 (第32図)

長辺6 m、短辺4 mの長方形の竪穴住居跡で、掘立柱建物 S B15および S B16と重複する。住居内の

やや北に片寄った位置に石囲みを伴うとみられる炉 跡を確認した。炉の範囲は焼土の広がりや残存した 石囲みの状況から、一辺0.4mほどの方形のものであ る。



第21図 竪穴住居跡SH7出土遺物(1:4)



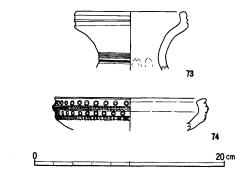
第22図 竪穴住居跡SH7実測図(1:50)

出土遺物は、埋土中から弥生土器がみられ、(86) は床面に近くに残されていた。

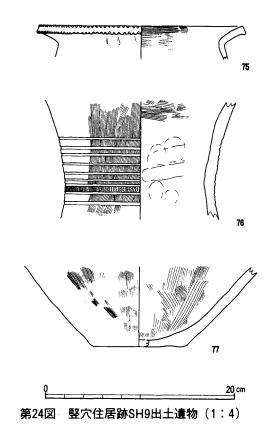
竪穴住居跡 S H 13 (第34図)

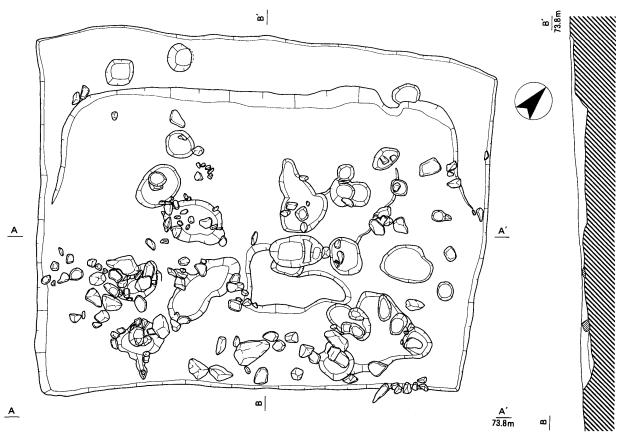
長辺6 m、短辺は北側で2.5mをはかり、現状ではかなり長方形となるが、やや歪な平面形となることと、主柱穴から考えると2棟が重複している可能性もあるが、検出時の状況や土層観察からも確定はできなかった。

炉跡は確認できず、住居跡の南側は木の根による



第23図 竪穴住居跡SH8出土遺物(1:4)

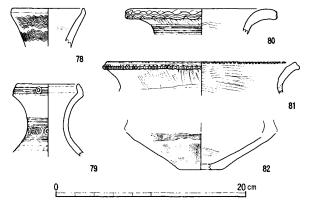




第25図 竪穴住居跡SH8実測図(1:50)

と思われる土坑状の浅い落ち込みに切られている。 出土遺物は、埋土中から若干の弥生土器がある。 掘立柱建物 S B 14 (第35図)

SH5·6の北西方向にあり、独立棟持ち柱を伴う1間×1間の建物である。柱間間隔は、梁方向がやや



第26図 竪穴住居跡SH10出土遺物〈1〉(1:4)

狭く2.4mほど、棟方向は2.9mとなる。

柱穴内からは出土遺物はなかった。

掘立柱建物SB15(第35図)

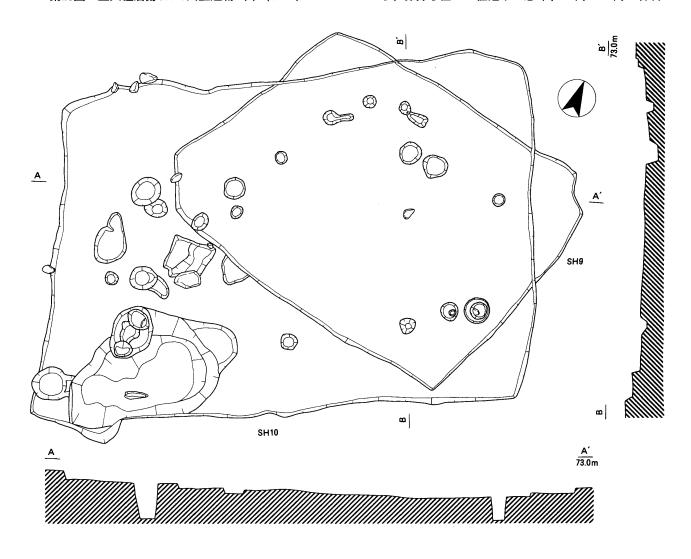
SH12と一部が重複するが、独立棟持ち柱を伴う 1間×3間の建物で、南側棟方向の柱が一間分、遺 構検出面に砂礫層が露頭しているためか検出できな かった。

やや平面形は歪であり、柱間間隔は梁方向が広く、 2.9mほど、棟方向は、1.2mほどとなる。

柱穴内からは出土遺物はみられなかった。

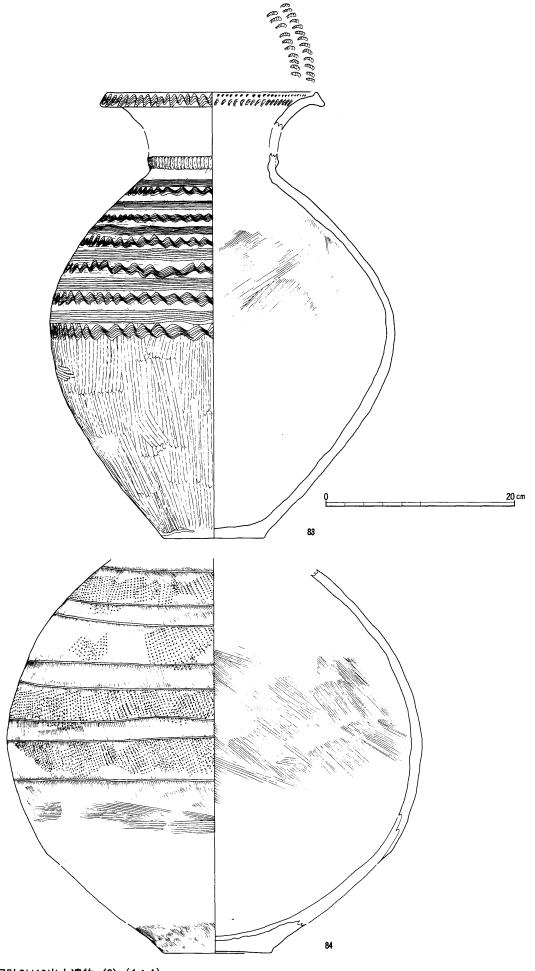
掘立柱建物SB16(第36図)

SH12と重複し、やはり独立棟持ち柱を伴う1間×2間の建物となると思われるが、梁方向が2間としても捉えることが可能なピットも存在する。しかし、棟持ち柱との柱通りは悪く、1間×2間の棟持



0 2 m

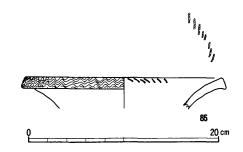
第27図 竪穴住居跡SH9·10実測図(1:50)



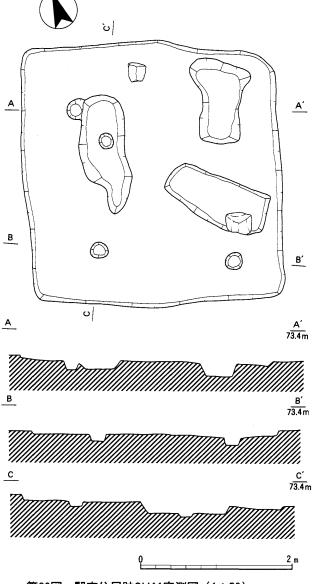
第28図 竪穴住居跡SH10出土遺物〈2〉(1:4)

ち柱建物か2間×2間の側柱建物かの判断は微妙である。ただ、他の掘立柱建物すべてに独立棟持ち柱が伴うことから、前者の建物構造を考える方が妥当と思いたい。

そうすると柱間間隔は、梁方向で1.7m、棟方向で



第29図 竪穴住居跡SH11出土遺物(1:4)



第30図 竪穴住居跡SH11実測図(1:50)

1.3mをはかる。

柱穴内から出土遺物はなかった。

掘立柱建物SB17(第36図)

独立棟持ち柱が伴い、1間×2間の建物である。 柱間間隔は、梁方向で2.4m、棟方向で1.4~1.5m をはかる。

柱穴内から出土遺物はなかった。

住居跡 S Z 40・41

B地区で検出されたものと同様、環状にめぐる柱 穴のまとまりである。S Z 40は径 7 mほどの範囲に、 S Z 41は径 4 mほどの範囲に広がりをもつと思われ る。炉跡や柱穴内の出土遺物などは確認されなかっ た。

(2) 遺物

C地区からは縄文晩期から弥生時代中期にかけて の土器および石器が多く出土しているほか、わずか ではあるがC地区南隅の方で山茶椀がみられた。

土器類

遺構出土のものとしては竪穴住居跡から弥生土器 を中心とした遺物が出土している。

竪穴住居跡 S H 4 出土の遺物として (66·67) がある。

- (66) は壷の底部片で、外面をタテ方向にヘラミガキし、内面をハケメ調整している。
- (67) は磨消線文系壷と呼ばれているもので、底 部近くで強く張る特徴的な器形で、キザミメ突帯の 上を磨消線が横走りする。中期中葉に比定される。

竪穴住居跡SH5・6出土の遺物として、甕(68・69)がある。(68)は口径9.8㎝の小型の甕で、外反する口縁部の口唇部にキザミメが施され、体部はハケメ調整する。

(69) は口唇部下端にキザミメを加え、外面には タテ方向に、内面にはヨコ方向に粗いハケメを施す。 (68·69) とも弥生中期に比定されるものである。

竪穴住居跡SH7からは、広口壷(70)および壷 頸部(72)、台付甕の脚台部(71)などが出土した。

(70)の口唇部には二条の凹線文が施され、口縁部内面には波状文も認められる。(71)は低い脚台部片で、外面にハケメが施されている。(72)は、凹線間に斜格子文や刺突文を施す。

(70) は中期後葉に比定できるもので、(71·72) もこれに矛盾するものではないと思われる。

竪穴住居跡 S H 8 からは受口壷 (73·74) などが出 土した。

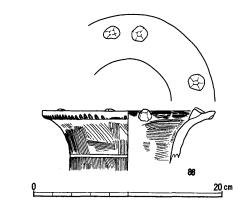
(73) は口縁部外面に二条の凹線をめぐらし、頸部にも櫛描きの直線文を施す。(74) は口縁部外面に 竹管文と細かな刺突を加えた隆帯を交互に施す。

これらは中期後葉に比定できるものである。

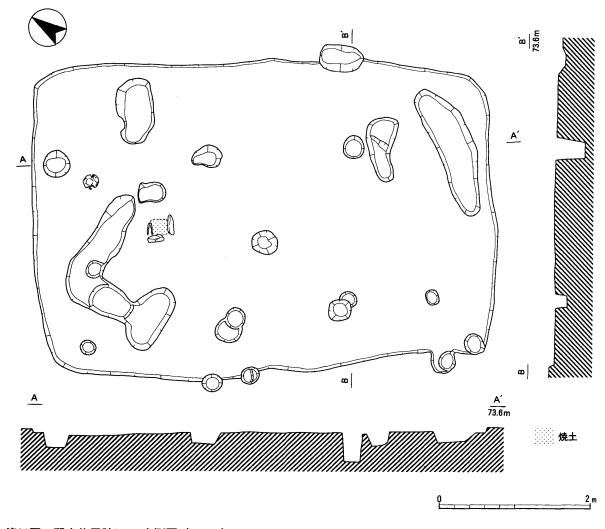
竪穴住居跡 S H 9 からは壷頸部 (76) および壷底部 (77)、甕 (75) などが出土した。

(76) は外面に9条の凹線をめぐらし、凹線間の一部には貝殻腹縁による鱗状の刺突が施されている。 (77) は器壁の厚さや体部の開き具合などから壷の底部と思われる。甕(75) はくの字に外反する口縁部の口唇部の上端と下端にそれぞれキザミメを施す。 これらは中期後葉に比定できる。 竪穴住居跡 S H10からは細頸壷 (78·79·82)、広口 壷 (80·83·84)、甕 (81) などがある。

(78) は口縁部が外上方に開き端部が直上に立ち上がる。外面には波状文が施される。(79) は口縁部が内折するもので、口縁部外面には直線文上に竹管文を押圧した円形浮文を貼り、頸部でも直線文間の



第31図 竪穴住居跡SH12出土遺物(1:4)



第32図 竪穴住居跡SH12実測図 (1:50)

貝殻腹縁による鱗状の刺突の上に同様の円形浮文を 貼りつける。

広口壷(83)は口唇部に波状文をめぐらし、口縁 部内面に二条単位に刺突文をめぐらす。頸部には細 かな押し引きを加えた突帯を貼りつける。体部外面 上半には直線文と波状文を交互にめぐらしている。

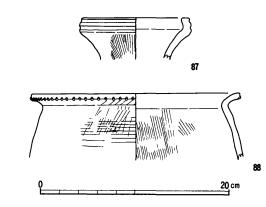
- (84) は口頸部を欠くが、球形に近く膨らむ体部の外面はハケメ調整ののち、沈線で区切った文様帯と無文部を交互に配し、文様帯内には刺突による擬縄文をめぐらす。
- (80) は強く外反する口縁部は器壁が厚く、口唇部 下半は波涛を描く。頸部には直線文が施されている。
- **甕**(81)は口唇部の上下端にそれぞれキザミメを 施す。

以上のような竪穴住居跡 S H10出土の土器は、弥 生中期中葉の特徴をもつものである。

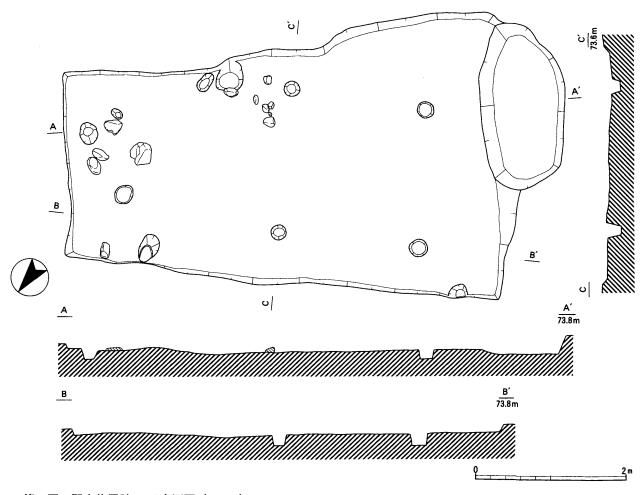
竪穴住居跡 S H11出土遺物のうち、(85) は広口壷

の口縁部であり、口唇部に波状文、口縁部内面に刺 突文をめぐらす。

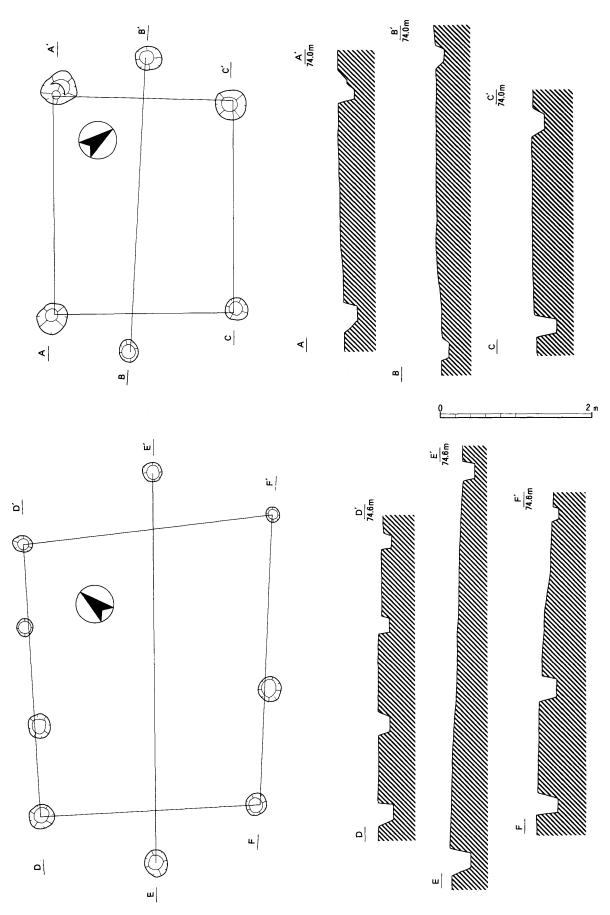
竪穴住居跡 S H12出土遺物には(86)のような広口壷があり、口縁部内面に 2 個を 1 対にした 4 単位の瘤状突起がつく。口唇部には下端近くにキザミメを施す。また、頸部外面には沈線が 1 条めぐらされている。弥生中期中葉に比定できよう。



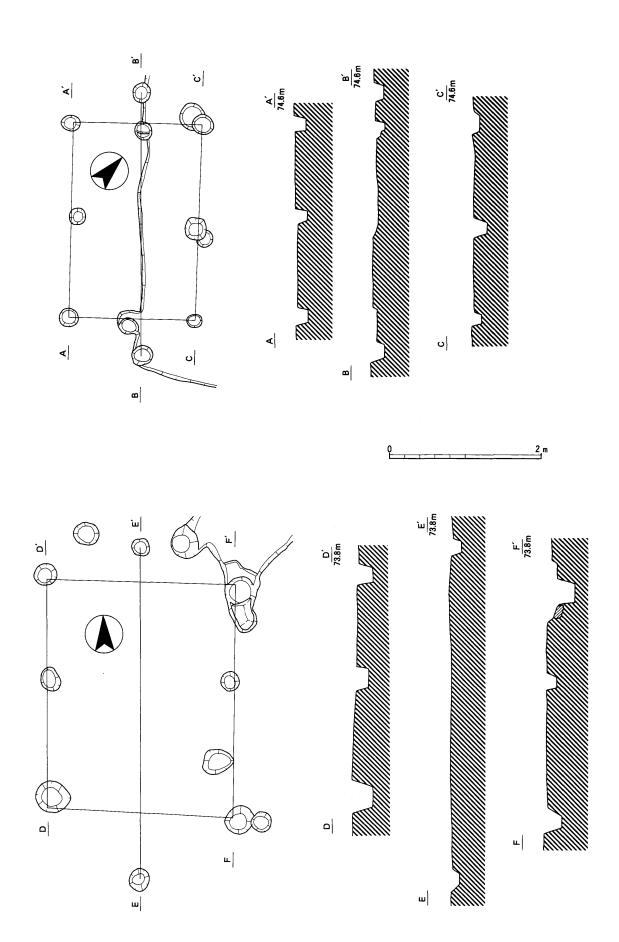
第33図 竪穴住居跡SH13出土遺物(1:4)



第34図 竪穴住居跡SH13実測図(1:50)



第35図 掘立柱建物SB14 (上) · SB15 (下) 実測図 (1:50)



第36図 掘立柱建物SB16(上)・SB17(下)実測図(1:50)

竪穴住居跡 S H13からは受口壷 (87)、甕 (88) などが出土している。

受口壷(87)は口縁部外面に2条の凹線がめぐる。 残存部分が限られるが、頸部は無文のようである。

甕(88)は強く外反する口縁部の口唇部下端にキザミメをめぐらす。(87·88)とも、中期後葉に比定できると思われる。

その他、遺構以外出土の土器として、(89~188) があり、縄文土器 (178~181) および山茶椀 (176・ 177) を除くと、すべて弥生土器である。

縄文土器 (178~181) のうち、(181) は口縁部下 に突帯をもつ浮線文系の浅鉢で、口縁部内面には 1 条の沈線をめぐらす。

弥生土器 (89~175·182~188) は、受口壷 (89~104)、広口壷 (105~113)、袋状口縁壷 (114~116)、 **甕** (117~144)、無頸壷 (150)、鉢 (151) などがあり、受口壷は口縁部外面に凹線文を施すもの (89·90·94~97·99·102·103) や無文のもの (91·92)、貝殼腹縁による刺突を施すもの (93·100)、波状文を施すもの (98)、棒状浮文と波状文からなるもの (101)、波状文と口縁部下端にキザミメをめぐらすもの (104) などがある。

また、頸部は無文のもののほか、直線文をめぐらすもの $(92\cdot100\cdot101)$ 、直線文と波状文からなるもの $(97\cdot104)$ 、沈線を施すもの (98) などがある。

広口壷のうち、口縁部内面に瘤状の突起をもつもの (105·106·108) があるほか、口唇部を刺突するもの (105·106·111)、タテ方向にキザミメを施すもの (107·110·112)、簾状文風に原体を細かく休止しながら一周するもの (108)、斜格子状にキザミメを施すもの (109) などバラエティに富む。

(114~116) は鉢あるいは袋状口縁壷となるもので、口縁部上半に凹線を3条程度めぐらすもので、やや大型の器形となるものが多い。

要のうち、口縁部が単純に外反するもの(117~143)が多いが、(144)のように受口状口縁となるものもある。口唇部には全面、下端のみあるいは上端と下端にキザミメを施すもの(120~134·136~143)が大半を占めるが、無文のもの(117·135)も若干みられる。

頸部にハケ原体による直線文を施すもの(120・124・

125·128·131·135·143) があり、(117) には器壁に刺突を加えている。また、(144) は、外面全体に粗いハケメを施すものと思われる。

無頸壷(150)は、口縁部下に竹管文をめぐらすほかは無文で、鉢(151)は外面に羽状に刺突を加え、 さらにその下に竹管文を施す。

脚台(169~171)のうち、(169)は台付鉢の脚台 部になると思われ、(170·171)は台付甕の脚台と思 われる。

(182~184) は頸部外面に数条の凹線をめぐらし、 体部外面に櫛描直線文とゆるやかな波状文を描く点 から、古井式など三河地方の系統に属する壷と思わ れる。

また(188)も体部外面に縦位の波状文を施す点は、同じく三河地方の土器に認められる特徴と共通する。 以上の弥生土器は、中期中葉~中期後葉に比定されるものである。

山茶椀(176·177)は遺構は確認されなかったが、 C地区で出土した数少ない歴史時代の遺物である。 その出土地点が集中することや土器の残存状態が良 好なことから、この時期の集落等の遺跡が近在し、 包含層遺物が広がっていたとは考えにくい。

(176·177) はいずれも直線的に開く体部をもち、 口縁部は丸くおさめる。高台には籾圧痕を残す。形 態からすると、鎌倉時代前半のものと考えられる。

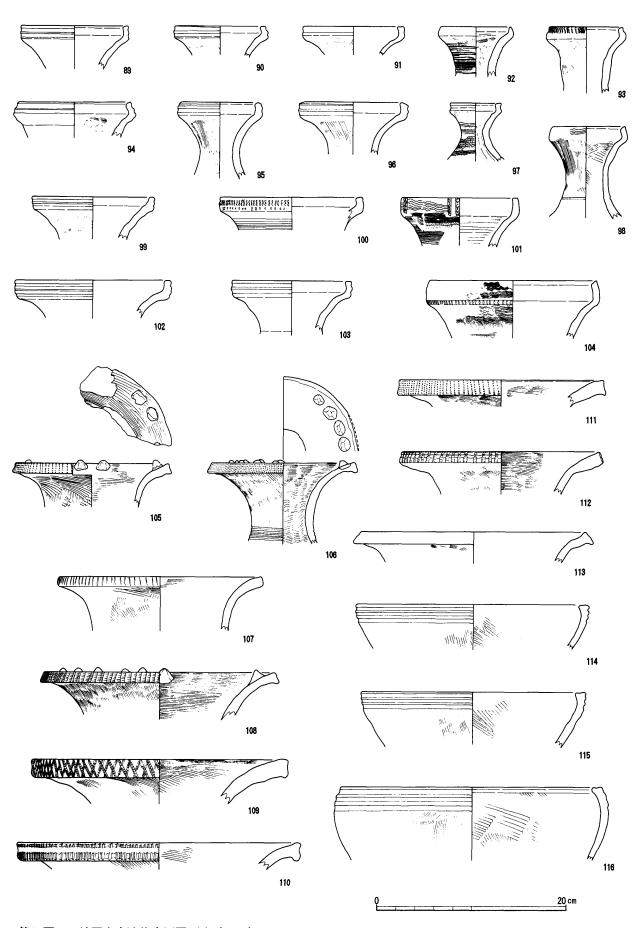
石器類

未成品を含めた磨製石斧 (189~256) が67点と最も多く出土した。石斧以外では、敲打具 (257~260)、叩石 (261~268)、石棒あるいは石剣と考えられる磨製棒状石製品 (269)、砥石および台石 (270~300)などがある。

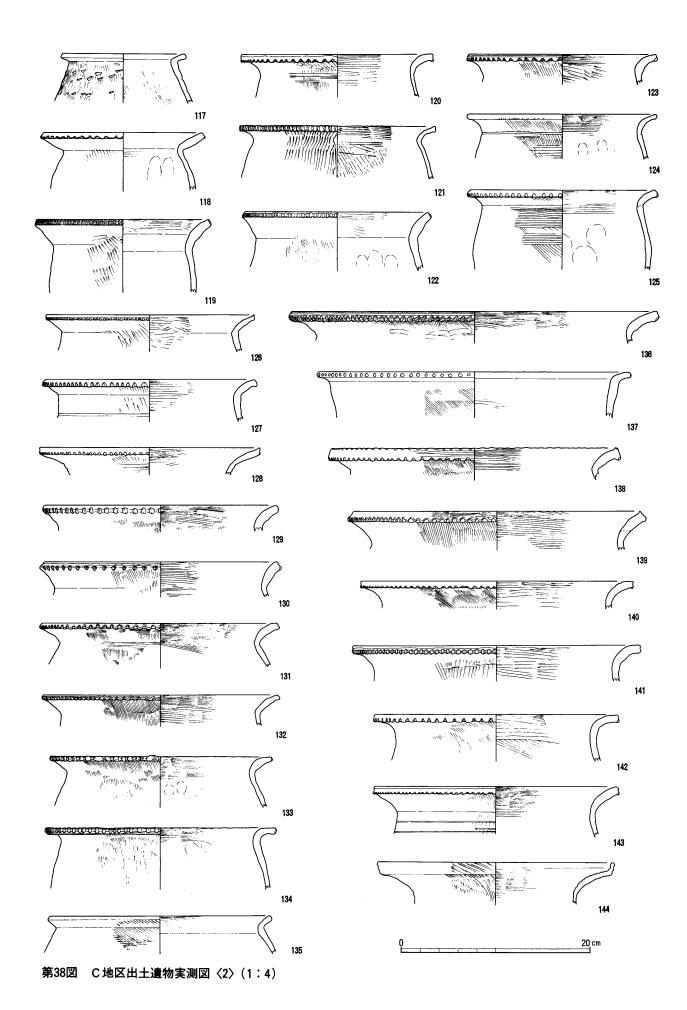
磨製石斧は未成品を多く含むが、少なくとも刃部 あるいは基部に研磨がみられるもの(234·236~240・ 242·243·248·256)は、石斧として使用されていた可 能性が大きい。

しかし、(234) は基部は剝離面を残したままであり、(235~237·240) については敲打痕を残し、いずれも基部の研磨はみられない。(239·240·248·256) についても基部に研磨が施されるものの、剝離面や敲打痕も多く残す。

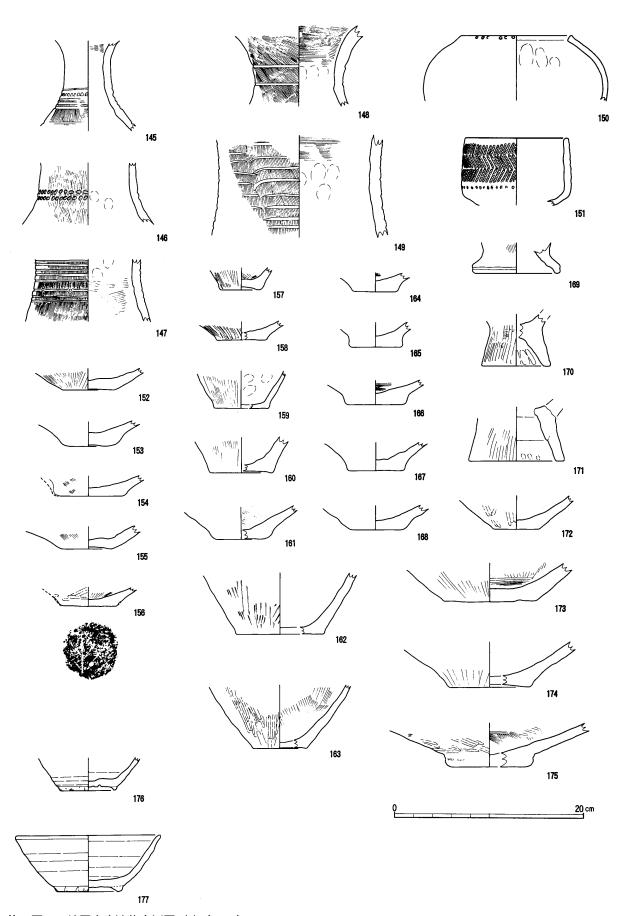
また磨製石斧には刃部形態や大きさ、重量感など



第37図 C地区出土遺物実測図〈1〉(1:4)



— 34 **—**



第39図 C地区出土遺物実測図〈3〉(1:4)

から判断して、その機能から伐採斧と加工斧があり、 弥生時代の場合、その形態から伐採斧は太型蛤刃石 斧、加工斧はさらに柱状石斧と偏平石斧とに分類し て呼ばれることが一般的に知られてきている。

C地区出土のものにも、伐採斧と加工斧の両方みられるが、その形態にばらつきがあり、未成品や破損品では厳密に分類しかねるものも含まれる。伐採斧の未成品のうち、刃部に相当する部分を欠損したものは、前述の例から製品として使用されていた可能性もあるが、原石面あるいは剝離面を残すもの(189~202)と敲打痕の認められるもの(203~233・235)とがあり、剝離整形から敲打調整へという製作工程上の各段階を示すものである。

加工斧のうち、柱状石斧 (241·244) はいずれも剝離面を残す未成品で、長さが15cmを超えるもの (244) と、10cmに満たない小型のもの (241) がある。

また偏平石斧 (245~256) はやや縦長の形態となるものが一般的で、通常片刃となる。長さは 6 cm程度のもの (245~248) と。それよりやや大きいもの (249~256) があるが、後者の場合でも10cm未満の長

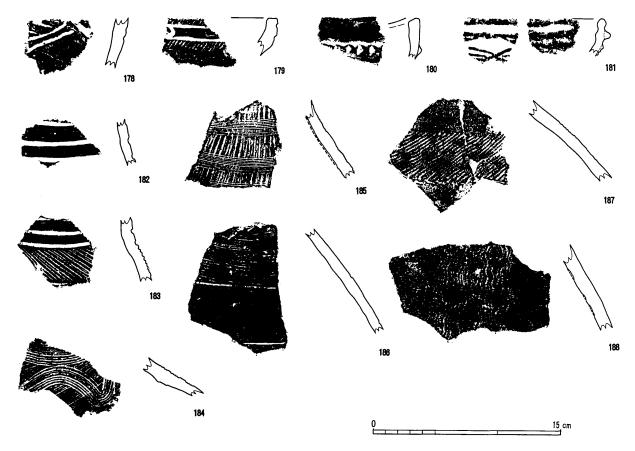
さにおさまるのではないかと思われる。

石斧製作に使用された石材は、ハイアロクラスタイトと呼ばれる変塩基性岩で、石材についてはV-1で詳述する。

蔵打具(257~260)は、石斧製作の際に用いる工具と考えられる。形態的な特徴として、拳大かそれ以下の大きさの礫塊で、敲打痕をもつ(259·260)か、敲打がすすみ、その結果敲打面が平滑化するもの(257·258)である。材質は石斧と同じハイアロクラスタイトとみられる。

叩石(261~268)は敲打具としたものと比べ、長 楕円形となるもので、その側縁や中央付近に敲打痕 をもつ。これらが、敲打具としたものと同様の用途 と考えるか、あるいは縄文~弥生時代でしばしば認 められる叩石・凹石そのものかは即断し難いが、敲 打具と異なり、石材がすべて砂岩である点は後者に 近いと考えるべきかもしれない。

石棒ないし石剣(269)は円柱状の磨製の石片で、 成品のごく一部分と考えられるため、全貌を復原し がたいが、石棒あるいは石剣の一部かと思われる。



第40図 С地区出土遺物実測図〈3〉(1:3)

砥石および台石(270~300)は、携帯可能な持ち砥石(270~276)、と通常携帯不可能な置き砥石あるいは台石(277~300)とがある。

後者の場合、(299) のように伐採斧の砥ぎ出しに 適するかのような縦断面が三角形となるものは置き 砥石として、鼠歯状痕の明瞭なもの(294) や砥ぎ減 りが認められない平坦な面をもつものは台石として の機能のみを考えればよいが、砥石か台石かの二者 択一的な区別のつけ難いものもある。

(3) 小 結

C地区は面積的に広範囲にわたる調査区であり、 大きな成果もあげることができた。遺構としては弥 生時代の12棟に及ぶ竪穴住居跡をはじめ、4棟の掘 立柱建物、B地区と同様の平地住居跡と考えられる 柱穴群などがあり、遺物としては磨製石斧の未成品 とその製作に伴う工具類の出土である。

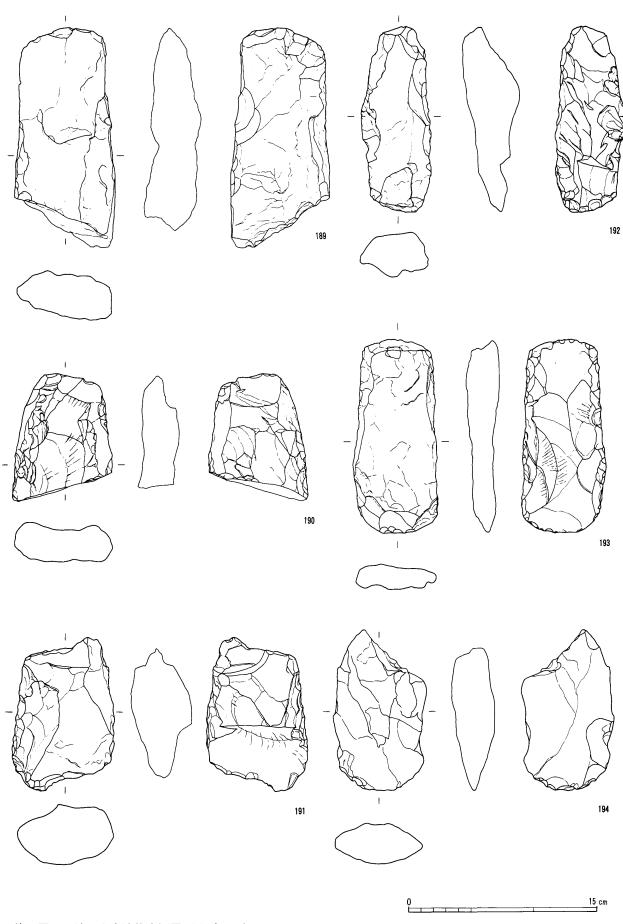
竪穴住居跡の広がりからすると、宮山遺跡全体としてはおそらくムラの中心部に近い部分であったと思われるが、なおC地区の東側に住居群が広がるのではないかと考えられる。

炉跡がみつかった竪穴住居跡は 2 棟のみで、そのうち S H 10は地床炉で、土坑状の掘り込みはなく、 S H 12も同じく地床炉であったが、石囲みをもつ構造であった。どちらもあまり焼土が顕著でない。 また、炉跡が検出することができなかった住居跡もあり、その使用頻度の寡少さが影響したものかもしれない。

磨製石斧の未成品および製作工具の出土は、宮山 遺跡で盛んに磨製石斧の製作を行っていたことを示 すもので、使用石材はハイアロクラスタイトと呼ば れる変塩基性岩で、組成的には玄武岩に類似する。

その原石は遺跡に隣接する青川の河原や遺跡内からでも入手可能で、原石採取から各製作工程を経て、 完成品に至るまでの一貫した生産ラインを維持していたようである。

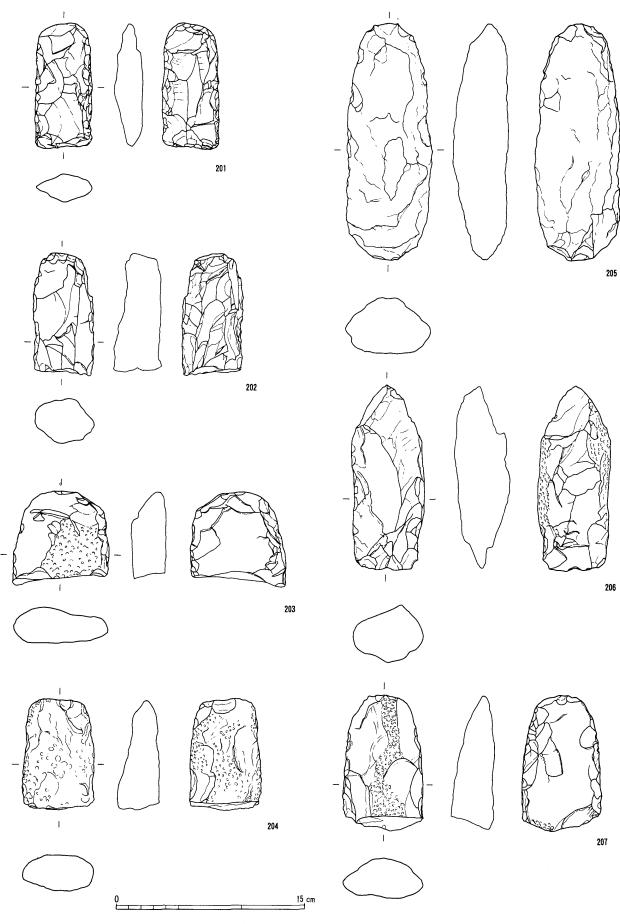
出土土器は若干の縄文土器、浮線網状文系の土器 や山茶椀などもみられたが、ほとんどが弥生中期の 土器で、中期中葉を中心とし、一部中期後葉に下る とみられるが、ほぼそれを最後に住居群が移動ある いは廃絶していくものとみられる。 土器は(144)などの受口状の口縁で粗いハケメを施す伊勢地方でも山麓部にみられるものは少なく、平野部の遺跡から出土する土器に近い。外来系の土器として(182~184・188)など、三河地方の特徴をもつものが若干認められる。宮山遺跡よりさらに員弁川を上流に遡った北勢町東村城跡でも、瓜郷系の壷が出土するなど、北勢北部山麓部と三河地方との交流をうかがい知ることができる。



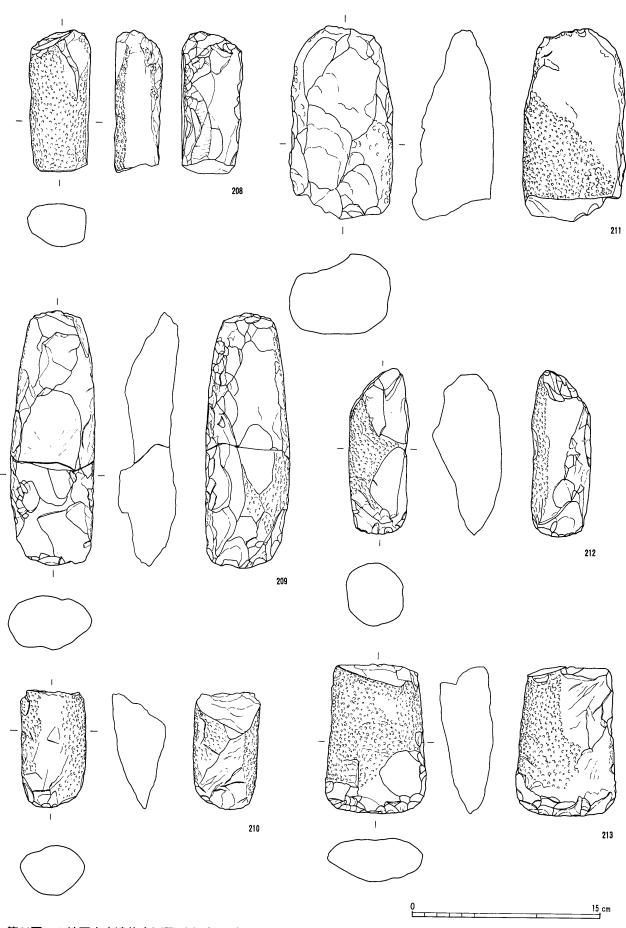
第41図 C地区出土遺物実測図〈5〉(1:3)



第42図 C地区出土遺物実測図〈6〉(1:3)



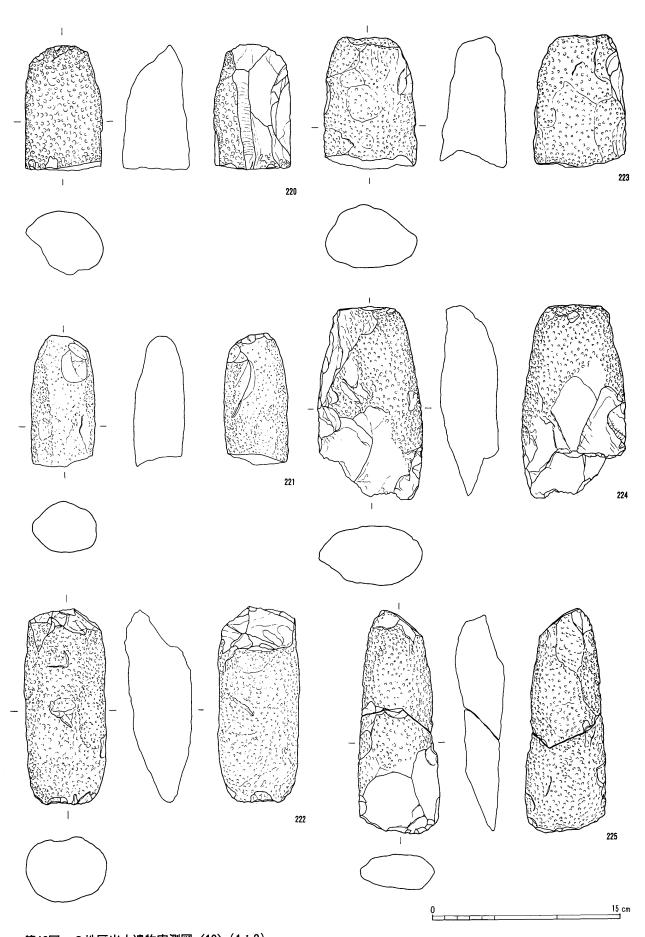
第43図 C地区出土遺物実測図〈7〉(1:3)



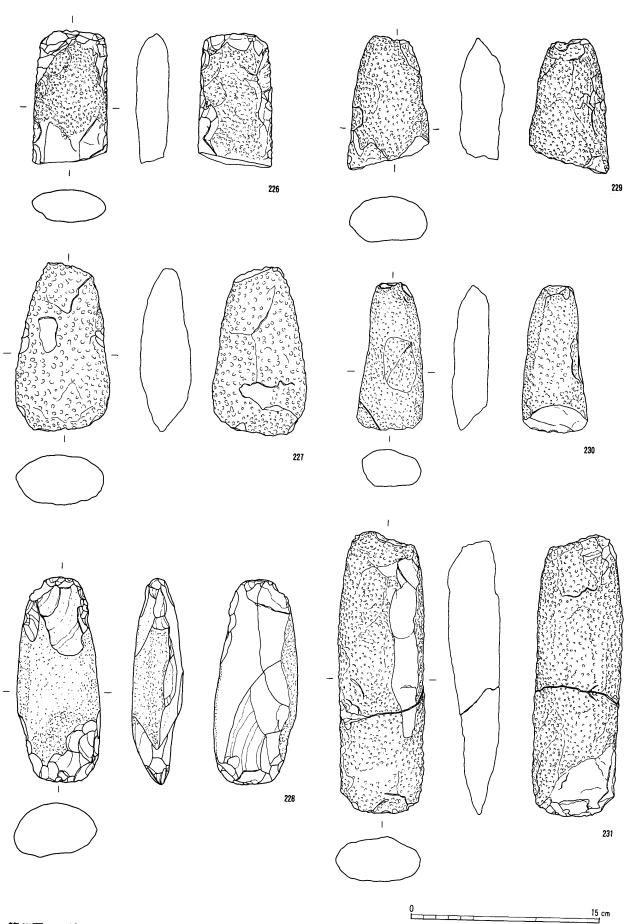
第44図 C地区出土遺物実測図〈8〉(1:3)



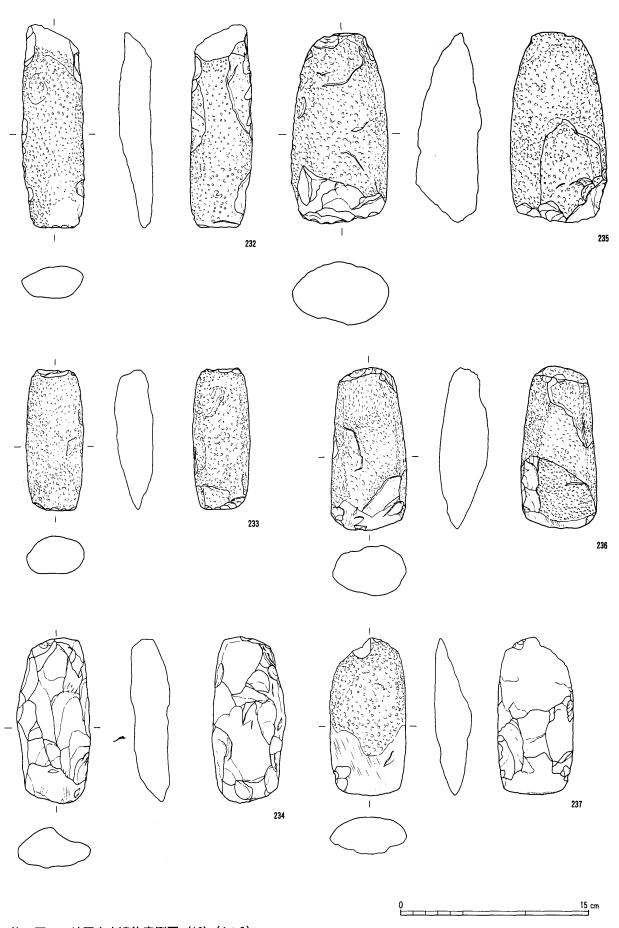
第45図 C地区出土遺物実測図〈9〉(1:3)



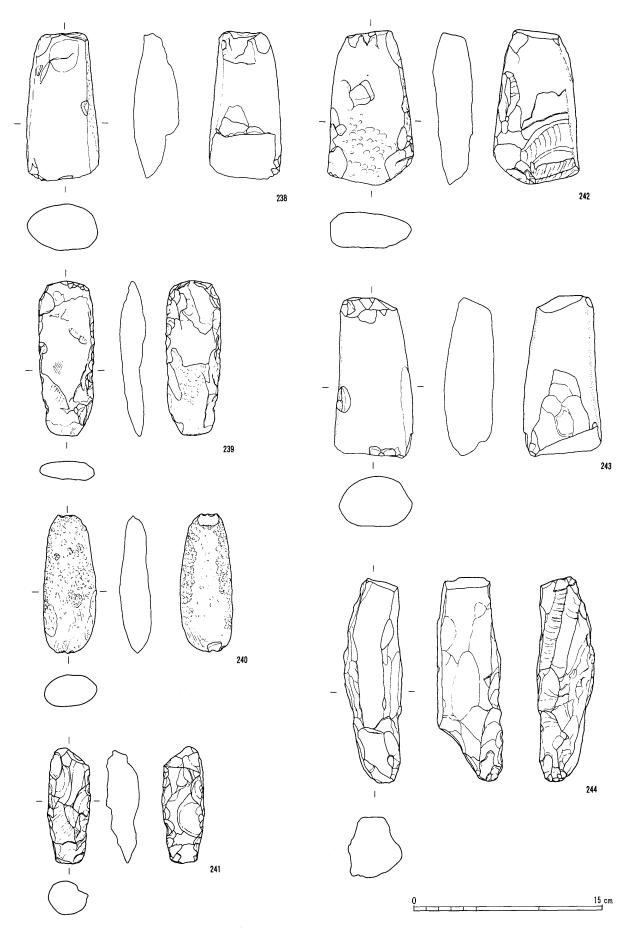
第46図 C地区出土遺物実測図〈10〉(1:3)



第47図 C地区出土遺物実測図〈11〉(1:3)



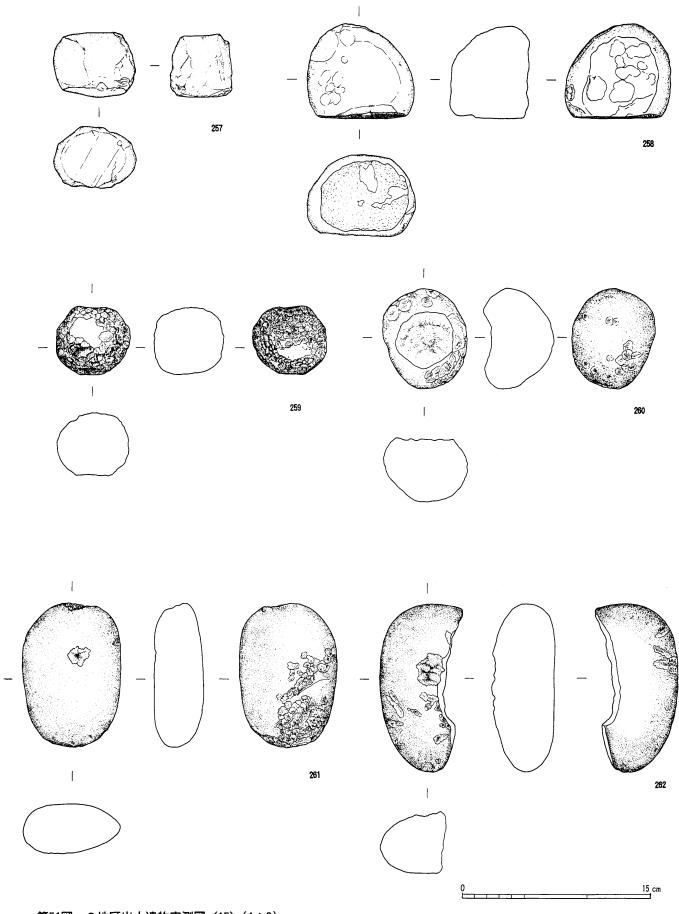
第48図 C地区出土遺物実測図〈12〉(1:3)



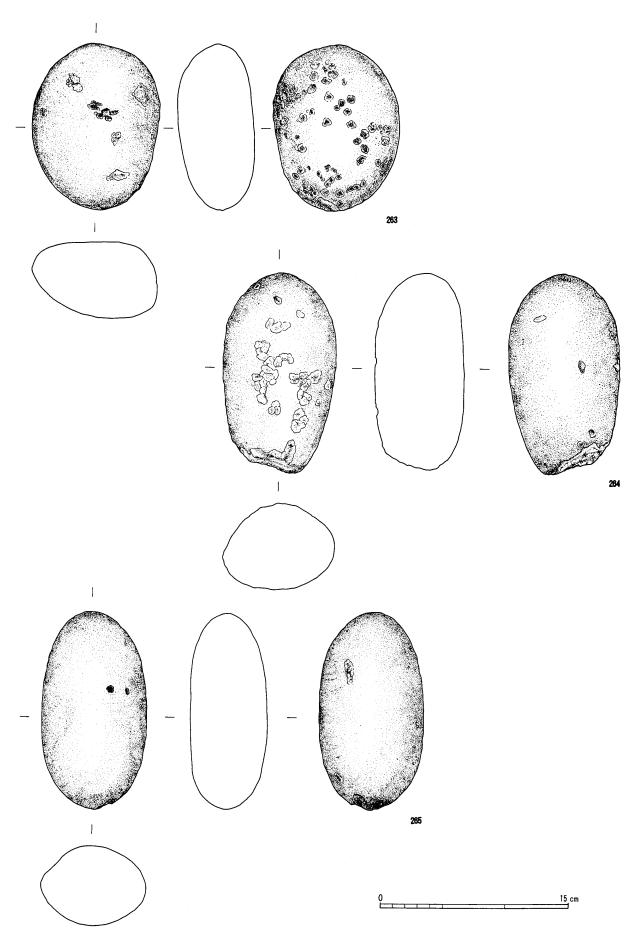
第49図 C地区出土遺物実測図〈13〉(1:3)



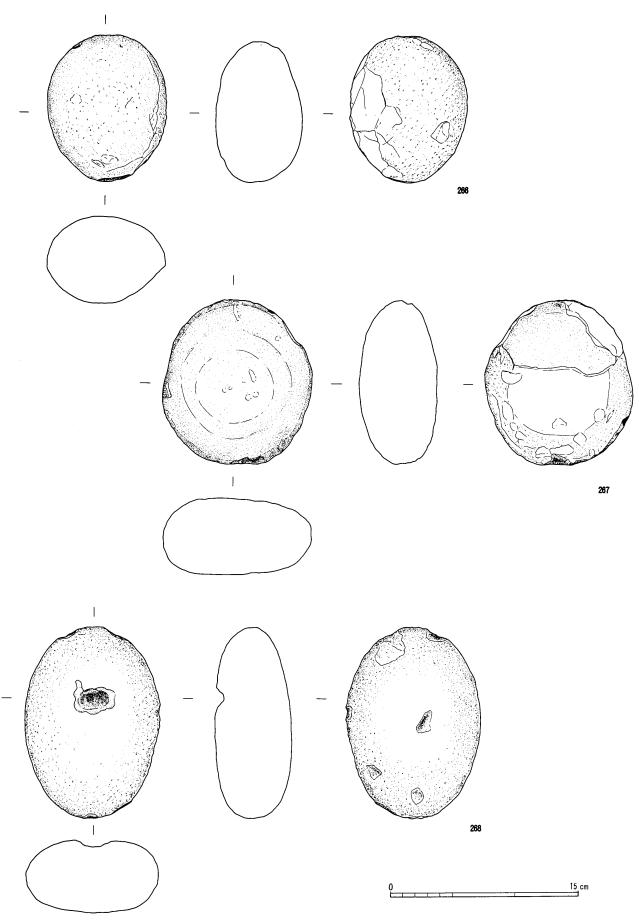
— 47 —



第51図 C地区出土遺物実測図〈15〉(1:3)



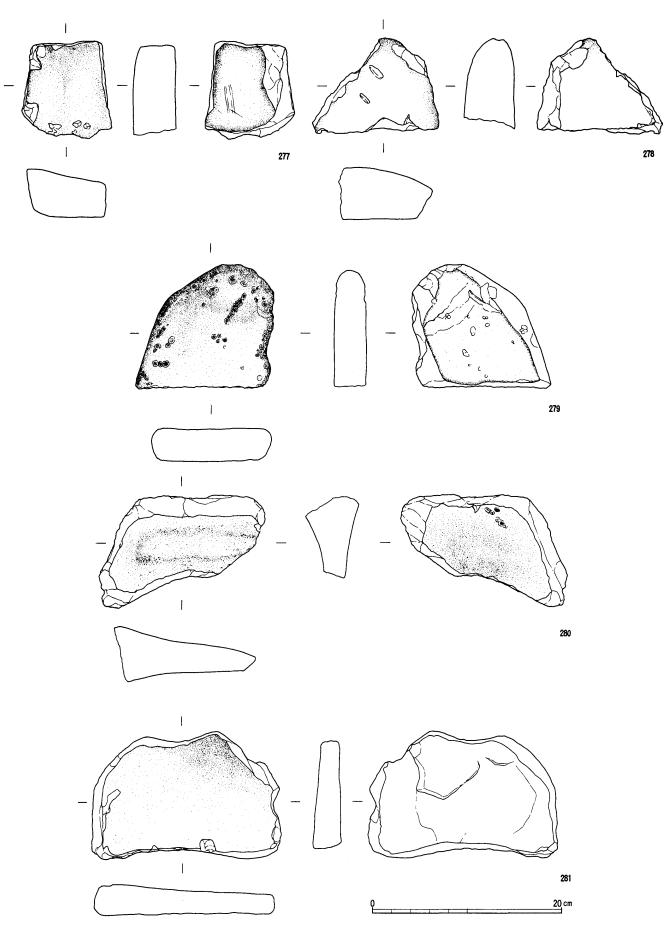
第52図 C地区出土遺物実測図〈16〉(1:3)



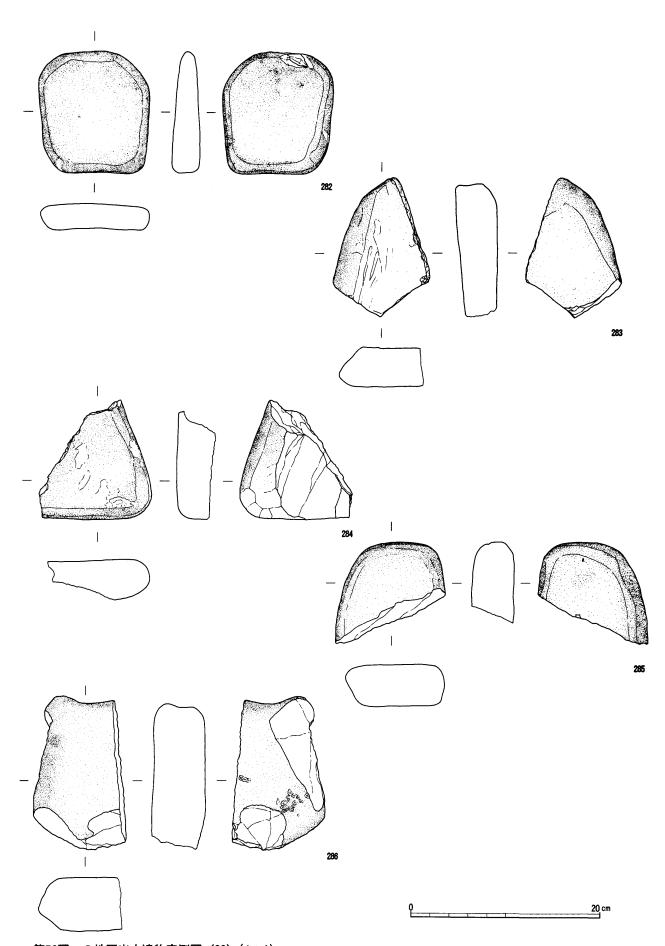
第53図 C地区出土遺物実測図〈17〉(1:3)



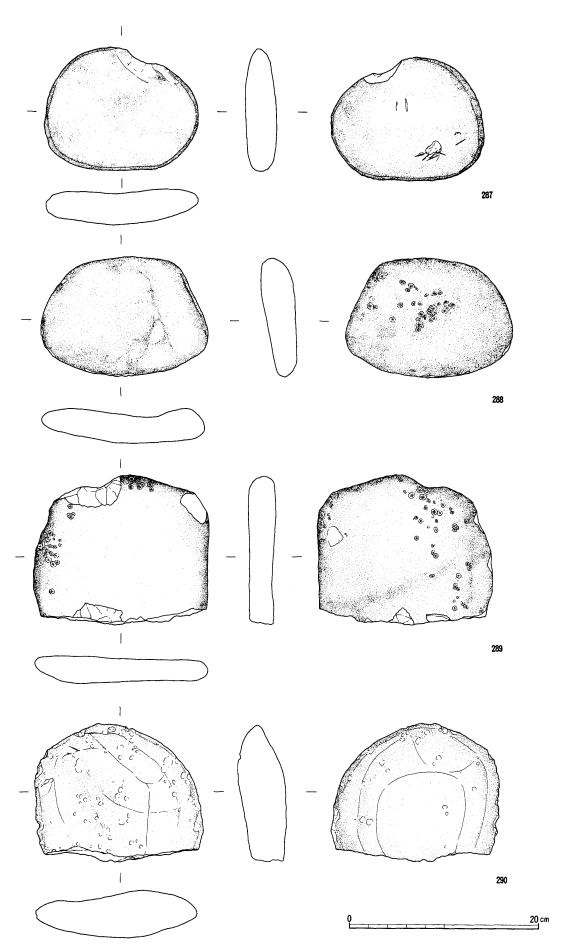
第54図 C地区出土遺物実測図〈18〉(1:3)



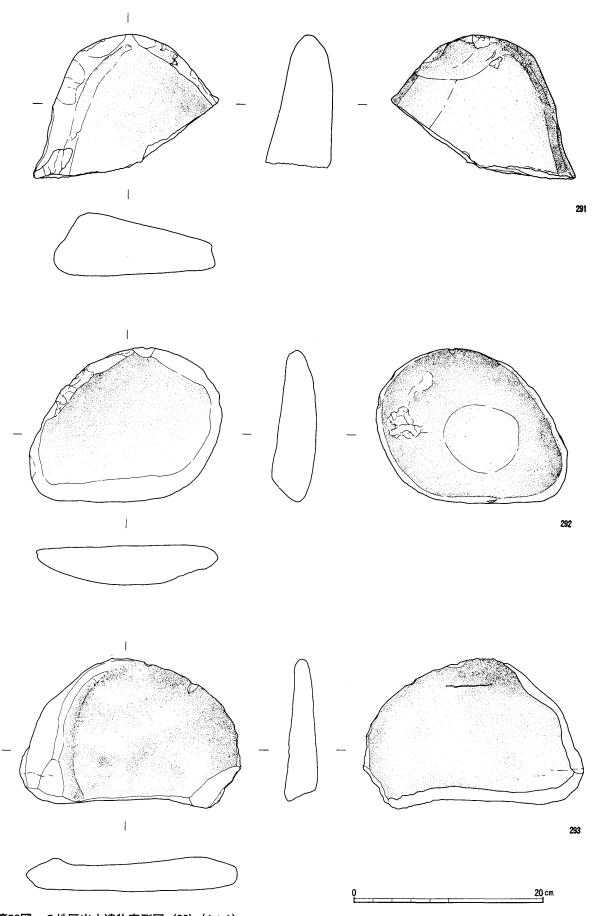
第55図 C地区出土遺物実測図〈19〉(1:4)



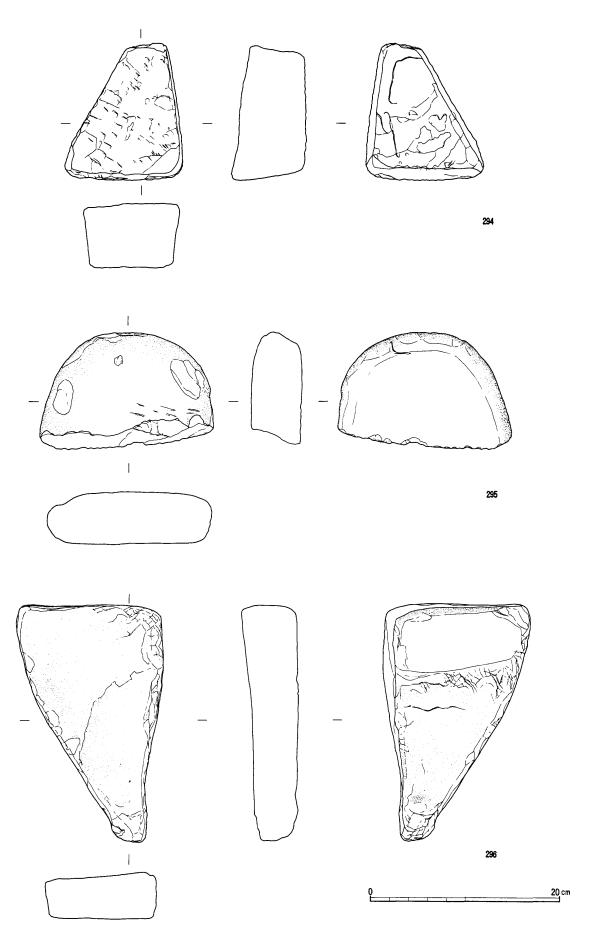
第56図 C地区出土遺物実測図〈20〉(1:4)



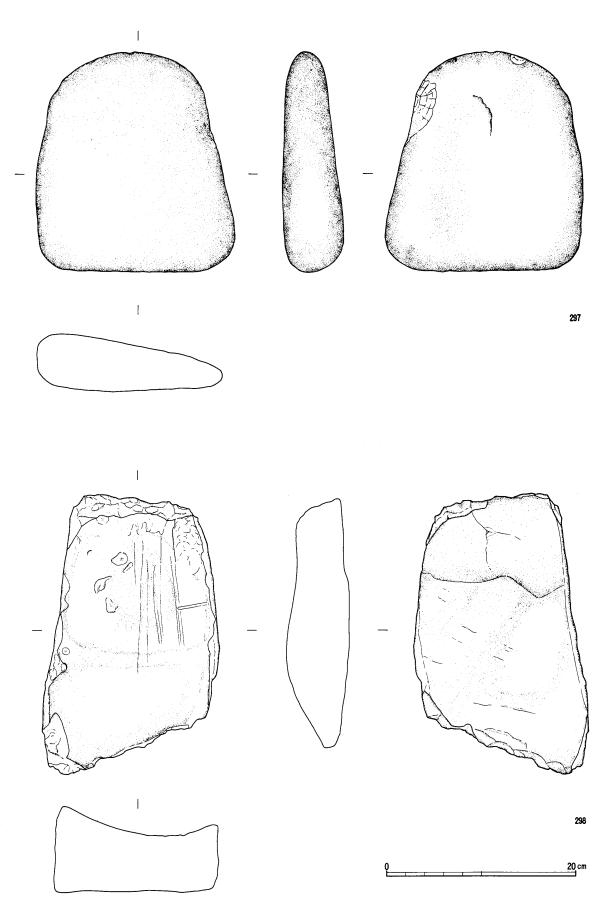
第57図 C地区出土遺物実測図〈21〉(1:4)



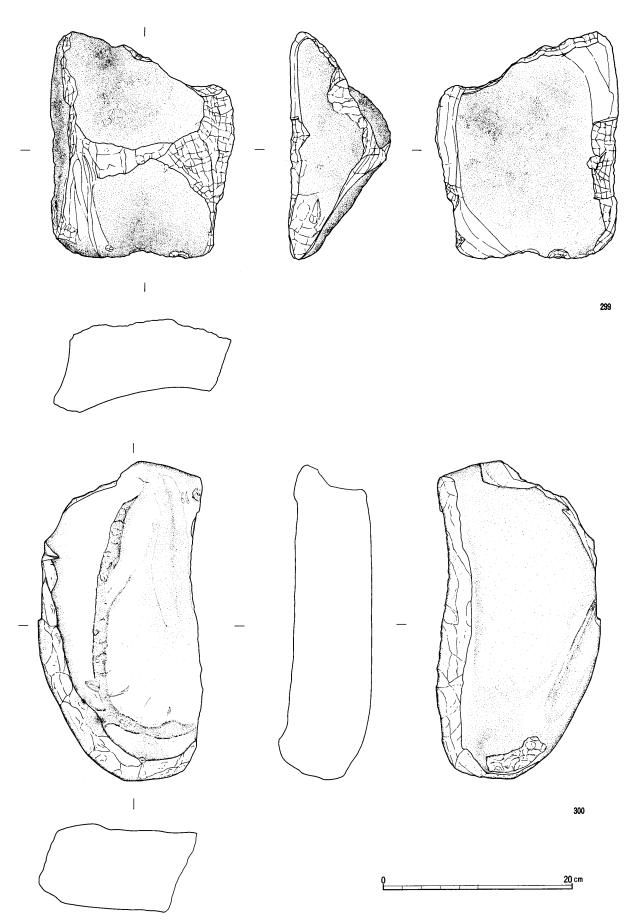
第58図 C地区出土遺物実測図〈22〉(1:4)



第59図 C地区出土遺物実測図〈23〉(1:4)



第60図 С地区出土遺物実測図〈24〉(1:4)



第61図 C地区出土遺物実測図〈25〉(1:4)

4. D地区の調査

(1) 遺 構

D地区はC地区の東南部と隣接する調査区であるが、地元で「クロクワ」と呼ばれる土壌の天地返しが広範囲にわたって行われており、さらに風倒木を含めた樹木の根による撹乱のため、調査区のかなりの部分で遺構検出を困難にしている。

従って若干の柱穴などを除くと、明らかな遺構と呼べるものは認められず、C地区の竪穴住居跡群も D地区までは広がっていないようである。

遺物は縄文土器を中心に包含層中や撹乱土中から 出土しており、とくに縄文後期の土器が多い。弥生 土器はほとんどみられず、C地区との隔絶性は大き い。

(2) 遺物

出土した遺物の大部分は縄文土器で、若干の弥生土器を含む。縄文土器は深鉢および浅鉢があり、磨消縄文が施されるもの(301~332)、条線文が施されて

いるもの (333~352·358) が主体となるが、無文が 内外面とも研磨される精製の浅鉢 (360) やキザミメ を施した縦方向の隆帯をもつもの (353)、円形の刺 突文を口縁部に施した波状口縁のもの (355·356) な どがある。

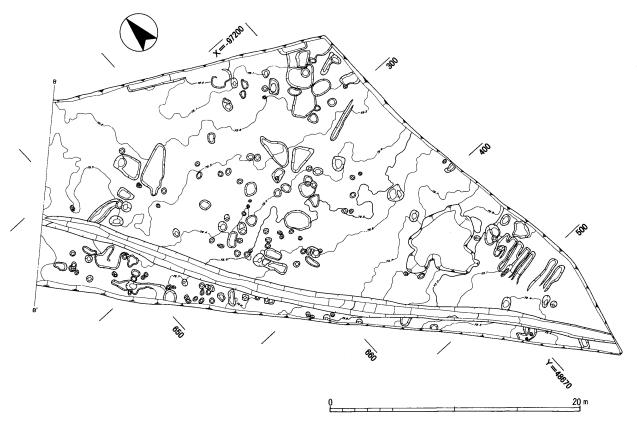
磨消縄文を施すもの(301~332)は、やや幅広の 沈線間に縄文または擬縄文をもつもので、口縁端部 の拡張も顕著でないものが多く、後期初頭の中津式 の範疇におさまる一群と思われる。

弥生土器 (361~366) は細頸壷、甕などがあり、 細頸壷 (361) は口縁部外面に波状文をもつ。(362) の甕は山形口縁となるもので、近江地方と共通する 特徴を有するものである。(366) は壷の体部片で、 直線文と無文帯を交互に配し、直線文帯には縦線に よって分断されている。

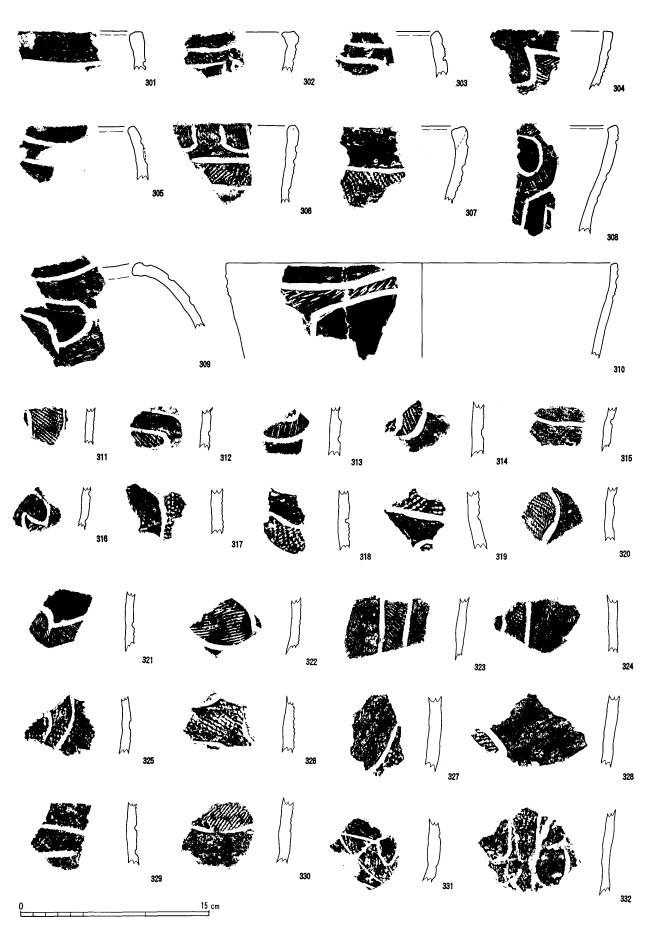
以上の弥生土器はその特徴から、弥生中期中葉と 考えられるものである。

(3) 小 結

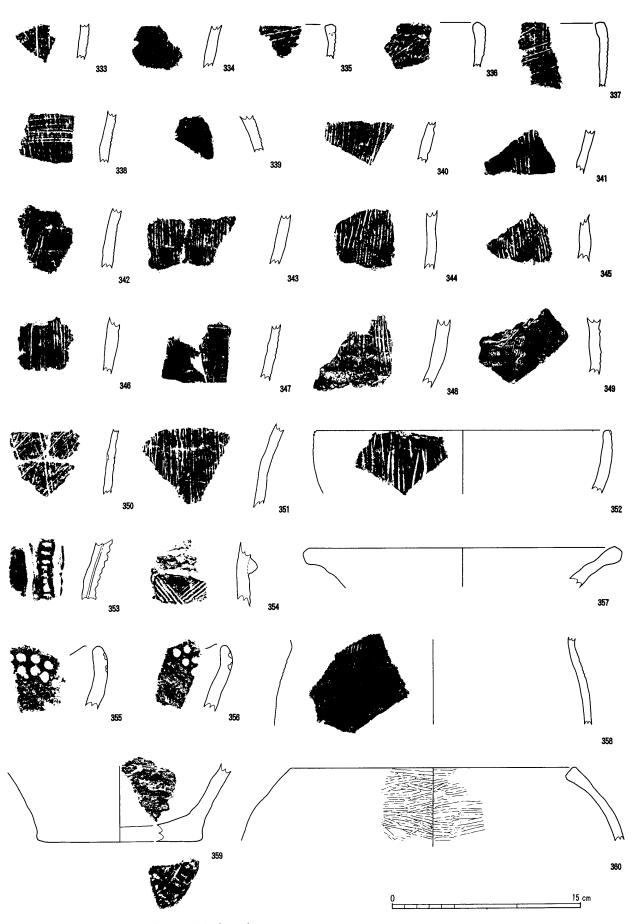
D地区は撹乱が多いこともあって、遺構はほとん



第62図 D地区遺構図(1:300)



第63図 D地区出土遺物実測図〈1〉(1:3)



第64図 D地区出土遺物実測図〈2〉(1:3)

ど認められなかったが、縄文後期の土器を中心に遺 物が出土している。

出土した縄文後期の土器は、磨消縄文を施すものは中津式に相当するもので、条線文の施されたものもほぼそれに伴う時期のものであろう。

縄文後期初頭の遺物が比較的まとまって出土した ことにより、当調査区では検出しえなかったものの、 同時期の遺構が近在する可能性は大きい。

5. E 地区の調査

(1) 遺 構

E地区はD地区と小径を挟み、段丘崖に沿った低地部を見下ろすことができる位置にある。微地形的には全体的に段丘崖に向って緩やかに傾斜している。

調査区の西端の小径に沿って墳丘状の高まりを調査前から確認しており、古墳等の存在を推定していた。調査の結果、墳丘状の高まりは方形周溝墓と判明した。また、調査区のやや南寄りの段丘崖近くで検出された土坑状の浅い掘り込みは、前方後方形周溝墓に伴う溝の一部と考えるに至った。

方形周溝墓S X 19 (第67図)

調査前の高まりが方形周溝墓の墳丘部分と判明したが、周囲を削り出して形成された高まりであり、 盛土は現状では確認できなかった。

周溝の中央部が切れて陸橋となるもので、いわゆるB1型墳と呼称されるものである。墳丘中央付近にほぼ南北方向に主軸をもつ木棺直葬と思われる墓壙を検出したが、遺存状態が悪く棺の形状等を推定するまでには至らなかった。

墳丘規模は、周溝内側下辺で約9m、周溝外周を

含めると、約11.5mとなる。また墓壙の規模は、長さ2.9m、幅1.2~1.3m、棺痕跡は、長さ1.9m、幅0.5m前後となる。

供献遺物とみられる土器が、墓壙上と周溝内から 出土したほか、墳丘を覆う旧表土である黒色土中を 中心に、縄文土器の小片が多く出土した。

前方後方形周溝墓SX20(第69図)

遺構としては浅い土坑状の掘り込みがE地区中央から南寄りに連続して検出された程度で、墳丘そのものはまったく残存していない。

S X 20を前方後方形周溝墓とみる想定根拠をあげるならば、屈曲して連続する浅い土坑状の掘り込みは、前方部前面から後方部とのくびれ部にかけての 周溝部に相当することと、出土遺物が赤彩されたものを含む壷に限られることである。

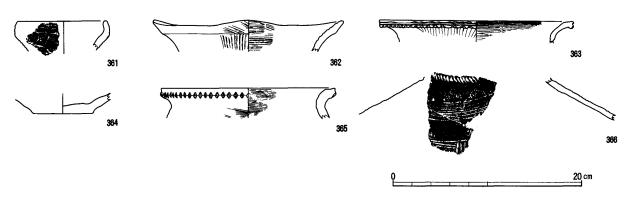
S X 20の規模については、その遺存状態の悪さからまったくの推定となるが、全長30 m以上、前方部長11 m程度に復原が可能ではないかと思われる。

また、E地区を含めて今回調査した宮山遺跡の範囲内から、まったくこれら墳墓以外に弥生時代後・末期の遺構・遺物が認められない点も状況証拠の一つとしてあげておきたい。

(2) 遺物

E地区から出土した遺物は方形周溝墓SX19、前方後方形周溝墓SX20に伴うもののほか、縄文後期の土器、石器、弥生後期の土器、中・近世の土製品、 銭貨などがある。

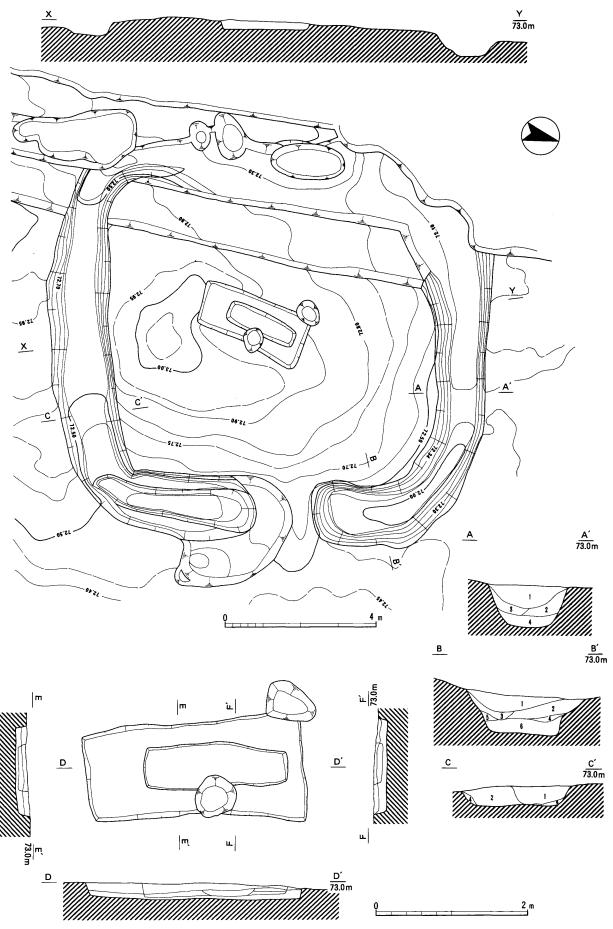
方形周溝墓S X19の出土遺物 (367·368) のうち、 (367) が墓壙上から出土した台付壷で、外上方に開く口縁部と中央やや下に最大径をもつ胴部に大きく



第65図 D地区出土遺物実測図〈3〉(1:4)



第66図 E地区遺構図(1:300)

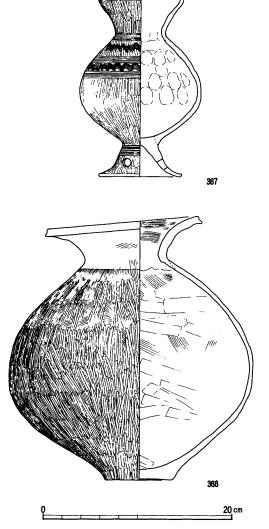


第67図 方形周溝墓SX19実測図 (1:100主体部は1:50)

開く脚台がつく。頸部から胴部上半にかけて櫛描直 線文と波状文を交互に施すほか、脚台部にも直線文 を施す。また、脚台中央には円孔を穿つ。

(368) は外上方へ大きく開く口縁部をもつ広口壺で、胴部外面は全面的にヘラミガキが施されるものの、文様はもたない。ほぼ胴部中央付近に最大径をもつ。

前方後方形周溝墓S X20の出土遺物 (369~376) はいずれも広口壷と考えられる。文様で加飾された ものは出土したもののなかでは見当たらなかったが、 (371·372) は頸部に突帯をもち、加飾壷の可能性が ある。また、(374~376) の胴部外面にはハケメが施 されており、S X19出土の壷がヘラミガキされてい るのと比べると、時期的にやや下るものと考えられ、 S X19→S X20という時間的な前後関係をもつと思 われる。



第68図 方形周溝墓SX19出土遺物実測図(1:4)

遺構出土以外の遺物のうち、縄文土器(377・378・382~402)は、(378)が後期後半、(400)が時期の特定が難しいことを除くと、いずれも磨消縄文をもつ後期初頭の中津式に相当するもので、(377)からすると、口縁部に沿って横走りする縄文帯から紡錘文が垂下する中津式でも古相に属するものである。

(403) は弥生後期の広口壷の胴部上半の小片で、 櫛描直線文と刺突文を交互に施す。

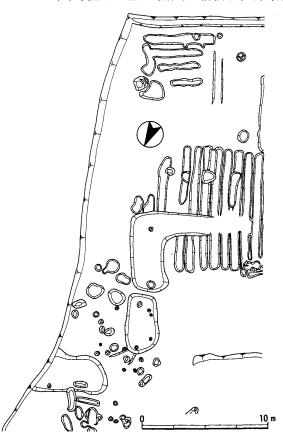
(404・405) は切目石錘で、(404) についてはE地区の北西、通称「団子の宮」と呼ばれる地点で表採したものである。

凹石(406)は側縁に敲打痕が認められ、中央に窪 みをもつ。

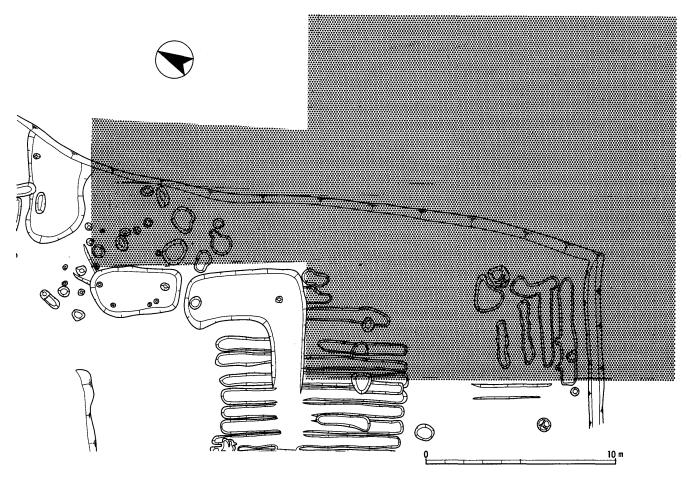
他に (380) は瓦ないし瓦製品を円形に打ち欠いた もので、いわゆる「加工円盤」と呼ばれるもので、 銭貨 (381) は「寛永通宝」である。

(3) 小 結

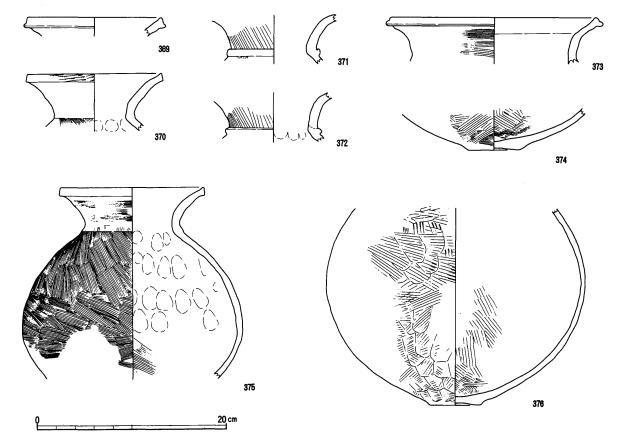
E地区では弥生後期末の墳墓が2基検出された。 しかし同時期の住居跡等は調査区内からはみつかっ ておらず、墳墓も2基が時期的に前後し、同時期に



第69図 前方後方形墳丘墓SX20実測図(1:300)



第70図 前方後方形墳丘墓SX20推定復元図(1:200)



第71図 前方後方形墳丘墓SX20出土遺物実測図(1:4)

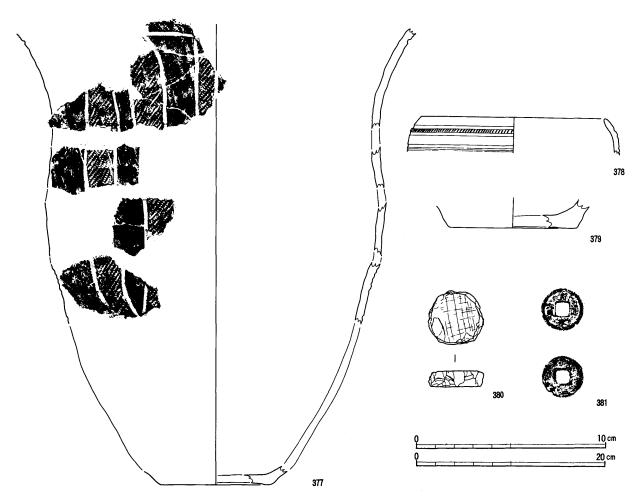
複数の墳墓が築かれた様子はない。

みつかった 2 基の墳墓は、溝中央部に陸橋をもつ 方形周溝墓である S X 19と、前方後方形周溝墓と考 えられる S X 20とがあり、前者がやや古く、後者は 後出する。出土遺物からすると前者は廻間 I 新段階 で、後者は同 II 新段階に相当すると考えられる。

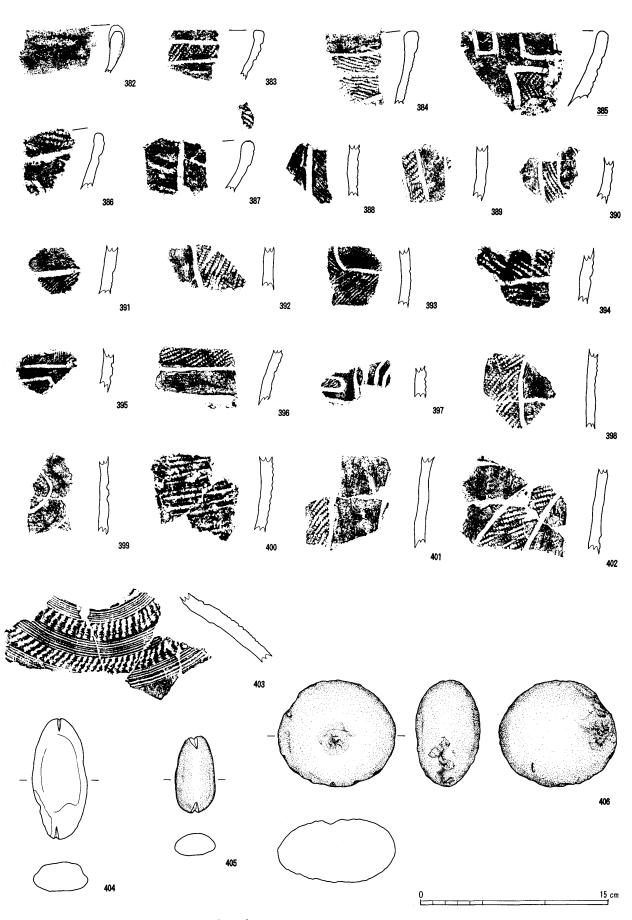
ところでS X19に関しては問題がなかろうが、S X20は墳丘はおろか周溝すら局部的にしか遺存していないため、墳墓と決めつけるのは異論の余地も大きかろう。

しかし前述したように、遺構的には前方部全面からくびれ部にかけての周溝部に相当するとみられる土坑が存在すること、遺物の上からは赤彩されたものを含む壺の出土に限られることなどから、敢えてこれを前方後方形周溝墓の一例に加えることとした。SX20についてはこれ以上の追認は困難であるが周辺地域での発掘調査が進めば、あるいは状況証拠の

増加には期待できよう。



第72図 E地区出土遺物実測図(1:4,381のみ1:2)



第73図 E地区ほか出土遺物実測図(1:3)

N. 調査成果のまとめ

1. 縄文土器について

現在、宮山遺跡と同じ在所の大神社には、柄部に精巧な文様を施した石刀をはじめ、石棒や御物石器などが神宝として保管されているが、これらの出土地の有力な候補地は宮山遺跡といわれている。今回の調査ではそれに匹敵するような縄文時代の石器はみられなかったが、D地区およびE地区で後期を中心とした土器片が多数出土したほか、B地区では晩期末の土器も若干出土している。

D・E地区の縄文土器はいずれも破片で、同時代の遺構に伴うものはない。中期あるいは晩期と考えられるものもわずかにみられるが、ほとんどが後期前半のもので、中津式~福田 K II 式に属するものが中心である。

当該期の土器は、近年県内の多くの遺跡で出土しており、宮山遺跡の近辺でも北勢町覚正垣内遺跡で中津式初頭の竪穴住居跡や埋設土器などがみつかっている。

D・E地区の縄文後期の土器は、二本単位の沈線間に縄文を施すもので、三本単位の沈線を巡らす福田KⅡ式の新段階やそれ以降の縁帯文土器は若干の例外を除いてほとんどない。従ってD・E地区出土のものは中津式あるいは福田KⅡ式でも古段階に留まるものが主体を占めると判断できる。

一方、B地区で出土した晩期の土器は、突帯文系のものと条痕文系のものがあり、土器棺墓SK18で両者が用いられている。

S K18は棺身に用いた土器が素文のやや細い突帯を一条めぐらすもので、これに伴った棺蓋の土器は粗い条痕調整されたもので、条痕の特徴や口縁部の形態などから、「樫王式」に併行するものではないかとみられる。

他から出土した突帯文系土器は、指による幅広の 〇字状となる押圧を加えた一条突帯を口縁部下にも つもので、伊勢湾西岸地域の縄文晩期末の土器編年 を行った鈴木克彦氏によるIV期に比定できよう。

従ってB地区で出土した晩期の土器は、実際は弥 生前期の遠賀川系土器と併行する可能性があるが、 宮山遺跡からは当該期の弥生土器は伴っていない。

ただ、宮山遺跡よりさらに上流域の北勢町東村城 跡から、前期新段階とみられる遠賀川系土器の壷の 破片が出土しており、弥生文化の到達は伊勢地方の 海岸部と比べても著しい遅れがないと考えられるこ とから、B地区出土の突帯文系土器などは弥生文化 到来の直前段階に相当するものかもしれない。

また、C地区で小片ではあるが浮線文系の土器と みられる浅鉢片が出土した。口縁部下に突帯をもつ 点や、浮線文様の特徴から大洞A式段階に相当する ものと思われ、先の突帯文系土器と近い時期が考え られる。

2. 縄文晩期の平地住居について

B地区とC地区の一部で検出された小柱穴群は、 その配列から環状あるいは多角形にめぐる平地住居 跡の可能性を考えた。

この場合、最も問題になるのは柱穴群の時期であろう。一般に柱穴から出土する遺物は少なく、その時期比定は困難な場合が少なくない。こうした柱穴が多時代にわたる複合遺跡でみられるならば、柱穴だけではほぼその時代を特定することは不可能であるう

しかし、B地区の場合、包含層中から出土する遺物もほぼ縄文晩期から弥生時代中期に属するものであり、掘立柱建物が普遍化する時代のものではない。

また、三河湾・伊勢湾周辺の縄文時代の住居について研究を進めている岩瀬彰利氏によれば、当遺跡でみられたような環状ないし多角形配列の柱穴群は、氏の住居構造の分類のなかでも一種の平地住居跡と捉え、このタイプの住居は晩期に沿岸部を中心に分布を広げていることを指摘している(岩瀬1997)。

宮山遺跡 B地区でも、S Z 36で地床炉と考えられる浅い掘り込みをもつ炉跡が確認されており、柱穴群を平地住居として捉えるに妥当であることを証明するものと考えている。

ただ、課題として残すことは掘立柱建物の抽出と 同様、多数ある柱穴のいずれを組み合わせて住居跡 と認定するかであろう。今回は前章の報文の通り、 B地区で20基、C地区で2基の計22基を抽出した。

これらを平地住居跡として稿をすすめると、その 規模から5mほどの小型のものと、8mにもなる大 型のものがある。各住居跡は重複が著しく、柱穴掘 方の形状はほぼ直上に立ち上がり、直立した柱が据 えられたものと思われ、その住居構造はかなり簡易 的な構造が考えられる。

また、炉跡はSZ36以外からは確認されておらず、SZ36の炉跡も焼土は薄く、長期間にわたり使用されたとは考え難い。

従って今回検出し得た平地住居跡群は、短期間あるいは季節的に設営・廃棄を繰り返したと思われ、 同時に存在する住居数は少ないと思われる。

3. 弥生中期の住居群の特徴と広がり

今回の調査でB地区に1棟、C地区に12棟の竪穴住居跡を検出した。すべて弥生中期に属するもので、竪穴住居の平面形をみると、B地区のSH1が円形と考えられるほか、正方形のもの(SH2~4・7・11)と長方形のもの(SH5・6・8~10・12・13)のものとがある。

都出比呂志氏は、弥生時代の竪穴住居を列島の東西で比較し、その平面形態が求心構造の円形が主流となる西日本と対称構造の長方形を含めた方形が主流となる東日本といような地域差が生じることを明らかにし、おおむねその境界は前期の遠賀川文化圏と重なり、伊勢地方は当時の資料段階では西日本型である円形構造の住居が弥生時代を通して主流となると考えられた(都出1985)。

しかしその後、伊勢地方でも長方形の平面形態となる竪穴住居跡が、津市長遺跡や山籠遺跡などで多数見つかり始めた。これらは中期後半に属すものが中心と考えられ、少なくとも中勢地域の安濃川流域では、この時期に特徴的な平面形態となってきた。

宮山遺跡で確認された竪穴住居跡の平面形は、長 方形のものと正方形に近いものとが割合的には半々 といった程度だが、円形と考えられるものは1例の みで、他は対称構造の方形を基本とする。

これらの方形の竪穴住居が、東日本に多いタイプ のものと解すると、住居構造の点おいて弥生中期の 伊勢地方には西日本よりも東日本的な要素が強いということになる。

炉跡をみると、SH1とSH12が石囲炉と考えられるほか、SH10で地床炉が検出されたが、他の住居跡からは炉の痕跡は確認することができなかった。また、検出された炉跡も焼土・灰とも薄く、長期間継続した使用は認め難い。

各竪穴住居跡群は出土遺物も少なく、ほとんどが埋土中の出土と考えられ、床面直上遺物が少ない。そのため各住居跡の新旧関係を明らかにするのは難しいが、重複した関係にあるものをあげると、SH3とSH4、SH5とSH6、SH9とSH10がある。このうちSH3とSH4とではSH4が、SH9とSH10とではSH4が、SH5とSH6とでは重複があまりにも大きく、建て替えと判断できるが、その新旧は不明である。

また、竪穴住居の方位や位置関係および竪穴住居の平面形態からすると、調査区内では単独にしかみつかっていないB地区のSH1は除き、C地区のSH2~8の7棟、SH9~11の3棟、そしてSH12およびSH13の2棟が、比較的まとまりをもつ。これに掘立柱建物を加えると、SB14がSH2~8の近くに、SB15~17がSH12と13の近くに位置することがわかる。

さらに細かくみていくと、 $SH2\sim8$ 、そしてSB14を加えたグループは、SH3と4、SH5と6が重複し、同時期には存在しえない。同様に $SH9\sim11$ のグループは、SH9と10が重複し、 $SH12\cdot13$ 、そして掘立柱建物の $SB15\sim17$ を加えたグループは、SH12と $SB15\cdot16$ とが重複し、やはり同時期のものではないと判断できる。

4. 磨製石斧の製作とムラの性格について

C地区より出土した総数68本に及ぶ磨製石斧の未成品および完成品や、敲打具・台石・砥石などの工具類、そして剝離段階に生じるとみられる破砕石片の存在は、宮山遺跡で磨製石斧の製作を行っていたこと示すものである。

石斧未成品や破砕石片は、竪穴住居内などからは ほとんど出土せず、また廃棄土坑などに一括される こともなく、周辺に散乱しているような状況で出土 している。二次的な移動も考えるべきだが、離れた 地点から出土した石斧未成品の破片が接合するなど の現象も認められた。

出土した石斧の総数のうち、未成品は59本で、刃部の研磨が認められる完成品が9本あり、未成品には剝離段階のものと敲打段階のものの両者があり、これらのほとんどのものが欠損あるいは変形しており、成品前段階の保管品というよりは失敗作とみるほうが妥当である。

また、刃部を研磨した完成品とみられるものでも、 刃部以外の研磨はほとんど認められず、その全体の 形状も一般的な成品として集落に流通しているもの からすると変則的なものが多く、本来製作工程のな かで生じた失敗品あるいは不良品のうち、最低限度 使用に耐えるものに刃部を作り出し、活用したと考 えられる。

これら二つの点から考えられることとして、宮山 遺跡での磨製石斧の製作は完成品を他所へ出荷し、 自らのムラでは良品でないものに敢えて刃部を作り 使用していた可能性がある。

さらに石斧の研磨に用いる砥石の出土が決して多いとはいえず、宮山遺跡での石斧製作が研磨段階にまで及ばずに他所に運び出されたものもあったと思われ、石斧の刃部の研ぎ出しは各消費地遺跡で個別に行われた場合もあったとの推定もできる。

そして集落の性格という視点から宮山遺跡をみた 場合、次にあげる二通りの解釈が考えられる。

一つは宮山遺跡は、他所にある拠点的なムラの出 先機関のような存在で、ここで生産した良質の完成 品は、拠点集落を通じてかなり広域に流通した。宮 山遺跡自体は、あくまでも石斧製作のためのムラで、 一般的なムラとは異なり、ある季節あるいは必要に 応じた一時的なムラと解釈でき、食糧生産など自立 的な生活は営まれていなかったとみることである。

今一つは、今回の調査範囲外にも住居群が続く可能性があり、さらに段丘下の低湿地に可耕地をもち、食糧生産も当然行われ、全体として宮山遺跡は石斧生産をも一つの資産として集落内分業の進んだ、いわば専業的な集団を内包する自立した集落の一部として存在したとみることである。

そこで宮山遺跡の特徴を今一度まとめて挙げると、

- ・宮山遺跡の竪穴住居に炉の使用が顕著でない。
- ・磨製石斧およびその製作工具以外の石器がほとん どみられない。
- ・宮山遺跡で実際使用された磨製石斧は、本来製作 途上の失敗品ないし不良品とみられるものを活用し ており、良質の完成品がまったくみられない。
- ・石斧石材の原石の産出する所に遺跡が立地してい る。
- ・竪穴住居群が中期後半を境に無くなり、集落の移動または廃絶が想定される。ただし、後期末には墳墓が築造されている。

などといった点がある。

以上のことは宮山遺跡が恒常的・自立的集落でなかったとみる前者の解釈にとって総じて有利な特徴といえる。とくに良品の石斧を遺跡内で使用していないという点は、前述したようにそれらは他所に供給することを第一義とし、自家消費のものとしないことを示す。

従って、原石を容易に入手できる所に設けられた 作業所的なムラというのが宮山遺跡の性格を端的に 表す表現であろうか。また、宮山遺跡の立地を今一 度みると、集落の眼下には伊勢湾の湾口にまでつな がる水運の良い員弁川の存在にも気づく。

こうした解釈をすると、宮山遺跡に足跡を残した 集団は、石斧生産に対して強い専業性を発揮し、他 地域と交易は拠点的な集落の介在があったとしても、 その母集団から食糧ほか生活物資の保証を受けたあ る程度独立性のある集団として宮山遺跡を拠点に活 動したとの見方はできず、むしろ農閑期を利用した 季節的労働、すなわち農業との未分離な半農的な集 団という印象が残り、弥生時代の社会的分業のなか での石斧製作の専業性という点ではその位置づけは やや弱くなる。

これは可能性の問題であるが、磨製石斧はあくまでも生産手段のための工具であり、その主な用途は 建築材や木製品の製作にあったことから、少なくと もそれらの原材木の伐りだしと石斧の製作とは、これに携わった集団を切り離して考えずとも良いので はないか、という点である。

すなわち、磨製石斧の製作も一つの生業とするが これにこだわらず、さらに別所では木製品の原材の 伐り出し、運搬までを視野にいれた、いわば「山の 民」としての社会的分業も考慮してみる必要はない であろうか。

また、棟持柱をもつ掘立柱建物は、高床構造と考えられるが、祭祀的な性格を有する建造物や、石斧の収納施設とみるより、ここでは石斧製作集団の食糧を備蓄するための食糧庫とみる方がより妥当でないかと思われる。

5. 弥生末期の墳墓について

E地区でみつかった墳墓は、B1型墳と呼ばれる 周溝の中央に陸橋をもつ方形周溝墓SX19と削平が 著しく、遺存状況はきわめて良くないが、B3型墳 とされる前方後方形周溝墓の可能性が大きいSX20 とがある。

調査範囲内から同時期の住居跡はみつかっておらず、墳墓のみが築かれたことになるが、今回の調査区のほか、試掘結果から考えて、墳墓の南側や西側には住居跡も墳墓も確認されていない。もし住居群の可能性があるとすれば、E地区の北側か段丘崖で崩落の著しい東側に位置していたことになろう。

今回確認された2基の弥生墳墓のうち、S X 19は調査前から高まりを残していたため、古墳等の構築物との推定を行っていたが、結果として盛土はほとんどないものの、方形周溝に画された一辺9 m ほどの墳墓であることが判明した。墳頂付近と周溝の一部から供献されたとみられる土器が出土している。

これに対し、S X 20は調査前にはまったくその痕跡を残しておらず、遺構としてもわずかに浅く土坑状の落ち込みがみられたのみであった。

しかし、2、3ヶ所でみつかった土坑状の落ち込みは寸断されてはいるが、本来連続したものとみると、ちょうど前方部前面から後方部とのくびれ部にまで至る屈曲に合致することがわかった。また、出土遺物が一部赤彩の痕跡をもつ壷形土器のみの破片であったことも、通常の廃棄土坑などとの相違点としてあげられよう。

残念ながら、後方部に関しては周溝についてもまったくその痕跡を残しておらず、全体の規模を推定することを困難にしており、しかも前方後方形周溝墓とみた場合、墳丘の縦半分ほどが段丘からはみ出す

こととなる。しかし、片岡博氏の聞き取りによると、宮山遺跡が所在する片樋の段丘は、砂利採集も影響して段丘崖が崩壊を繰り返し、現在に至るまで数mほど段丘を後退させてきたという(片岡1997)。従って、SX20付近でも段丘が崩壊し、SX20の墳丘および周溝を破壊してきた可能性が大きい。

また、宮山遺跡とは貝弁川を挟んで対岸の段丘上には、測量調査で前方後方墳と確認された麻績塚1号墳も立地し、これまで三重県内では一志郡の嬉野周辺に限られていた前方後方墳の分布が拡大する可能性をもつに至った。

麻績塚1号墳が位置する員弁川中流域の北勢町および大安町を含めた員弁郡周辺に前方後方墳の分布域が形成されていた可能性があるならば、その前段階の前方後方形周溝墓が宮山遺跡周辺で確認されても不思議はない。

むしろ昨今、尾張・美濃地方を中心とした東海地方で前方後方墳および前方後方形墳丘墓が急増しつつあり、宮山遺跡や麻績塚1号墳が所在する北勢地域もその枠組みの中に入れて考えたほうが良いのだが、さらに伊勢地方全体で考えると、SX19のようなB1型墳が四日市市大谷遺跡をはじめ嬉野町下之庄東方遺跡、松阪市草山遺跡、瀬干遺跡、明和町寺垣内遺跡、多気町上ノ垣外遺跡などでこれまでみつかっている。

これに対し、陸橋部にの発達したB2型墳や前方 後方形となるB3型墳はあまり明らかでない。ただ、 松阪市大足遺跡で前方後方形の墳墓に伴うとみられ る周溝の一部が調査されており、周溝埋土下層より 宮山遺跡SX20よりやや新しい土器が出土している。

従ってB型墳と呼ばれる墳墓は、伊勢地方南部である南勢地域にも広くみられ、むしろ分布上の一つの核となる地域とみなすことができる。

ところが南勢地域の場合、前方後方墳にまで昇華 したのは嬉野町の中村川流域周辺のみであり、松阪 以東の各地域は足並みを揃えることはなかった。

北勢地域では麻績塚1号墳の他には明確に前方後 方墳を指摘することは現状では難しいが、例えば前 期古墳であることが判明している四日市市志氐神社 古墳は、すでに前方部は破壊されているものの、残 された部分は現地あるいは測量図からの観察による と、従来径30mほどの後円部とみなされてきたが、 これより一回り小さい一辺27mほどの後方部とみな すことも可能ではないかと思う。

中勢地域にあたる津市・安濃町を含む安濃川流域 は、納所遺跡や長遺跡といった弥生時代の代表的な 遺跡を擁する地域だが、後期の墳墓の発見例も少な くない。

しかしこの地域では主に津市高松遺跡や安濃町大 城遺跡、前田遺跡といった方形台状墓が丘陵部から 発見されることが少なくなく、津市坂本山古墳群の ように古墳時代前期に至っても同様の現象が続く。 このような中勢地域の安濃川流域での状況は、北勢 地域と南勢地域を繋ぐことなく、墳墓形態の上では 両地域を寸断している。伊勢地方の弥生終末から古 墳出現期に至る地域プロセスを解明しようとする場 合、この点も見逃すべきではないであろう。

参考文献

岩瀬彰利(1997)「三河湾・伊勢湾周辺地域における縄文 時代住居の変遷について(I)-三河・尾張編-」 『三河 考古』第10号

片岡博(1997)「大久保城跡」『一般国道475号東海環状自動車道 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』

都出比呂志(1985)「弥生時代住居の東と西」**『**日本語・ 日本文化研究論集**』**

図版	登録	出土	遺物	出土	法	-	(com)	and and 11 11 on art 199	胎士	焼		却
番号	番号	器種	器形	遺構	口径	現存高	その他	調整・技法の特徴	后 土	成	色	쮖
1	009-03	弥生土器	細頸壺	包含層	11.0	4.6		袋状の□縁部に4条の凹線と刺突文がめぐる。	石英・白色粒含む。やや密。	11	外:浅黄橙色10° 内:灰白色2.5Y8	
2	002-04	弥生土器	变	包含層	16.0	3.4		口縁部が外反し、口唇部下端にキザミメを施す。口縁部内面に はヨコ方向のハケメを施す。		良好	にぶい黄褐色10~	7R4/3
3	002-02	弥生土器	細頸壺	包含層	8.5	8.2		口縁部が外反する。外面にはハケメを断続的な直線文風にめぐ らす。	石英・白色粒多く含む。	良好	暗黄褐色10YR6	/6
4	002-01	弥生土器	広口壺	包含層	20.0	4.9		やや内傾する口縁部が端部で強く外反する。外面にハケメを施 す。	石英・白色粒多く含む。	11	外:灰黄褐色10° 内:にぶい黄褐色	
5	004-02	弥生土器	受口壺	包含層	23.8	3.1		口縁部が直線に立ち上がり、受口状となる。外面に凹線文をめ ぐらす。	白色粒を含む。やや粗い。	良好	橙色7.5YR6/6	
6	009-02	弥生土器	变	包含層	9.5	2.8		口縁部がくの字に外反する。口唇部にキザミメを施す。	やや密。	11	外:橙色7.5YR8 内:黄橙色10YF	, -
7	008-01	弥生土器	变	包含層	13.2	2.2		口縁部がくの字に外反する。内面にはハケ原体により、波状文 をめぐらす。	石英・白色粒含む。やや密。		外·灰黄褐色1Y 内:灰白色5Y8/	
8	006-01	弥生土器	麦	包含層	16.9	5.0		口縁部がくの字に外反する。口唇部にキザメシを施す。内面に はハケ原体により波状文をめぐらす。	石英・白色粒含む。やや粗い。		外: にぶい黄褐色 内: 橙色5YR6/0	
9	007-02	弥生土器	麦	包含層	18.6	3.4		口縁部がゆるく外反する。内面にはハケ原体により、波状文を めぐらす。			外:灰褐色7.5Y] 内:橙色5YR6/6	
10	004-01	弥生土器	变	包含層	26.0	10.6		口縁部がくの字に外反する。器壁は厚手で、頸部直下に刺突文 をめぐらす。	白色粒含む。やや粗い。	良好	浅黄色2.5Y7/4	
11	001-01	弥生土器	变	包含層	22.2	18.5		口縁部がくの字に外反する。口唇部にキザミメを施す。体部外 面はハケメを施し、内面にはユピオサエ痕が目立つ。	石英粒など含む。やや粗い。	11	外: 黑褐色2.5Y3 内: 明赤褐色2.5	
14	010-06	弥生土器	壺	包含層				外面に波状文と直線文で区切られた円形刺突文をめぐらす。	石英・白色粒含む。	軟質	灰白色10YR8/2	
15	011-03	縄文土器	漆鉢	包含層				2条単位の沈線で区切られた縄文帯をもつ。いわゆる磨消縄文 土器。	石英・白色粒含む。やや粗い。		外:暗赤褐色5Y 内:にぷい赤褐6	
16	011-04	弥生土器	壺	包含屬				扇形文およびその上下に直線文をめぐらす。	石英・白色粒含む。やや粗い。	1 1	外: 黑色5Y2/1 内: 浅黄橙色10Y	7R7.5/4
17	010-05	弥生土器	壺	包含層				沈線に区切られた縄文帯をもつ。	石英・ウンモ・白色粒・赤色粒含む。 やや粗い。	軟質	にぶい黄橙色10%	R7/2
18	005-03	弥生土器	底部	包含層		3.4	底径5.2	平底の底部片。	石英・白色粒含む。密。	好	黒褐色2.5Y3/2	
19	009-04	弥生土器	底部	包含層		4.1	底径7.4	平底の底部片。	石英・白色粒含む。やや粗い。		外:にぶい黄橙的 内:灰白色2.5Y8	
20	009-01	弥生土器	底部	包含層		3.4	1	平底の底部片。	白色粒含む。粗い。		外:橙色2.5YR6 内:浅黄橙色10Y	
	005-02		底部	包含層		4.7	底径10.0	平底の底部片。	石英・白色粒含む。やや密。	好	外:浅黄橙色7.5 内:灰色5Y4/1	
		弥生土器	底部	包含層				台付売の底部片とみられる。	石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗い。	好	明褐灰色7.5YR7	/2
		弥生土器	脚台	包含層				鉢などの脚台部とみられる。	ウンモ・石英・チャート粒多く含む。	好	淡橙色5YR8/3	
		弥生土器	底部	包含層		9.0		平底の底部片。壺の底部と思われる。	石英・白色粒含む。やや密。	好	灰白色10YR8/2	
25	007-01	弥生土器	底部	包含層		5.5	底径7.4	平底の底部片。壺の底部と思われる。	石英・白色粒含む。やや粗い。		外:橙色7.5YR6 内:灰黄色2.5Y7	

第1表 A地区土器観察表

29 00		器種	器形	遺構	口径			調整・技法の特徴	胎 土		色	調
29 00		縄文土器	深鉢	SX8	34.4	現存高 25.1	その他	口縁部がわずかに内傾する砲弾型。端部が肥厚し、内傾した面		成良	橙色7.5YR6/8	
			DESP	JAG	04.4	20.1		をもつ。外面は2枚貝により条痕調整される。		好		
30 00	02-01	縄文土器	深鉢	SX8	29.2	36.4		口縁部下に素文の突帯が1条めぐる。体部上半は外面にはヨコ 方向の条痕を施し、下半はタテ及びナナメ方向に削る。	石英若干、白色粒多く含む。やや粗い 		外:淡黄色2.5Y8/3 内:淡黄色2.5Y8/4	
	06-01	縄文土器	深鉢	包含層	27.8	5.9		口縁部からやや下がった位置に幅広の押圧を加えた突帯が1条	石英・白色粒含む。	良	外:橙色2.5YR6/8	
31 00	02 01	縄文土器	深鉢	包含層	33.4	7.9		めぐる。体部外面は条痕が施されている。 口縁部からやや下がった位置に幅広の押圧を加えた突帯が1条	元本,白条款会 之。		内:黑褐色5YR3/1 外:明赤褐色2.5Y5/	/0
31 00	03-01	爬 义工研	CHC 30P	라크제	33.4	1.9	i	めぐる。体部外面は条痕が施されている。	TAX TENENTS		内:暗灰黄色2.5Y4/	
32 00	07-01	縄文土器	深鉢	包含層	20.4	7.5		口繰端部がやや尖り気味となる。突帯はみられず、内面に条痕 が施されている。	石英・ウンモ・白色粒含む。粗い。		外:暗灰色10YR3/0 内:灰黄色2.5Y7/2	
33 00	09-01	弥生土器	細頸壺	包含層				類部の破片。外面にはハケメが施されたのち、ヨコ方向にヘラ	石英・白色粒含む。やや粗い。	良	外:明赤褐色2.5Y5/	
34 00	00.02	弥生土器	台付賽	包含層		5.8	出2 2.7 E	ミガキを加え、文様帯をつくる。 脚台部の破片。外面はハケメが施されている。	石英・白色粒・黒色粒・赤色粒含む。		内:黄灰色2.5Y4/1 外:浅黄色2.5Y7/3	
			E119 3C	2.67		0.6	Ø#1±1.0	BM 口 DD V MR C A C C V - 心 。	17.004.200	好	内:淡赤橙色2.5YR	
35 00	05-03	弥生土器	底部	包含層		3.1	底径4.8	やや上げ底気味の平底の底部。	石英・白色粒含む。やや粗い。	11	外:明赤褐色2.5YR! 内:にぶい黄橙色10	
36 00	05-02	弥生土器	底部	包含層	-	3.6	底径7.5	平底の底部。	石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗い	良	外:褐灰色7YR4/1	
37 00	00 03	弥生土器	底部	包含層		2.8	施祥6 0	平底の底部。底部外面に圧痕あり。	石英・ウンモ・白色粒含む。やや粗い		内:橙色7.5YR6/6	
							AB, EE 0.0			好	内:褐灰色10YR4/1	i
38 00	06-04	弥生土器	広口壺	包含層	26.5	3.2		大きく外上方に開く口縁部。内面にヨコ方向の条痕が施されて いる。	石英・白色粒含む。やや粗い。	良好	明赤褐色2.5YR5/6	
39 01	13-01	弥生土器	広口壺	包含層	25.0	5.1		大きく外上方に開く口縁部。口唇部に沈線が施されている。顎	石英・白色粒多く含む。やや粗い。	良	外:灰黄褐色10YR6	
40 00	05-01	弥生土器	広口壺	包含層	29.0	3.2		部付近に直線文がめぐる。 大きく外上方に開く口縁部。やや肥厚した口唇部の上端と下端	石英・ウンモ・白色粒・赤色粒含む。		内:にぶい黄橙色10 外:橙色7.5YR7/6	YR7/3
								にキザミメが施されている。		好	内:赤褐色2.5YR4/5	5
41 00	08-01	弥生土器	広口壺	包含層	29.7	5.8		口縁部が強く外反する。やや肥厚した口唇部の上端と下端にキ ザミメが施されている。頸部に直線文をめぐらす。	石英・白色粒・赤色粒含む。	良好	淡黄色2.5Y8/4	
42 00	09-04	弥生土器	变	SH1	17.0	2.4		強く外反する口縁部。口唇部にキザミメを施す。口縁部内面に	石英・白色粒含む。	良	外:にぶい橙色7.5Y	
43 00	08-02	弥生土器	麦	包含層	16.2	2.9		ヨコハケメ、外面にはタテハケメを施す。頸部に直線文あり。 強く外反する口縁部。口唇部にキザミメを施す。口縁部内面に	石英・白色粒含む。やや粗い。		内:浅黄橙色7.5YR8 橙色5YR7/8	8/6
								ヨコハケメ、外面にはタテハケメを施す。		好		
44 01	12-01	弥生土器	菱	SH1 土坑	28.2	5.9		強く外反する口縁部。口唇部に2個単位の押圧を加える。外面 に直線文をめぐらす。	石英・白色粒含む。やや粗い。		外:灰白色10YR8/2 内:浅黄橙色10YR8	
45 00	03-02	縄文土器	瓷	包含層				外反する口縁部。外面に刺突を施す。	白色粒多く含む。	軟	橙色5YRG/6	
46 01	14-01	縄文土器	壺	包含層				やや外反する口縁部。外面に瘤状の突帯をめぐらす。	石英・白色粒含む。粗い。	質良	外:灰黄色2.5Y7/2	
45 00	00.00	縄文土器		包含層				やや外反する口縁部。外面に瘤状の突帯をめぐらす。	石英・白色粒・黒色粒含む。		内:橙色5YR7/6 橙色2.5YR6/6	
47 00	06-03	和 义工研	壺	Z.B.M				ででた反する口寒的。た風に層仏の矢巾をのくりす。	石央・日色松・無色松音で。 -	好	1 <u>0</u> <u>0</u> .2.3 i R0/0	
48 01	10-02	条痕文土器	深鉢	包含層				口繰端部が若干肥厚する。外面に粗い条痕を施す。	石英・白色粒含む。		外: にぶい黄橙色10 内: にぶい橙色7.5Y	
49 01	13-02	縄文土器	深鉢	包含層				口縁端部に面をもつ。外面に 2条のやや太い沈線をめぐらす。	石英・白色粒含む。やや粗い。	良	外:灰黄褐色10YR6	5/2
50 00	06-02	縄文土器	深鉢	包含層				口縁端部が若干肥厚する。文様はなく、外面はミガキ調整され	万英・白色粒合む。やや細い。		内:にぶい黄橙色10° 浅黄橙色7.5YR8/4	ÝR7/4
			UN. #F					ている。		好		
51 01	10-01	弥生土器		包含層				外面に太い沈線をめぐらし、楕円形の刺突を規則的に加える。	石英・ウンモ・白色粒含む。やや粗い		外:にぶい橙色7.5Y 内:浅黄橙色10YR8	
52 01	10-04	縄文土器	深鉢?	包含層				2条の沈線に区切られた縄文による文様帯をもつ。いわゆる磨	石英・白色粒含む。やや粗い。	良	外:浅黄橙色10YR8	3/3
53 01	13-05	縄文土器	深鉢	包含層				消縄文である。 頸部に貝殻で押圧された〇字状突帯をめぐらす。体部外面は条	石英・白色粒含む。やや粗い。		内:淡黄色10YR8/3 外·灰白色2.5Y8/2	·
								痕調整する。2条突帯文土器。		好	内:浅黄橙色10YR8	
54 01	10-05	縄文土器?	深鉢?	包含層				外面に細かな縄文を施す。弥生土器の可能性もある。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好好	にぶい黄橙色10YR7	/3
56 01	11-01	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を羽状に施す。	石英・白色粒含む。やや粗い。		外:浅黄橙色10YR8 内:にぶい黄橙色10 [*]	
57 00	04-02	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	石英・白色粒含む。		授色5YR6/6	1.1./4
50 ~	04.01	久市士上野		与会響	<u> </u>			が面に頼い各宿立た技士	石英・白色粒含む。	好	外:にぶい黄檀色10*	VDE/
JO 100	U4-U1	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	41大・口巴松古む。	質	内:にぷい褐色7.5Y	
59 01	13-04	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	白色粒含む。やや粗い。	良好	橙色7.5YR7/6	
60 00	03-03	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	白色粒含む。	良	外:橙色7.5YR6/8	
61 01	13-03	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	白色粒含む。やや粗い。		内:橙色5YR6/8 橙色5YR7/8	
										好		
62 01	14-02	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	石英・白色粒含む。やや粗い。		外:灰白色5Y7/1 内:にぶい黄橙色10 [*]	YR7/4
63 00	04-03	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	白色粒含む。	良	橙色5YR4/8	/ -
64 Or	04-04	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	白色粒含む。	好良	外:黑褐色10YR3/1	
										好	内:にぶい黄色2.5Y(
65 01	10-03	条痕文土器		包含層				外面に粗い条痕文を施す。	石英・白色粒含む。粗い。		外:橙色5YR7/6 内:褐灰色5YR4/1	

第2表 B地区土器観察表

	登録			出土	进		(cm)	調整・技法の特徴 胎 土	焼	
	番号	器 種 弥生土器	器 形 底部	遺構 SH4	口径	現存高 4.4		平底の底部。外面にヘラミガキ、内面にハケメを施す。壺の底 石英・白色粒含む。	成數	外:浅黄橙色7.5YR8/3
							,2422110	部か。	質	内:浅黄橙色10YR8/3
67	031-02	弥生土器	壺	SH4				体部下学部の破片。 2条の突帯から上は数条の浅い沈線をタテ 方向のヘラミガキで寸断する。いわゆる磨消線文系壺。		外:明赤褐色10YR5/6 内:にぷい黄橙色10YR6/4
68	023-04	弥生土器	变	SH5-6	9.8	8.8		ミニチュア土器。強く外反する口縁部。口唇部にキザミメをめ 石英・白色粒含む。 ぐらす。内外面ともハケメを施す。	良好	
69	023-05	弥生土器	麦	SH5-6	20.8	3.7		大きく外反する口縁部。口唇部下線にキザミメをめぐらす。外 石英・白色粒含む。やや粗い。	軟	灰黄色2.5Y6/2
70	015-02	弥生土器	広口蓋	SH7	31.6	2.4		面はタテ・ナナメ方向のハケメ、な面はヨコ方向のハケメ。 大きく外上方に開く口縁部。口唇部の下線がやや拡張し、2条 やや粗い。	質數	赤橙色10YR6/6
								の凹線がめぐる、口縁部内面に波状文を施す。	質	
71	015-03	弥生土器	台付蓋	SH7		2.9	脚往6.8	台付甕の脚台片。脚台は低い。外面にハケメを施す。 ウンモ多く含む。		外:淡橙色5YR8/3 内:灰白色10YR8/1
72	014-04	弥生土器	壺	SH7				壺の頸部付近。外面は斜格子文ののち、凹線をめぐらし、その 白色粒多く含む。 下に波状文を施している。	1.	外: 橙色7.5YR7/6 内:にぶい橙色7.5YR7/4
73	002-02	弥生土器	受口壺	SH8	11.4	6.2		受口状口縁となる。口縁部外面には2条の凹線がめぐる。頸部 石英・チャート・白色粒含む。	良	外:淡黄色2.5Y8/3
74	014-03	弥生土器	受口遊	SH8	15.8	3.4		外面にも直線文が施されている。 受口状口縁となる。口縁部外面には円形浮文とキザミメを加え ウンモ・白色粒含む。		内:黄灰色2.5Y4/1 外:橙色7.5YR7/6
								た突帯が交互に2単位づつ施されている。	好	内:橙色5YR6/6
75	025-04	弥生土器	麦	SH9	21.4	3.5		くの字に外反する口縁部。口唇部の上端と下端にキザミメを施 石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗 す。口縁部内面にヨコ方向のハケメを施す。	小 歌	
76	026-03	弥生土器	查	SH9				壺の頸部片。やや外反気味に開く。外面はハケメを施したのち 石英・ウンモ・白色粒・黒色粒含む	- 1	外:橙色2.5YR7/6
77	015-01	弥生土器	底部	SH9	_	8.5	底径9.5	凹線文を 9 条以上めぐらす。		内:橙色2.5YR6/6 外:黄橙色10YR7/6
78	025-01	弥生士器	細頸壺	SH10	7.4	4.1		口縁部が外上方に開き、端部が直上に立ち上がる。外面に波状 石英・白色粒含む。	質白	内:黄橙色7.5YR7/8 外:浅黄橙色10YR8/3
								文が施されている。	好	内:浅黄橙色7.5YR8/4
79	025-03	弥生土器	細頸壺	SH10	6.4	7.6		口縁部が内折する。外面には直線文ののち、円形浮文を貼りつ 石英・白色粒・赤色粒含む。 け、頸部にも直線文間に凹形浮文とタテ方向の波状文を施す。	1.	外: 橙色5YR7/6 内: 灰色5YR4/
80	023-02	弥生土器	広口壺	SH10	13.9	2.7		大きく外反する口縁部。口唇部下端を波状に押圧する。頸部に 石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗	八良	
81	023-01	弥生土器	麦	SH10	19.7	3.3		直線文を施している。 大きく外反する口縁部。口唇部の上端と下端にキザミメを施す 石英・ウンモ・白色粒含む。	好 良	外:褐灰色10YR4/1
00	005.00	34-4L 1 8H	rår tro	CITIO		4.0	dr fill 1 c	内外面ともハケメ調整。類部外面に浅い沈線ありか。	好	内:にぶい黄橙色10YR7/3
82	025-02	弥生土器	底部	SH10		4.0	底住4.5	算盤玉形の体部となる姿と思われる。内外面ともハケメを施す 石英・白色粒含む。		外:浅黄橙色10YR8/4 内:黒色N2.5/
83	001-01	弥生土器	広口壺	SH10	18.0	44.5	底径10.6	口唇部に波状文、口縁部内面には2段の刺突文、体部に直線文 と波状文を交互に配す。類部は半載竹管の押圧を加えた突帯。		外:黄橙色10YR8/6 内:明緑灰色7.5GY7/1
84	073-01	弥生土器	広口壺	SH10	-		底径11.4	球形の体部片。外面の沈線で区切られた文様帯に刺突による擬 石英・白色粒多く含む。		にぶい黄褐色10YR5/3
85	016-01		広口壺	SH1	20.6	3.3		縄文を施す。 大きく開く口縁部。口唇部に波状文、口縁部内縁に刺突文を施 石英・白色粒多く含む。やや粗い。	質良	明黄褐色10YR7/6
								す。	好	
86	003-01	弥生土器	広口壺	SH12	18.2	6.6		大きく外反する口縁部。内面に2個単位の瘤状突起を貼りつけ ウンモ・白色粒多く含む。やや粗い。 る。口唇部下端にキザミメを施す。類部に浅い沈線。		外:淡黄色2.5Y8/4 内:浅黄色2.5Y8/3
87	014-02	弥生土器	細頸壺	SH13	11.1	4.4		口縁部が受口状に立ち上がる。外面に2条の凹線文をめぐらす 白色粒含む。		外:にぶい橙色7.5YR7/4
88	017-01	弥生土器	麦	SH13	21.8	7.0		題部はハケメ調整する。 くの字に外反する口縁部。口唇部下端に、キザミメを施す。体 砂粒多く含む。やや粗い。		内:浅黄橙色7.5YR8/6 外:浅黄橙色7.5YR8/6
89	032-02	弥生土器	細頸壺	包含層	11.0	4.5		部にはナナメハケメののち、直線文風にヨコハケメを施す。 □縁部が受口状に立ち上がる。外面に2条の凹線文をめぐらす 白色粒多く含む。粗い。		内:明黄褐色10YR6/6 にぶい橙色7.5YR6/4
									好	
90	033-04	弥生土器	細頸壺	包含層	9.4	3.3		口縁部が受口状に立ち上がる。外面に2条の凹線文をめぐらす 白色粒多く含む。 類部はハケメ調整する。	軟	淡橙色5YR8/4
91	008-04	弥生土器	細頸壺	包含層	10.3	3.0		口縁部が受口状に立ち上がる。頸部にハケメを施す。 石英・ウンモ・白色粒多く含む。や・		
92	027-03	弥生土器	粗頸壺	包含層	7.3	5.3		担い 口縁部が受口状に立ち上がるが端部は尖り気味となる。 類部に 石英含む。		内:浅黄色2.5Y7/3 外:浅黄色2.5Y7/4
93	030-04	弥生土器	細頸壺	包含層	7.6	6.9		直線文をめぐらす。		内:にぶい黄橙色10YR6/4 橙色7.5YR7/6
									好	
94	028-01	弥生土器	細頸壺	包含層	11,4	3.8		口縁部が受口状に立ち上がる。外面に 2 条の凹線文をめぐらす 石英・白色粒多く含む。 		浅黄色2.5Y7/3 黒褐色2.5Y3/1混
95	027-01	弥生土器	細頸壺	包含層	7.9	8.0		口縁部が受口状に立ち上がる。外面に 2条の凹線文をめぐらす 石英・白色粒多く含む。	軟	外:橙色7.5YR6/6
96	038-02	弥生土器	細頸壺	包含層	10.2	5.5		顕都はハケメ調整する。 口縁部が受口状に立ち上がる。外面に2条の凹線文をめぐらす 石英・ウンモ多く含む。		内:橙色5YR6/6 外:にぶい黄橙色10YR7/4
97	036-04	弥生土器	細頸壺	包含層	5.2	6.1		頸部はハケメ調整する。 口縁部が受口状に立ち上がる。頸部に直線文と波状文をめぐら 砂粒多く含む。やや粗い。		内:橙色5YR6/6 にぶい黄橙色10YR7/4
L.								す。	好	
98	019-04	弥生土器	細頸壺	包含層	12.0	4.5		口縁部が受口状に立ち上がる。口縁部外面に波状文、類部に沈 石英・白色粒多く含む。 線をめぐらす。		外:橙色2.5Y6/6 内:橙色5YR7/6
99	032-05	弥生土器	細頸壺	包含層	12.6	4.5		口縁部が受口状に立ち上がる。外面に2条の凹線文をめぐらす 砂粒多く含む。やや粗い。	良	橙色2.5YR6/6
100	039-04	弥生土器	細頸壺	包含層	14.8	3.5		類部はハケメ調整する。 口縁部が受口状に立ち上がる。口縁部外面に刺突文、類部に直 白色粒含む。やや粗い。		外:にぶい黄橙色10YR7/4
101	032_01	弥生土器	細頸壺	包含層	17,4	6.1		線文がめぐる。 口縁部が受口状に立ち上がる。口縁部外面に2個単位の棒状浮 白色粒多く含む。粗い。		内:浅黄橙色10YR8/4 外:にぷい黄橙色10YR7/4
								文と波状文が、頸部に直線文かめぐる。	好	内:にぶい赤褐色2.5YR5/4
102	032-04	弥生土器	細頸壺	包含層	16.0	4.0		口縁部が受口状に立ち上がる。外面に3条の凹線文をめぐらす 白色粒多く含む。	軟質	橙色5YR7/8
103	039-03	弥生土器	細頸壺	包含層	12.4	5.7		口縁部が受口状に立ち上がる。外面に2条の凹線文をめぐらす ウンモ・白色粒多く含む。	軟	浅黄橙色10YR8/3
104	009-02	弥生土器	細頸壺	包含層	17.5	6.0		顕部はハケメ調整する。 口縁部が受口状に立ち上がる口縁部下端に刺突文、口縁部から 石英・白色粒多く含む。	質軟	外:にぶい黄橙色10YR7/4
			広口壺	包含層	15.9	4.7		顕都にかけて波状文をめぐらす。 大きく外反する口縁部、内面に2個単位の瘤状突起をもつ。ロ 石英・ウンモ・白色粒含む。	質	内:にぶい赤褐色2.5YR5/4 浅黄橙色10YR8/3
								唇部にはキザミメを施す。頸部および口縁部内面をハケメ調整	質	
106	002-01	弥生土器	広口壺	包含層	14.9	8.7		大きく外反する口縁部。内面に4個単位の瘤状突起をもつ。口 砂粒多く含む。 唇部にはキザミメを施す。頸部に直線文をめぐらす。	軟質	明黄褐色10YR7/6
107	035-01	弥生土器	広口壺	包含層	21.0	5.7		大きく外反する口縁部。口唇部にキザミメを施す。敷部および 白色粒多く含む。	軟	外:橙色7.5YR7/6
108	035-02	弥生土器	広口壺	包含層	24.0	5.0		口縁部内面にハケメを施す。 大きく外反する口縁部。内面に3個単位の瘤状突起をもつ。口 ウンモ多く含む。やや粗い。		内:橙色5YR6/8 にぷい赤褐色5YR5/4
								唇部に簾状文風の休止ハケを施す。	好	
		弥生土器	広口壺	包含層	26.6	4.7		大きく外反する口縁部。口唇部に斜格子文を施す。 白色粒多く含む。		外:浅黄橙色7.5YR8/6 内:橙色7.5YR6/8
110	039-02	弥生土器	広口壺	包含層	29.6	2.8		大きく外反する口縁部。口唇部にキザミメを施したのち、磨り 砂粒多く含む。	軟	橙色5YR6/6
		L	<u> </u>			1		消すように凹線を一周させる。	質	

第3表 C地区土器観察表(1)

## 2019 日		登録番号		遺物器形	出土遺構			(cm) その他	調整・技法の特徴	胎土	焼	
14 10 10 10 10 10 10 10									大きく外反する口縁部。口唇部に刺突文を施す。	石英・ウンモ・白色粒含む。		外:にぶい橙色7.5YR7/4
130 13	112	033-02	弥生土器	広口壺	包含層	20.6	4.5		大きく外反する口縁部。口唇部の上端と下端にキザミメを施す	石英・ウンモ・白色粒多く含む。やや		
14 10 10 20 20 20 20 20 20	113	028-02	弥生土器	広口壺	包含層	23.5	3.3		大きく外反する口縁部。口唇部の上端と下端をやや拡張させる		好良	橙色7.5YR7/6
19-10	114	030-01	弥生土器	鉢	包含層	24.0	4.7		内弯しながら立ち上がる。口縁端部は面をもつ。口縁部に3条	白色粒多く含む。やや粗い。	1.4	淡黄色2.5Y8/3
19	115	013-02	弥生土器	鉢	包含層	13.5	5.8			石英・白色粒多く含む。	好	
19 19 19 19 19 19 19 19									の凹線をめぐらす。体部は内外面ともハケメ調整。		質	
10 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1									の凹線をめぐらす。体部は内外面ともハケメ調整。		好	内:浅黄色2.5Y7/3
1 日本の									面には刺突が施される。		好	内:浅黄色2.5Y8/3
10 10 10 10 10 10 10 10									部外面はハケメを施し、内面はナデ調整する。		好	
1	119	012-02	弥生土器	麦	包含層	18.0	7.7			白色粒多く含む。		
1 日本の 1	120	017-02	弥生土器	变	包含層	20.0	4.5			石英・白色粒多く含む。やや粗い。		明黄褐色10YR7/6
12 日本の 株理学園 株理学園 大学 大学 大学 大学 大学 大学 大学	121	007-02	弥生土器	麦	包含層	20.4	5.6		口縁部がくの字に外反する。口唇部にキザミメを施す。口縁部	石英・ウンモ含む。	良	浅黄色2.5YR7/3
120 200-20 株元上部 東	122	016-02	弥生土器	麦	包含層	19.2	6.1		口縁部がくの字に外反する。口唇部にキザミメを施す。体部外	白色粒多く含む。やや粗い。	良	
13 13 13 13 14 15 15 15 15 15 15 15	123	028-03	弥生土器	麦	包含層	19.5	2.9		口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミメを施す。口縁部	白色粒多く含む。	軟	
125 1940 株土土 東 20 20 20 20 20 20 20	124	030-03	弥生土器	瓷	包含層	19.8	4.8		口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミメを施す。口縁部	ウンモ・白色粒多く含む。やや粗い。	_	黄褐色2.5Y5/3
12 12 13 14 15 15 15 15 15 15 15	125	009-01	弥生土器	麦	包含層	19.4	8.3			石英・ウンモ・チャート・白色粒多く		外:暗褐色7.5YR3/3
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	126	008-02	弥生土器	麦	包含層	20.8	3.9			ウンモ・チャート・白色粒多く含む。		
19									部は内外面ともハケメ調整する。	やや粗い。	好	内:淡黄色2.5Y8/3
									部に沈線をめぐらす。		質	
第八日									部内面および体部外面をハケメ調整する。		質	内:浅黄橙色10YR8/4
1				竞		14.0	2.7		部内面および体部外面をハケメ調整する。			
13 13 13 13 13 13 13 13	130	033-01	弥生土器	甍	包含層	24.2	3.7			白色粒多く含む。		
138 04-00 株土土香 東 06	131	023-03	弥生土器	变	包含層	24.6	4.6			石英・白色粒含む。やや粗い。		
133 136 136 136 137 136 137 136 137 136 137 138 13	132	024-02	弥生土器	麦	包含層	24.6	3.2		口縁部がくの字に外反する。口唇部下端にキザミメを施す。口	石英・ウンモ・白色粒含む。やや粗い	軟新	浅黄橙色7.5YR8/4
154 108-01 発生土海 東 240 65 日本部が保久が下す。口唇部にキザミノを論す。口部部内面 石来・白色粒多く含む。やや他い。 食 外 現産を担いておける 日本のシードの主張を対している。 日本のシードの主張を対している。 食 外 日本のシードの主張を対している。 食 日本のシードの主張を対している。 日本のシードのでいる。	133	008-01	弥生土器	麦	包含層	23.2	5.4		口縁部がくの字に外反する。口唇部にキザミメを施す。口縁部	石英・白色粒多く含む。		
13-8 13-9 13	134	018-01	弥生土器	麦	包含層	24.0	6.5		口縁部が強く外反する。口唇部にキザミメを施す。口縁部内面	石英・白色粒多く含む。やや粗い。	良	外:浅黄橙色7.5YR8/6
18 18 18 18 18 18 18 18	135	039-01	弥生土器	麦	包含層	23.0	4.1		口縁部がくの字に外反する。口縁部内外面および体部外面	ウンモ・白色粒多く含む。		
137 233-26 参生土参 男 名命 30.3 4.8 日本部が強く外反する。日春部に中ザミスを捨す。体部外割を かと から から から から から から から	136	036-01	弥生土器	麦	包含層	38.4	3.4			石英・ウンモ・白色粒多く含む。やや	質良	明赤褐色5YR5/6
別	137	033-03	弥生土器	变	包含層	32.3	4.8		□縁部が強く外反する。□唇部にキザミメを施す。体部外面を		好良	に ぷい黄橙色10YR7/4
株土土野 現代 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	138	029-01	弥生土器	*	包含層	29.8	3.3			万英・白色勃多く全む。やや細い	好	
総額内外面をハケメ関連する。 総額内外面をハケメ関連する。 総額内外面をハケメ関連する。 日色粒多く含む。 日色粒・黒色粒含む・やや粗い。 日色粒多く含む。 日色粒多く含む。 日色粒多く含む。 日色粒多く含む。 日色粒多く含む。 日色粒多く含む。 日色粒多く含む。 日色粒多く含む。 日色粒・黒色粒含む・やや粗い。 日本種と577円8/4 日本種と577円8/5 日本種の分類と57円8/5 日本色を57円8/6 日本色を57円8/7 日本色を57円8/6 日本				*		30.0	4.1		施す。口縁部内外面をハケメ調整する。		好	内:淡黄色2.5Y8/3
内外面を小ケメ調整する。									縁部内外面をハケメ調整する。		質	
内外面をハケメ調整する。									内外面をハケメ調整する。		好	内:浅黄橙色7.5YR8/4
内外面をハケメ関数する。									内外面をハケメ調整する。		良好	橙色2.5YR6/6
143 013-01 禁生土器 養 包含層 15.5 5.3 日本部が大きく外反する。口唇部が関に十等ミメを指す。口縁 石美・ウンモ多く含む。やや粗い。 良 外:複色2.5YR7/6 好 内:浅微慢色10YR8/4 好 007-01 禁生土器 養 包含層 24.8 4.4 日縁部が大きく外反にする。全体的に軽いハケメを施す。 ウンモ・石英粒多く含む。やや粗い。 良 外:液色2.5YR7/8 好 内:淡淡慢色2.5YR7/8 好 内:淡淡慢色2.5YR7/8 好 内:淡淡色2.5YR7/8 好 内:淡淡色2.5YR7/8 好 内:淡淡色2.5YR7/8 好 大:次本色5.5YR8/4 内:淡淡色2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外:混芯が着色5YR8/8 内:湿疹色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 次:没面2.5YR7/8 内:湿疹色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 淡黄色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 八:流が黄色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外:流は黄色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外:流は黄色2.5YR7/8 内:によい黄色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外:によい黄色2.5YR7/8 内:によい黄色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外:におい黄色2.5YR7/8 内:灰白色5.5YR7/8 内:灰白色5.5YR7/8 内:灰白色5.5YR7/8 内:灰白色5.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外:によい黄色2.5YR7/8 内:灰白色5.5YR7/8 内:灰白色5.5YR7/8 内: 広部 位息を 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外: によい黄色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外: によい黄色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 中枢い。 良 外: によい黄色2.5YR7/8 日色粒多く含む。 地へ。 良 外: によい黄色1.0YR7/4 内: 次砂色2.5YR7/8 日色2.5YR7/8 日色2.5						25.4			内外面をハケメ調整する。			浅黄色2.5Y7/3
144 007-01 禁生土器 要 包含層 24.8 4.4 口縁部が受口状となる。全体的に粗いハケメを施す。	143	013-01	弥生土器	变	包含層	15.5	5.3			石英・ウンモ多く含む。やや粗い。	1 1	
145 019-02 弥生土器 細顆壺 包含層	144	007-01	弥生土器	麦	包含層	24.8	4.4			ウンモ・石英粒多く含む。やや粗い。	良	外:淡橙色5YR8/4
146 027-02 弥生土器 壺 包含層 類都片。外面はハケメののち、刺突文が2段にわたってめぐら 石英・ウンモ・白色粒含む。 良 外:にぶい種色5YR6/4 好 内:種色5YR6/6 好 内:種色5YR6/6 好 内:種色5YR6/6 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	145	019-02	弥生土器	細頸壺	包含層				外面にハケメののち、沈線と刺突文をめぐらす。	石英・ウンモ・白色粒多く含む。粗い	軟	外:淡黄色2.5Y8/4
147 028-04 外生土器 壺 包含層 類都片。外面はハケメののち、多条の沈線をめぐらし、沈線間に具数腹縁による刺突を施すほか、沈線上に円形浮文を施す。 白色粒多く含む。 良 外:種色5YR6/6 好 内:種色65YR6/6 好 大きく内海にリアメののち、変換のごのす。 日本の底部。外面にハケメののち、沈線を 2条めごらす。 日本の底部。外面にハケメののち、沈線を 2条めごらす。 日本の底部。外面にハケメののち、沈線を 2条めごらす。 日本の底部。外面にハケメののち、沈線を 2条めごらす。 日本の底部。外面にハケメののち、変換の沈線をめぐらす。 日本の定部。 日本の底部。外面にハケメを施す。 日本校多く含む。中枢和い。 良 外:淡黄色2.5YR/3 日本校多く含む。中枢和い。 良 外:淡黄色2.5YR/3 日本校多く含む。中枢和い。 日本校多く合む。中枢和い。 日本校多く含む。中枢和い。 日本校多く含む。相い。 日本校を2577/3 日本校を2577/7 日本校を2577/7 日本校の底部。 日本校の底部をは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校の底部をは、日本校の底部をは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校ののには、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校のをは、日本校ののをは、日本校の	146	027-02	弥生土器	壺	包含層					石英・ウンモ・白色粒含む。	良	外:にぶい橙色5YR6/4
148	147	028-04	弥生土器	壺	包含層				頸部片。外面はハケメののち、多条の沈線をめぐらし、沈線間		良	外:橙色5YR6/6
149 019-01 弥生土器 壺 包含層 類部片。外面はハケメののち、多条の沈線をめぐらす。 砂粒多く含む。やや粗い。 良 外:淡黄色2.5Y8/4 好 内:浅黄色2.5Y8/4 好 内:浅黄色2.5Y8/4 好 内:浅黄色2.5Y8/4 好 内:浅黄色2.5Y8/4 好 内:浅黄色2.5Y8/4 好 内:浅黄色2.5Y8/4 好 内:浅黄色2.5Y7/3 日	148	014-01	弥生土器	壺	包含層						軟	外:にぶい黄橙色10YR6/4
5 15 15 15 15 15 15 15	149	019-01	弥生土器	壺	包含層				顕部片。外面はハケメののち、多条の沈線をめぐらす。	砂粒多く含む。やや粗い。		
円形刺突文を施す。	150	034-02	弥生土器	無頸壺	包含層	11.5	6.9		大きく内湾しながら立ち上がる。端部は面をなす、端部近くに		好	内:浅黄橙色10YR8/4
外面には羽状文をめぐらし、その下に刺突文を施す。 54 55 55 55 55 55 55 5									円形刺突文を施す。		好	
50 153 027-05 弥生土器 底部 包含層 2.7 底径4.0 平底の底部。 白色粒多く含む。やや粗い。 良 外: 灰白色5.877/2 好 内: 仄ぶい黄色2.576/4 内: 仄ぶい黄色2.577/3 好 内: 仄ぶい黄色2.577/3 好 内: 仄がりき2.577/1 円: 灰白色7.5877/1 円: 灰白色7.5877/4 円: 大口色粒多く含む。粗い。 良 外: 灰白色7.5877/4 円: 次丁酸色2.577/3 円: 次丁酸色2.577/3 円: 次丁酸色2.577/3 円: 次丁酸色2.577/3 日: 次丁の上では、								库络5.4	外面には羽状文をめぐらし、その下に刺突文を施す。		好	
154 019-03 弥生土器 底部 包含層 2.2 底径7.0 平底の底部。外面にハケメを施す。 石英・白色粒多く含む。粗い。 良 外:にぶい責種色10YR7/4 好 内:浅黄色2.5Y7/3 155 012-03 弥生土器 底部 包含層 2.4 底径4.6 平底の底部。外面にハケメを施す。 ウンモ・白色粒多く含む。粗い。 良 外:黄種色7.5YR7/8											好	内:にぶい黄色2.5Y6/4
好内:浅黄色2.577/3 155 012-03 弥生土器 底部 包含層 2.4 底径4.6 平底の底部。外面にハケメを施す。 ウンモ・白色粒多く含む。粗い。 良 外:黄種色7.5787/8											好	内:灰白色7.5Y7/1
155 012-03 弥生土器 底部 包含層 2.4 底径4.6 平底の底部。外面にハケメを施す。 ウンモ・白色粒多く含む。粗い。 良 外: 黄橙色7.5YR7/8												
	155	012-03	弥生土器	底部	包含層		2.4	底径4.6	平底の底部。外面にハケメを施す。	ウンモ・白色粒多く含む。粗い。	良	外:黄橙色7.5YR7/8

第4表 C地区土器観察表(2)

	登録	出土		出土		k (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色 調
	番 号 038-05	器 種 弥生土器	器 形底部	包含層	口 径 現存高 2.0		平底の底部。底部外面に木業痕。	砂粒多く含む。粗い。	良	にぶい黄色2.5Y6/4
157	028-06	弥生土器	底部	包含層	2.4	底径3.4	平底の底部。外面にハケメを施す。	砂粒多く含む。粗い。		橙色7.5YR7/6
158	008-05	弥生土器	底部	包含層	2.0	底径5.0	平底の底部。外面にハケメを施す。	白色粒多く含む。やや粗い。		外:灰白色2.5Y8/2 内:灰色N5/
159	038-01	弥生土器	底部	包含層	4.0	底径5.6	平底の底部。外面にハケメを施す。	ウンモ・白色粒多く含む。粗い。	良	外:浅黄色2.5Y7/3 内:にぶい黄橙色10YR6/4
160	028-05	弥生土器	底部	包含層	3.8	底径6.6	平底の底部。	白色粒多く含む。		外:にぶい黄色2.5Y6/4 内:暗灰黄色2.5Y5/2
161	027-04	弥生土器	底部	包含層	3.4	底径5.0	平底の底部。内面にハケメを施す。	砂粒多く含む。やや粗い。	良	外:にぶい黄橙色10YR7/3 内:灰白色2.5GY8/1
162	011-02	弥生土器	底部	包含層	6.4	底径9.0	平底の底部。外面にハケメを施す。	白色粒多く含む。やや粗い。	良好	
163	011-01	弥生土器	底部	包含層	6.7	底径5.5	平底の底部。内外面にハケメを施す。	白色粒多く含む。		外: 黄灰色2.5Y6/1 内: 暗灰色N3/
164	033-05	弥生土器	底部	包含層	2.0	底径4.3	平底の底部。	石英・白色粒多く含む。	軟質	橙色 5YR6/6
165	032-06	弥生土器	底部	包含層	2.6	底径5.2	平底の底部。	白色粒多く含む。	11	外:赤褐色10YR5/4 内:にぷい黄橙色10YR7/4
166	034-04	弥生土器	底部	包含層	2.6	底径5.2	平底の底部。	白色粒多く含む。		外:橙色5YR6/8 内:灰色5Y5/1
167	009-03	弥生土器	底部	包含層	3.0	底径5.8	平底の底部。	白色粒多く含む。	軟質	外:黄橙色10YR8/6 内:浅黄橙色10YR8/4
168	017-04	弥生土器	底部	包含層	2.6	底径5.0	平底の部。	砂粒多く含む。やや粗い。	良好	浅黄橙色10YR8/3
	032-03		脚台	包含層	3.2		腕ないし鉢の脚部か、大きく踏ん張る。	ウンモ・白色粒含む。やや粗い。	好	浅黄橙色10YR8/4
		弥生土器	脚部	包含層	4.7		台付売の脚台部。外面をハケメ調整する。	白色粒多く含む。やや粗い。	好	にぶい黄橙色10YR7/3
		弥生土器	脚台	包含層	4.5		台付売の脚台部。外面をハケメ調整する。	石英・ウンモ・白色粒多く含む。やや 粗い。	好	内:浅黄色2.5Y7/3
		弥生土器	底部	包含層	3.5			砂粒多く含む。やや粗い。	好	にぶい黄橙色10YR7/4
		弥生土器	底部	包含層	4.1	底径9.6	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	砂粒多く含む。	好	
		弥生土器	底部	包含層	4.8	底径8.4		砂粒多く含む。粗い。	好	浅黄色2.5Y7/3
		弥生土器	底部	包含層	4.6	底径7.7	平底の底部。壺の底部。外面をヘラミガキ、内面をハケメ調整 する。		質	外:橙色2.5YR6/8 内:赤橙色10YR6/8
		山茶椀	椀	包含層	<u> </u>	高台径7.6	山茶椀。平坦な底部に低平な高台がつく。体部は斜上方に直線 的にのびる。高台に籾圧痕を残す。		好	灰白色7.5Y8/2
L		山茶椀	椀	包含層	15.0 6.0		山茶椀。平坦な底部に低平な高台がつく。体部は斜上方に直線 的にのびる。高台に初圧痕を残す。		好	外:灰白色10YR7/1 内:灰色7.5Y6/1
		縄文土器		包含層			外面に沈線による文様をもつ。	ウンモ・白色粒多く含む。やや粗い。	好	外:にぶい黄橙色10YR7/4 内:橙色5YR6/6
		縄文土器	浅鉢	包含層			口縁部が内湾していて立ち上がる。端部は面をもつ。外面に沈 線と縄文による文様帯をもつ。		好	淡黄色2.5Y8/3
		縄文土器		包含層			口縁部が内湾して立ち上がる。波状口縁となるか。端部に面を もつ。口縁部よりやや下がった位置にキザミメを加えた突帯。		好	外: 明赤褐色2.5YR5/6 内: にぶい褐色7.5YR5/4
i		縄文土器	浅鉢	包含層			浮線網状文の浅鉢。外面に突帯をもち、浮線文を配す。内面に は1条の沈線をめぐらす。		好	外:橙色5YR7/6 内:橙色2.5YR7/6
		弥生土器	查	包含層			顆部片。幅広の沈線を数条めぐらす。	石英・白色粒多く含む。粗い。	好	外:黑色N1.5/ 内:黄褐色2.5Y5/3
		弥生土器	查	包含層			敷部片。数条の沈線の下にナナメ方向の構描文を施す。	石英・ウンモ多く含む。	好	外:褐灰色10YR4/1 内:にぶい黄色2.5Y6/3
i		弥生土器	查	包含層			頸部片。櫛描きの直線文と波状文を施す。	白色粒多く含む。	好	外:暗灰色N3/ 内:灰白色5Y7/2
	016-04	弥生土器	壶	包含層			外面に粗いハケメを施し、直線文をめぐらす。	チャート・白色粒含む。	好	外: にぶい黄橙色10YR7/3 内: にぶい黄橙色10YR7/4
		弥生土器	壶	包含層			外面に沈線で画した文様部と無文部を交互に配する。	白色粒多く含む。		外:橙色5YR/6/6 内:明黄褐色10YR7/6
		弥生土器	查	包含層			機縄文による文様部と無文部を交互に配するものと思われる。	砂粒多く含む。	質	外:にぶい黄橙色10YR6/4 内:明赤褐色5YR5/6
188	038-04	弥生土器	查	包含層			外面に波状の文様をタテ方向に垂下させる。	石英・白色粒多く含む。やや粗い。	良好	明赤褐色5YR5/6

第5表 C地区土器観察表(3)

	登録	出土	遺物器形	出土	日 径		: (cm.) その他	調整・技法の特徴		焼成	色 肩
	番 号 010-03	器種	深鉢	返 存 包含層	山住	現仔商	その他	増都は面をもつ。やや太めの沈糠を施す。	白色粒含む。やや粗い。	良	外:淡黄色7.5YR8/3
302	010-02	縄文土器	深鉢	包含層				端部は内側にやや拡張し、面をもつ。やや太めの沈線間を縄文	石英・白色粒多く含む。	良	内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぷい橙色7.5YR7/3
303	015-01	縄文土器	深鉢	包含層	<u> </u>			で充填する。 端部は面をもつ。やや太めの沈線間を縄文で充填する。	石英・白色粒含む。粗い。	良	内:におい橙色7.5YR7/4 外:におい橙色7.5YR7/3
304	015-04	縄文土器	深鉢	包含層				端部は面をもつ。やや太めの沈線間を縄文で充填する。	石英・ウンモ・白色粒含む。やや粗い		内:にぷい黄橙色10YR7/4 外:黒褐色10YR3/1
305	008-01	縄文土器	深鉢	包含層	ļ			増部は面をもつ。やや太めの沈線を施す。	石英・ウンモ・白色粒・黒色粒・赤色		内:浅黄橙色7.5YR8/4 外:にぷい黄橙色10YR7/3
-		縄文土器	深鉢	包含層				増都は面をもつ。やや太めの沈線間を縄文で充填する。	粒含む。やや粗い。	好	内:橙色5YR6/6 外:黑褐色10YR2/2
										好	内: 黄橙色10YR8/6 外: 黑褐色7.5YR3/1
		縄文土器	深鉢	包含層				端部は面をもつ。やや太めの沈線間を縄文で充填する。		好	内:浅黄橙色10YR8/4
	015-02		深鉢	包含層				端部は面をもつ。やや太めの沈線間を縄文で充填する。		好	外:黑褐色5YR2/1 内:赤黑色10YR1.7/1
309	010-01	縄文土器	深鉢	包含層				増部は面をもつ。やや太めの沈線を縄文で充填する。		良好	淡黄色2.5Y7/4
310	005-01	縄文土器	深鉢	包含層	30.8	7.5		端部は面をもつ。太めの沈線で画して刺突で充填する。		良好	にぶい赤褐色5YR5/3
311	019-03	縄文土器	深鉢	包含層				沈線間を縄文で充填する。		1 - 1	外:灰黄褐色10YR5/2 内:黑色10YR2/1
312	017-02	縄文土器	深鉢	包含層				沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良	外: 灰黄色2.5Y6/2 内: 浅黄橙色10YR8/3
313	017-04	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。	軟	外:浅黄褐色10YR8/4 内:にぶい黄橙色10YR6/3
314	020-03	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良	浅黄色2.5Y7/3
315	017-05	縄文土器	深鉢	包含層	 			やや太めの沈線を施す。	白色粒多く含む。粗い。	良	黒褐色10YR2/2混 外・浅黄色2.5Y7/3
316	018-02	縄文土器	深鉢	包含層	-			やや太めの沈線間を縄文で充填する。	ウンモ・白色粒多く含む。		内:浅黄橙色10YR8/4 外:橙色7.5YR7/6
317	009-01	縄文土器	深鉢	包含層		-		やや太めの沈線間を縄文で充填する。	石英・ウンモ・白色粒含む。粗い。		内:黄灰色2.5Y4/1 外:浅黄橙色10YR8/3
		縄文土器	深鉢	包含層		-		やや太めの沈線間を縄文で充填する。			内:にぷい黄橙色10YR7/4 外:灰白色10YR8/2
								やや太めの沈線間を縄文で充填する。		好	内:浅黄橙色7.5YR8/6 外:灰色N4/
	018-03		深鉢	包含層						質	内:浅黄色2.5Y7/3
	018-01		深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。		好	外:浅黄色2.5Y7/3 内:灰黄色2.5Y6/2
321	008-03	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。		1 1	外:灰褐色7.5YR6/2 内:によい黄橙色10YR7/4
322	008-04	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。			外:灰白色10YR8/2 内:灰白色10YR8/1
323	019-04	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。			外:黄橙色10YR8/6 内:淡黄色2.5Y8/3
324	017-06	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。		外:橙色5YR7/6 内:橙色7.5YR7/6
325	020-01	縄文土器	深鉢	包含層				沈線間を縄文で充填する。	石英・ウンモ・白色粒多く含む。やや 粗い。	良	
326	019-06	縄文土器	深鉢	包含層		-		やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。やや粗い。		淡黄色2.5Y8/4
327	020-02	縄文土器	深鉢	包含層				沈線間を縄文で充填する。	石英・白色粒多く含む。やや粗い。	良	外:黑色2.5Y2/1
328	019-05	縄文土器	深鉢	包含層		-		やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良	内:黄橙色10YR8/6 淡黄色2.5Y8/4
329	008-02	縄文土器	深鉢	包含層	-	-		沈線間を縄文で充填する。	石英・ウンモ・白色粒・赤色粒含む。		外:浅黄橙色10YR8/3
330	017-01	縄文土器	深鉢	包含層				沈線間を縄文で充填する。			内:にぶい黄橙色10YR7/3 浅黄色2.5Y7/4
		縄文土器	深鉢	包含層				沈線間を縄文で充填する。		好良	外:橙色7.5YR6/6
		縄文土器	深鉢	包含層	ļ		<u> </u>	沈線間を縄文で充填する。		好	内:浅黄色2.5Y7/4
					ļ				粗い。	好	内:淡黄色2.5Y8/4 外:にぶい黄橙色10YR7/2
		縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。		好	内:にぶい黄橙色7.5YR7/4
		縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。		好	内:に ぷい橙色10YR7/ 5
335	001-05	縄文土器	深鉢	包含層				端部に面をもつ。外面に条線文を施す。		好	内:にぶい黄橙色10YR7/3
336	003-06	縄文土器	深鉢	包含層				増部を丸くおさめる。外面に条線文を施す。	石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗い		外:暗赤褐色5YR3/3 内:にぶい黄橙色10YR7/3
337	002-01	縄文土器	深鉢	包含層				増部に面をもつ。外面に条線文を施す。	石英・白色粒・赤色粒含む。やや粗い	良	
338	003-01	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・白色粒・黒色粒含む。	良	外:明黄褐色10YR7/6 内:浅黄橙色10YR8/3
339	002-03	深鉢	包含層			-		外面に条線文を施す。	石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗い	良	
340	002-05	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・白色粒・黒色粒含む。粗い。	良	外:黑褐色7.5YR2/2
341	002-04	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗い	良	
342	001-02	縄文土器	深鉢	包含層	-	-		外面に条線文を施す。	微細な石英・白色粒含む。やや粗い。	良	内:黒褐色7.5YR3/1 外:にぶい黄橙色10YR7/2
		縄文土器	深鉢	包含層	<u> </u>			外面に条線文を施す。	石英・ウンモ・白色粒含む。やや粗い		内:橙色5YR6/6 外:にぶい黄橙色10YR7/2
		縄文土器	深鉢	包含層		ļ		外面に条線文を施す。		好	内:オリーブ黒10Y3/1 黄灰色2.5Y4/1
			深鉢					外面に条線文を施す。		好	外:黑褐色7.5YR2/2
345	019-09	縄文土器	深畔	包含層				ファ皿ィ〜末原义で應り。			内:浅黄橙色10YR8/5

第6表 D地区土器観察表(1)

図版	登録	出土	溃物	出土	法	#	(cm)			焼	
	番号		器形	遺構	口径	現存高	その他	調整・技法の特徴	胎 土	成	色 調
346	001-03	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗い		外: にぶい橙色5YR6/4 内: にぶい赤褐色5YR5/4
347	001-06	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・白色粒含む。	良	外:灰黄褐色10YR6/2 内:にぶい黄褐色10YR7/
348	002-02	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・ウンモ・白色粒・黒色粒・赤色粒 含む。やや粗い。	良	外:黑褐色10YR3/2 内:灰白色2.5Y7/1
349	011-02	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	白色粒含む。	良	外·灰白色2.5Y8/2 内·淡黄色2.5Y8/4
350	001-01	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・白色粒含む。粗い。	良	外: にぶい赤褐色5YR4/5 内:浅黄橙色10YR8/3
351	003-04	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・白色粒含む。	良	外:橙色2.5YR6.5/6
352	004-01	縄文土器	深鉢	包含層	23.2	4.9		端部を丸くおさめる。外面に条線文を施す。	石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗い	。良	内:にぶい橙色7.5YR7/5 外:灰色N4/ 内:浅黄橙色10YR8/4
353	016-01	縄文土器	深鉢	包含層				外面にキザミメを施した隆帯を垂下する。	やや密。	良	内:複貫位色101 R6/4 外:褐色7.5YR4/3 内:におい橙色7.5YR6/4
354	016-04	縄文土器	深鉢	包含層				突帯下に斜格子状に条痕を施す。	石英・ウンモ・チャート白色粒含む。	良	外:暗灰色2.5Y5/2 内:橙色2.5YR6/8
355	016-02	縄文土器	深鉢	包含層				端部は丸くおさめる。口縁部外面に2段の刺突文をめぐらす。	白色粒多く含む。粗い。		明赤褐色5YR5/6
356	016-03	縄文土器	深鉢	包含層				端部は丸くおさめる。口縁部外面に2段の刺突文をめぐらす。	白色粒多く含む。粗い。		明赤褐色5YR5/6
357	014-01	縄文土器	深鉢	包含層	24.0	3.2		大きく外反する口縁部。	石英・白色粒含む。やや粗い。	良	外:明赤褐色2.5YR5/8 内:橙色2.5YR6/6
358	004-02	縄文土器	深鉢	包含層				外面に条線文を施す。	石英・白色粒・黒色粒含む。やや粗い		
359	007-01	縄文土器	深鉢	包含層		6.1	底径13.0	平底の底部片。	石英・白色粒多く含む。やや粗い。		外:赤橙色10YR6/6 内:浅黄橙色10YR8/3
360	013-01	縄文土器	浅鉢	包含層	22.7	5.8		内弯する精製の浅鉢。内外面を磨く。	石英・白色粒・黒色粒含む。	良	外:黒褐色5YR2/1 内:にぶい黄橙色10YR7/
361	012-02	弥生土器	細類壺	包含層	9.2	3.2		口縁部が受口状となる。	白色粒含む。		黑色2.5Y2/1
362	006-01	弥生土器	麦	包含層	20.0	3.4	 !	山形口縁となる。内外面に粗いハケメを施す。	白色粒含む。	良	外:灰褐色5YR6/2 内:にぶい赤褐色5YR5/3
363	012-03	弥生土器	麦	包含層	20.4	2.3		大きく外反する口縁部。口唇部下端にキザミメを施す。	砂粒多く含む。	良	外:褐灰色10YR4/1 内:にぶい黄褐色10YR7/
364	012-01	弥生土器	底部	包含層		2.2	底径6.2	平底の底部片。	砂粒多く含む。やや粗い。	良	外:橙色7.5YR7/6 内:浅黄色2.5Y8/3
365	012-04	弥生土器	麦	包含層	18.4	3.3		大きく外反する口縁部。口唇部下端にキザミメを施す。	白色粒含む。	良	外:橙色7.5YR6/6 内:明黄褐色10YR6/6
366	019-01	弥生土器	壺	包含層				壺の体部上半部片。頸部下に刺突文。体部には直線文と無文部 を交互に配する。直線文帯にはタテ方向にキザミメを施す。	白色粒多く含む。	軟	外:にぶい黄橙色10YR7/ 内:黒褐色2.5Y7/3

第7表 D地区土器観察表(2)

	登録		遺物	出土	法		(cm)	調整・技法の特徴	胎 土	焼	色 胸
	番号005-01	器 種 土師器	器 形 台付壺	遺 構 SX19	口径	現存高 18.9	その他	 外上方に閉く口縁部とやや下膨れの体部に短脚の脚台がつく。	石英・白色粒・黒色粒含む。	成良	橙色2.5YR6/8
								体部に直線文と波状文を交互に配し、脚部にも直線文を施す。		好	
368	004-01	土師器	広口壺	SX19	15.9	27.9		体部中央に最大径をもち、口縁部は大きく外反する。体部外面 はヘラミガキを施す。	石英・白色粒含む。		外:橙色5YR6/8 内:淺黄橙色7.5YR8/4
369	002-03	土師器	広口壺	SX20	13.9	2.0		口縁部が大きく外反する。	石英・白色粒含む。	良	外:にぶい橙色7.5YR7/
270	002 02	土師器	広口壺	SX20	14.0	6.1		口縁部は大きく外反し、頸部に突帯をめぐらす。	石英・白色粒・黒色粒含む。		内:橙色5YR7/6 外:明赤褐色2.5YR5/6
310	002-02	工神神	ᄊᄓᅘ	SAZU	14.0	0.1		口称的は人でくが及じ、類的に大田を切くうす。	11天・日色位・無色位合む。		内:明赤褐色5YR5/6
371	008-01	土師器	広口壺	SX20				口縁部が大きく外反する。	石英・ウンモ・白色粒含む。		外: によい橙色7.5YR7/
372	002-04	土師器	広口壺	SX20				口縁部が大きく外反する。	石英・ウンモ・白色粒含む。		内: にぶい橙色5YR7/4 外: にぶい黄橙色10YR7
070	002-01	土師器	広口壺	SX20	21.4	4.9		口縁部は大きく外反し、頸部に突帯をめぐらす。	石英・ウンモ・白色粒含む。やや粗い	,	
313	002-01	工品作品	ALISE	3720	21.4	4.9		口標的は入さくが及じ、類的に失情を切くらり。	石央・リンモ・日色松音む。やや祖い	好	
374	003-01	土師器	広口壺	SX20		4.3	底径5.3	底部片。ややあげ底気味となり、体部内外面をハケメ調整。	石英・白色粒・黒色粒含む。		外:明赤褐色2.5YR5/6
375	001-01	土師器	広口壺	SX20	15.0	20.2		 大きく外反する口縁部と球形に近い体部からなる。体部外面は	石英・白色粒・黒色粒含む。	良	内:灰N4/ 浅黄橙色2.5Y8/4
	***	1 4 80						ハケメ調整し、内面は下半部にハケメ、上半部はナデを施す。		好	
376	006-01	土師器	広口壺	SX20		20.7	底径5.4	はは球形の体部。底部はややあげ底気味の平底となる。体部内 外面をハケメ調整する。	石英・白色粒・黒色粒含む。		外:明赤褐色2.5YR5/6 内:灰N4/
377	015-01	縄文土器	深鉢	包含層				平底の深鉢。口縁部下に縄文帯が横走し、体部には紡錘文が認	砂粒多く含む。やや粗い。		外:淡黄色2.5YR8/3
378	007-03	縄文土器	浅鉢	包含層	19.1	3.8		られる。 □縁部が内湾して立ち上がる。外面には沈線で区面されたキザ	石英・ウンモ・白色粒含む。		内:淡黄色2.5Y8/3 にぶい黄橙色10YR6/4
								ミメが施される。		質	
379	012-03	縄文土器	底部	包含層		2.2	底径9.9	半底の底片。	石英・白色粒多く含む。粗い。		外:にぶい黄橙色10YR7 内:にぶい黄色2.5Y6/3
382	010-03	縄文土器	深鉢	包含層				端部は面をなす。やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。粗い。	良	外:黑褐色10YR3/1
383	011-04	縄文土器	深鉢	包含層				 端部は面をなす。やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。やや粗い。		内:淡黄色2.5Y8/3 外:浅黄色2.5Y7/3
				C. Li / Li				AND THE RESERVE OF THE PROPERTY OF THE PROPERT			内:淡黄色2.5Y8/4
384	010-06	縄文土器	深鉢	包含層				端部は面をなす。やや太めの沈線間を縄文で充填する。	ウンモ・白色粒多く含む。やや粗い。		外:黑色2.5Y2/1 内:淡黄色2.5Y8/4
385	010-01	縄文土器	深鉢	包含層				端部は面をなす。やや太めの沈線間を縄文で充填する。	白色粒多く含む。やや粗い。		淡黄色2.5Y8/6
386	012 02	縄文土器	深鉢	包含層				端部は面をなす。やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。粗い。	好	外:黄橙色10YR8/6
300	012-02	种及工证	(ASPT	26/8				場的は固てなり。やや人の少児療師を極くて児童する。	砂粒多く百ぴ。種い。		内:明黄褐色10YR7/6
387	011-01	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線を施す。	白色粒多く含む。やや粗い。		外:橙色7.5YR7/6 内:橙色5YR6/6
388	010-02	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	やや粗い。		外:灰黄色2.5Y6/2
200	012 02	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	石英・白色粒多く含む。やや粗い。		内:黄橙色10YR8/6 外:黄灰色2.5Y5/1
303	013-02	种义工品	(AK.)	2.67				ででなめの化林司を極文で元英する。	石央・日巴紅夕 くらむ。 やや祖V・。	1 1	内:浅黄色2.5Y7/3
390	013-05	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	ウンモ・チャート粒多く含む・やや粗		
391	011-05	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	い。 石英・白色粒多く含む。粗い。		内:淡黄色2.5Y8/4 黄檀色10YR8/6
202	012 02	縄文土器	深鉢	与金属				わめたいの連絡眼を調立で本稿よ ?	丁本 ホンエ 古を数をえ合む あめ	好	N + 45 FT 42 0 E374 /1
392	013-03	縄又工器	深笋	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	石英・ウンモ・白色粒多く含む。やや 粗い。		外: 黄灰色2.5Y4/1 内:淡黄色2.5Y8/3
393	010-04	縄文土器	深鉢	包含層			-	やや太めの沈線間を縄文で充填する。	白色粒多く含む。	1	浅黄色10YR8/3
394	011-03	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒多く含む。粗い。	好良	外:淡黄橙色10YR8/4
205	010.05	\$2 -t1. 00	STE AL	50				トゥトゥング(株式を積み)の大麻子。	71,44,4,1, 4,4(1)		内:黄橙色10YR8/6
395	010-05	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒含む。やや粗い。		外:淡黄色2.5Y8/4 内:黄灰色2.5Y4/1
396	011-06	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	ウンモ多く含む。やや粗い。	良	外: 黑色N2
397	011-02	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	砂粒含む。やや粗い。	好良	外:淡黄色2.5Y8/3
										好	内:淡黄色2.5Y8/4
398	U14-U1	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	石英・白色粒多く含む。やや粗い。		外:浅黄色2.5Y7/3 内:淡黄色2.5Y8/4
399	014-02	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	石英・ウンモ多く含む。やや粗い。	良	外:黑褐色10YR2/1
400	012-01	縄文土器	深鉢	包含層				外面を条痕調整する。	砂粒多く含む。粗い。		内: 灰黄色2.5Y7/2 黄橙色10YR8/6
										好	
401	013-04	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	白色粒多く含む。やや粗い。		外:にぶい黄色2.5Y6/4 内:浅黄色2.5Y7/4
402	013-01	縄文土器	深鉢	包含層				やや太めの沈線間を縄文で充填する。	白色粒多く含む。やや粗い。	良	浅黄色2.5Y7/3
403	012-05	弥生土器	壺	包含層				壺の体部上半の破片。直線文と刺突文を交互に配する。	石英・白色粒含む。	好數	外:橙色7.5Y7/6
100		>1-1-1-16F		C-17#				ユン Tupユーマン駅/ 0 E駅人と利大人を入立に扱りの0	11 LEME 00		内:浅黄色5Y7/3

第8表 E地区土器観察表

参 考 伊勢地方の磨製石斧の例

本報告に関連して、北・中勢地域の弥生時代の遺跡から出土した磨製石斧の一部について、未発表例を中心に、一部既報告のものも含めて掲載した。

中山遺跡(員弁郡北勢町)(第74図A1~A4)

いずれも磨製石斧の未成品とみられるが、採集品ということもあり、縄文時代のものか弥生時代のものかは不明のものも含まれるが、A1·A2については、形態的に弥生時代のものと思われる。

A2を除き、他はいずれも工程的には敲打段階まで至ったもので、A1は敲打がかなり進んでいることと、その長さからしてすでに刃部を作りだし使用していた可能性もある。いずれも材質はハイアロクラスタイトと考えられる塩基性岩である。

野々田遺跡(員弁郡大安町)(第74図B5~B7)

B5·B7は剝離段階の未成品で、B6は敲打段階の 未成品である。野々田遺跡は、縄文時代からの遺跡 であるが、B6·B7は未成品ながらもその厚みから 考えて、弥生時代の伐採斧となるものであった可能 性が大きい。いずれも材質はハイアロクラスタイト と考えられる塩基性岩である。

大谷遺跡(四日市市)(第75図C8·C9)

ともに成品であり、基部も研磨されている。 断面 形はやや偏平となる。

大谷遺跡は弥生前期の竪穴住居跡や環濠、および 後期の方形周溝墓が確認されているが、中期につい ては明確でない。従って、石斧は前期に遡る可能性 がある。材質はハイアロクラスタイトと判別される 塩基性岩が用いられている。

永井遺跡(四日市市)(第75図D10)

偏平片刃石斧で、研磨が全面に施されている。材質はハイアロクラスタイトと判別できる塩基性岩である。

永井遺跡は弥生前期遺構の遺構・遺物が確認されているが、発掘調査で出土した石器の大半は前期のものとされる。

上畑遺跡(四日市市)(第75図E11)

刃部は丁寧に研磨されていることから、成品として使用されていたと考えられるものだが、細かな敲打痕を残す。両刃で断面形はやや厚みのある楕円形となる。材質はハイアロクラスタイトである。

上畑遺跡は永井遺跡と隣接する遺跡で、弥生後期の竪穴住居跡が発掘調査で確認されているが、それ 以前の遺構については未発見である。

上野遺跡(四日市市)(第75図F12)

長さ19cmをはかる大型の両刃の石斧で、断面形も 厚みのある楕円形となる。刃部は丁寧に研磨されて いるが、それ以外の部分は細かな敲打痕が残る。

上野遺跡は弥生時代中期でも後半を中心とした竪 穴住居跡などが発掘調査で確認されており、F12も 第1次調査のSK01出土のものである。

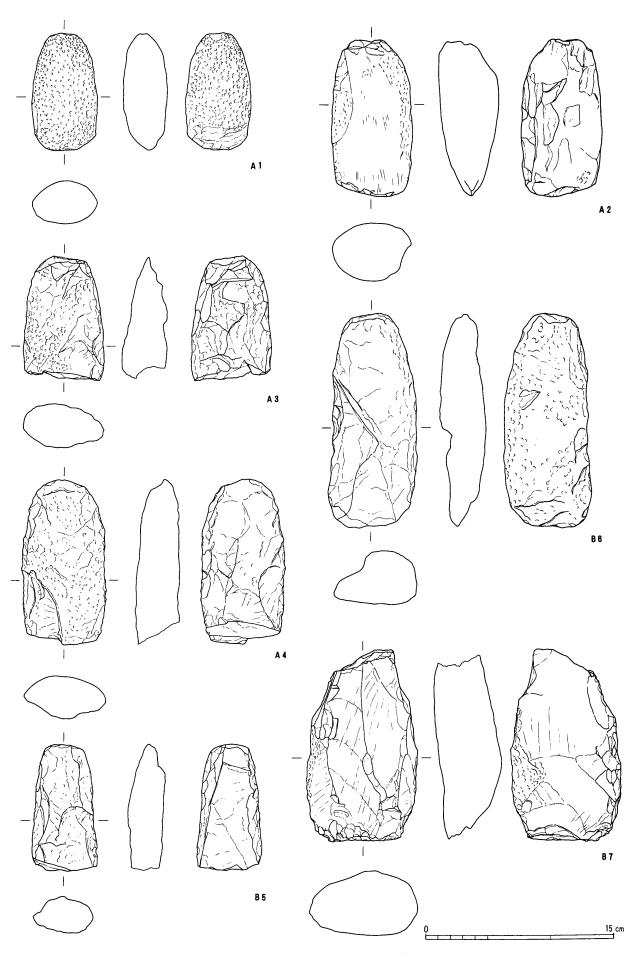
納所遺跡(津市)(第76~79図G13~G40)

G13~G34が両刃の石斧で、G35·36~G38が偏平 片刃石斧、G37·39·40が柱状片刃石斧である。伐採 斧として使用されたと思われる両刃石斧のいくつか は、使用頻度により本来の長さからかなり短くなっ たものも多く、さらにG28·29·34などは、凹石など に再利用された痕跡をもつ。

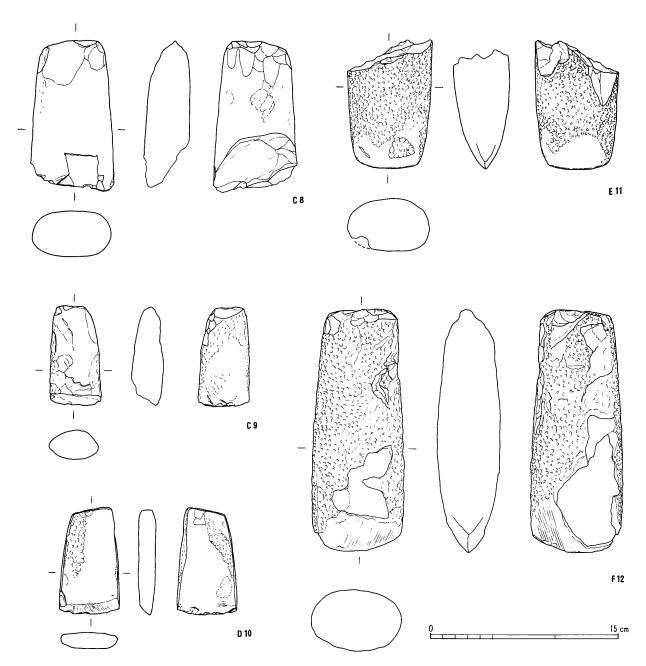
両刃石斧の形態は太型蛤刃ないしその類似形態となるものが大半であるが、G15のような乳棒状となるものもある。基部にまで研磨を施すものが普通であるが、敲打痕が目立つものも少なくない。

使用石材は、G14・29が堆積岩系の泥岩製であるのに対し、他はハイアロクラスタイトを中心とした塩基性岩製である。ただし塩基製岩のなかにはハイアロクラスタイト以外にG24が変玄武岩、G17が変蛇紋岩などのものも含まれるが、分析結果からすると、ハイアロクラスタイトが大多数をしめることには違いがなさそうである。

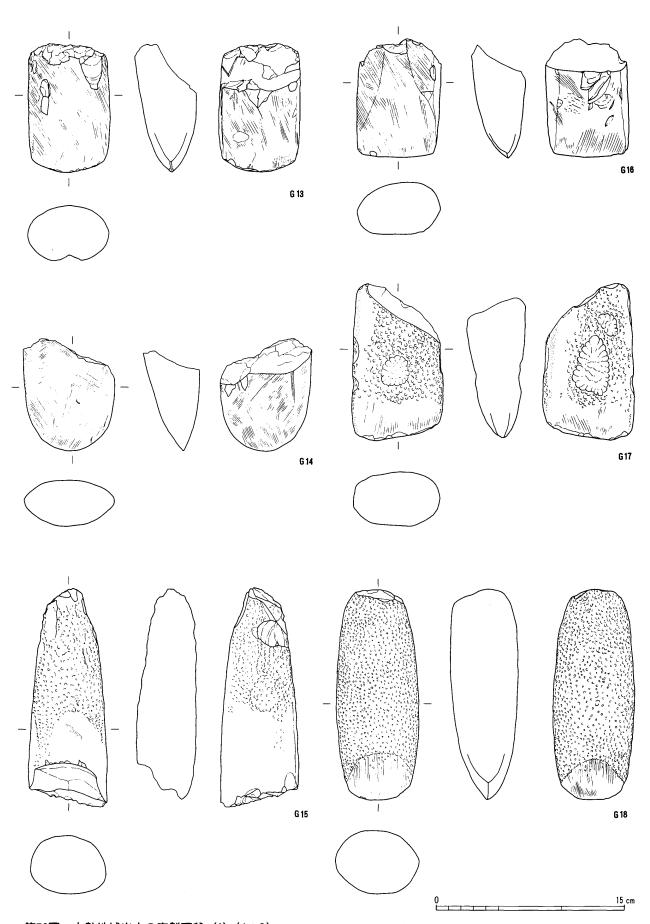
納所遺跡は、弥生時代のほぼ全期間におよぶ、津 市周辺の中心的な集落遺跡と考えられる。ハイアロ クラスタイト製の石斧が主体をなす遺跡の一つであ る。



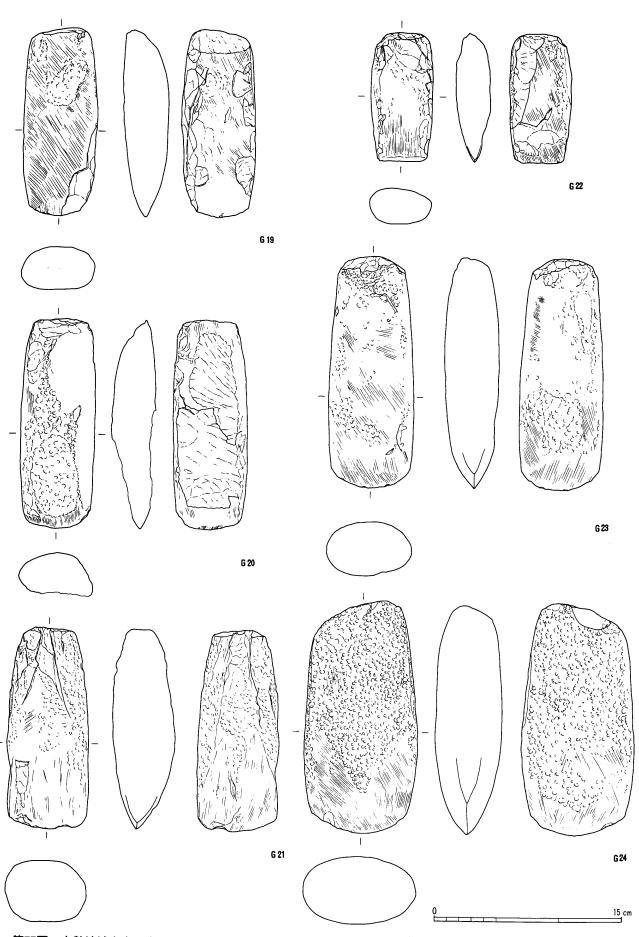
第74図 北勢地域出土の磨製石斧〈1〉(1:3)



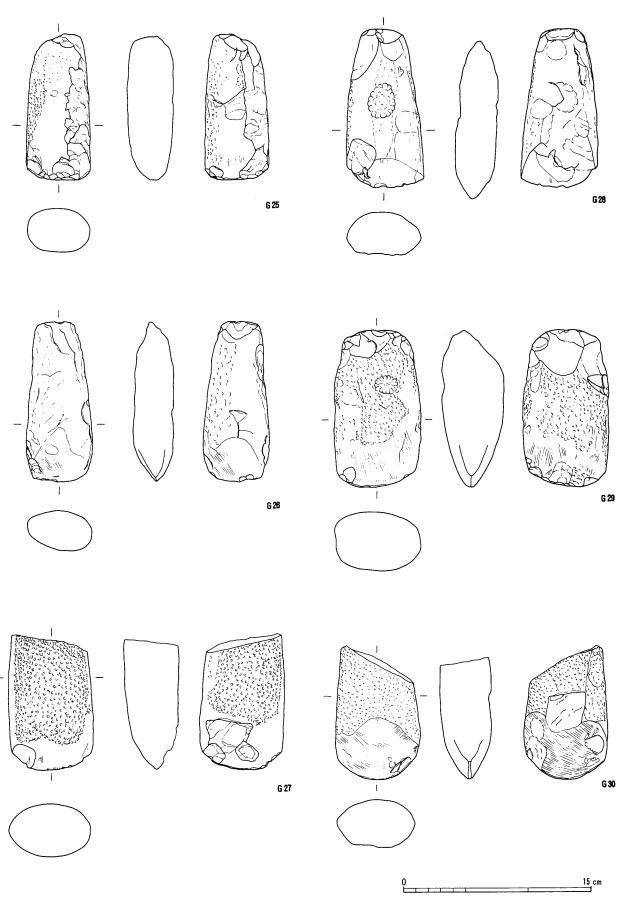
第75図 北勢地域出土の磨製石斧〈2〉(1:3)



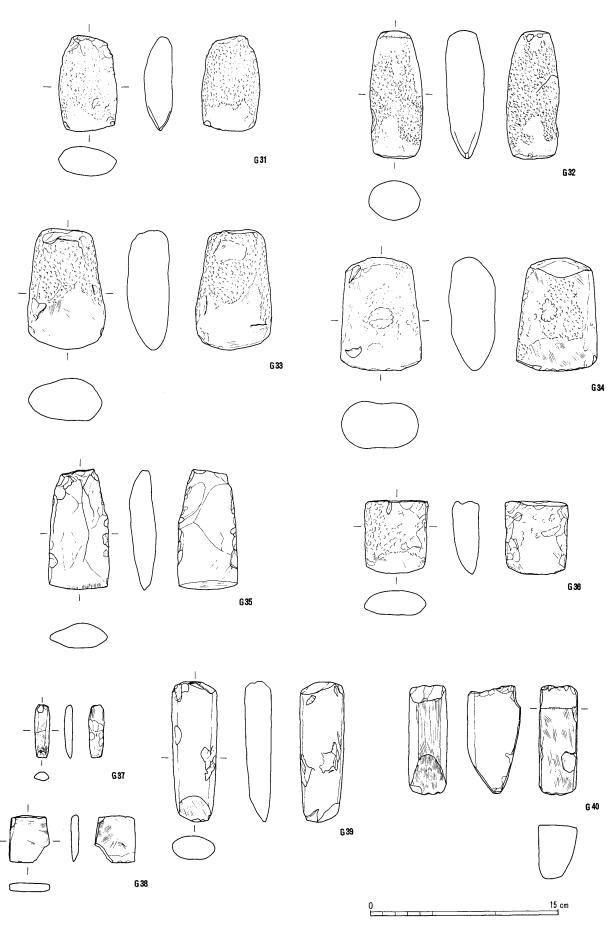
第76図 中勢地域出土の磨製石斧〈1〉(1:3)



第77図 中勢地域出土の磨製石斧〈2〉(1:3)



第78図 中勢地域出土の磨製石斧〈3〉(1:3)



第79図 中勢地域出土の磨製石斧〈4〉(1:3)

1. 石斧石材の分析

(1) はじめに

宮山遺跡では、磨製石斧の未製品が数多く出土した。これら磨製石斧に用いられている岩石はすべて、風化した表面では灰緑〜黒色を呈し、新鮮な断面で黒〜暗緑色を呈する緻密な組織を持つ岩石である。このような岩石は伊勢湾周辺の弥生時代の遺跡で、磨製石斧に多く利用されている(楯1992)。これまで、これらの岩石の供給地は特定されることがなかった。しかし、今回宮山遺跡から磨製石斧の未成品が大量に出土したことから、供給地の問題に言及することができることを目的に分析を進めた。今回分析を行った試料は、宮山遺跡出土の磨製石斧の未成品や未加工の岩石を含め、三重県内の主な遺跡から出土した弥生時代の磨製石斧47点について、表面観察および岩石学的な測定を行った。

(2) 分析方法および分析試料

今回観察等を行った試料は、磨製石斧45点(宮山遺跡 5 点・納所遺跡34点・永井遺跡 2 点・大谷遺跡 2 点・上野遺跡 1 点・上畑遺跡 1 点)および宮山遺跡出土の未加工の岩石 1 点、宮山遺跡の近傍を流れる青川の転石 1 点の合計47点である(第 9 表)。

分析方法は、非破壊分析として表面観察・比重測 定を全試料に対して行い、破壊行為を伴う岩石薄片 の観察を18点の試料に対して行った。

a. 表面観察

表面観察は、これまで非破壊で岩石名を決定する 手段として多く用いられてきた方法である。これは 考古遺物を破壊することなく、岩石名が決定できる ことから最も一般に用いられる観察方法である。し かし、肉眼や実体顕微鏡下においては観察できる鉱 物や組織に大きさの限度が生じることや観察者の経 験が必要になることから、観察者によって詳細な岩 石名が異なる場合がある。

b. 比重測定

岩石の比重はその構成鉱物によって異なっている ので、岩石名を決定するときの一つの参考データと

堀木真美子(愛知県埋蔵文化財センター)

なりうる。たとえば、遺跡で黒色で緻密な岩石が出土し、泥岩か玄武岩かどうしても判断がつかない場合に比重を測定する。すると堆積岩である泥岩の比重はおよそ2.6であり、火成岩の玄武岩ではおよそ2.8であることから、測定結果をみて、どちらかに決定することができるのである。

測定は、浮力を利用して体積を求め、その体積と重さによって比重を算出する方法を用いた。測定には最大6,000 g 最小0.1 g まで測定できる電子天秤(LIBROREB-6200S:鳥津製作所)を用い、1/10 g まで測定した。試料はテグスを使用してつり下げた。使用したものは今回用いた測量機器で測定不能であったが、その重量は0.1 g 未満と考えられる。そこで今回測定した試料のうち、全重量が10 g に満たないものは、測定値にテグスの影響が及んでいる(1%程度)と予想されるため、測定を行わなかった。

c. 岩石薄片観察

岩石の薄片観察は、遺物の破損を免れないが、正確な岩石名を決定する際の最も基本的な観察方法の一つである。観察の対象は、組織と主成分鉱物の種類である。たとえば黒色で緻密な組織をもつ安山岩の場合、古銅輝石が含まれていることが確認されれば古銅輝石安山岩(サヌカイト)と判断することができるのである。また、黒雲母や角閃石が多く含まれる安山岩であれば、黒雲母角閃石安山岩と岩石名が決定されるのである。

薄片は、分析試料の風化をしていないと思われる部分から約10×10×5mm程度の切片をダイアモンドカッターを用いて切り出し、それぞれのチップを研磨してゆくことによって作成した。岩石薄片を作成した資料は、宮山遺跡3点・納所遺跡13点・永井遺跡・大谷遺跡・上畑遺跡各1点づつの合計18点である。

d. 蛍光X線による全岩化学組成

蛍光X線による全岩化学組成は、岩石の科学的特徴をとらえるために岩石学では一般に用いられている方法である。遺物を破壊しなければならないが、

遺跡名	試料番号	図番号	比 重	岩石名	特徴	表面の特徴および表面観察で観察できる鉱物・組織
宮山遺跡	C33		2.93	塩基性岩	礫岩状	斜長石・微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物
宮山遺跡	FC24		3.01	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・微細な黒色不定形包有物
宮山遺跡	ET6		30.4	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物
宮山遺跡	DP23		2.97	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・斜長石・微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物
宮山遺跡	EX3		2.95	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・斜長石・微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物
宮山遺跡	住居地出土			塩基性岩	数密	青灰色の風化面
納所遺跡	3FNO039		2.67	砂岩		泥岩のチップを含む
納所遺跡	3FNO155		2.92	塩基性岩	礫岩状	斜長石・微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物
納所遺跡_	3FNO279		2.95	塩基性岩	凝灰岩状	斜長石・微細な黒色不定形包有物
納所遺跡	3FNO043		2.80	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO081		2.85	塩基性岩	礫岩状	斜長石・微細な黒色不定形包有物・隙間が多い
納所遺跡	3FNO1145		2.99	塩基性岩	礫岩状	微細な黒色円形包有物
納所遺跡	3FNO238	G 17	3.07	塩基性岩	凝灰岩状	微細な黒色不定形包有物
納所遺跡	3FNO078	G 13	2.97	塩基性岩	緻密	微細な黒色不定形包有物
納所遺跡	3FNO248		2.97	塩基性岩	凝灰岩状	微細な黒色不定形包有物
納所遺跡	3FNO086	G 16	2.97	塩基性岩	凝灰岩状	微細な黒色不定形包有物・白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO201	G 40	2.95	塩基性岩	礫岩状	微細な黒色円形包有物
納所遺跡	3FNO115	G 15	2.91	塩基性岩	凝灰岩状	
納所遺跡	3FNO007	G 14	2.79	泥岩		William S. Let Ja. Per Will Jan Jan 19
納所遺跡	3FNO094	G 32	3.01	塩基性岩	凝灰岩状	微細な黒色円形包有物
納所遺跡	3FNO204	G 26	2.97	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FN0117	G 30	3.04	塩基性岩	緻密	
納所遺跡	3FNO224	G 25	3.01	塩基性岩	緻密	
納所遺跡	3FNO-C	G 39	2.93	塩基性岩	緻密	
納所遺跡	3FNO005	G27	2.94	塩基性岩	凝灰岩状	
納所遺跡	3FN0114	G18	3.12	塩基性岩	凝灰岩状	
納所遺跡	3FNO265	G 29	2.70	泥岩 地名	凝灰岩状	微細な黒色円形包有物
納所遺跡	3FNO235	G 28 G 35	3.04	塩基性岩 塩基性岩	一	
納所遺跡	3FNO170			塩基性岩	<u> </u>	斜長石・微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物
納所遺跡	3FNO169 3FNO053	G 34 G 33	2.87	塩基性石 塩基性岩		科技石・傾相な黒巴门形也有物・傾和な黒巴小走形也有物
納所遺跡 納所遺跡	3FNO053 3FNO162	G 33	3.12	<u> 基本性石</u> 塩基性岩	無石仏 一般密	白色脈状部分あり
	3FNO162 3FNO004		2.76	<u> </u>	秋在	日巴派へ部方めり
納所遺跡	3FNO163		3.04	塩基性岩	数密	微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物・白色脈状部分あり
	3FNO090		2.98	塩基性岩	<u> </u>	白色脈状部分あり
	3FNO1134		2.95	塩基性岩	<u> </u>	白色脈状部分あり・微細な黒色円形包有物
納所遺跡	3FNO150	G 36	3.00	塩基性岩	<u>凝</u> 页	微細な黒色不定形包有物
納所遺跡	3FNO181	G31	2.95	塩基性岩	数密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO198	G37	2.50	塩基性岩	<u> </u>	白色脈状部分あり
	3FNO196	G38	2.83	塩基性岩	<u> </u>	白色脈状部分あり
永井遺跡	064fG56D	0.00	2.99	塩基性岩	<u>凝</u> 玩	斜長石・微細な黒色円形包有物
	55	D10	2.91	塩基性岩	凝 灰岩状	微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物
大谷遺跡	3EOTC4KR6	C 8	2.93	塩基性岩	凝 灰岩状	斜長石・微細な黒色円形包有物
大谷遺跡	62KR10	C 9	2.93	塩基性岩	凝 灰岩状	斜長石
上野遺跡	333	F12	2.91	塩基性岩	凝 灰岩状	微細な黒色円形包有物
上畑遺跡	004-g	E11	2.95	塩基性岩	機岩状	斜長石・微細な黒色円形包有物・微細な黒色不定形包有物
	vv4-g	EII	4.90	但否比石	本台小	77 大石 PAME 4 M C 1 1 N C 1 7 N I AME 4 M C 1 1 C N C 1 7 N

第9表 表面観察および比重測定結果

産地推定のためには大変有力な資料となる。今回実施した蛍光X線分析はガラスビート法を用いた。分析用の試料はめのう乳鉢を用いて#200の大きさまで粉砕した。その粉末試料1gに対し、四ホウ酸リチウム5gを加え、白金るつぼ内で加熱し、ガラスビートを作成する。測定機器は(株)リガク製波長分散型system3080で測定し、データ処理システムDATAFLEX-151を用いた検量線法で定量分析を行った。測定は(株)パレオラボに依頼した。全岩化学組成の測定を行った試料は、宮山遺跡出土未成品1点・成品1点・永井遺跡・大谷遺跡各1点の合計4点である。

(3)分析結果

a. 表面観察

表面観察結果および比重の測定結果を第9表に示す。47点中42点が塩基性岩であり、泥岩3点(納所遺跡3FNO007,3FNO004,3FNO265)・砂岩1点(納所

遺跡3FNO039)となる。ここで塩基性岩とするものは、玄武岩・塩基性凝灰岩・ハイアロクラスタイト・変玄武岩などSiO2の少ない岩石の総称として用いている。これは、磨製石斧に多く用いられている岩石の組織が緻密で、肉眼および実体顕微鏡による観察では、主成分鉱物や組織の観察ができないために正確な岩石名が決定できないからである。

塩基性岩の表面の特徴を見てみると、おおむね3 種類の組織がみられる。組織の項目で"緻密"としたものは、全体に緻密な組織を持つもので斑晶等は 観察できないが、黒色の不定形の暗色包有物をふく むことがある。また脈状の白色部分をもつものもあ る。この項目に分類された試料数は20点である。"礫 岩状"としたものは、円形や不定形の暗色包有物を 多くもち、所々に濃緑色の部分や灰緑色部分が礫状 に含まれているものである。斜長石などの斑晶が観 察できるものもある。試料数は7点である。"凝灰岩 状"としたものは、溶結凝灰岩状の組織を持つもの

遺跡名	試料番号	岩 石 名	組織	主成分鉱物
上野遺跡	004-g	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac>
大谷遺跡	3EOTC4KR6	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac>KF
納所遺跡	3FNO039	砂岩	等粒状組織	Qz>Pl
納所遺跡	3FNO155	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO279	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
永井遺跡	O64fG56D	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO043	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO081	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO1145	変蛇紋岩	遊状組織	Ac
納所遺跡	3FNO238	変蛇紋岩	蛇紋岩状組織	Ac
納所遺跡	3FNO078	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO248	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO086	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
宮山遺跡	C33	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO201	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO115	ハイアロクラスタイト	杏仁状組織	Ac

Ac-アクチノ閃石、Kf-カリ長石、Qz-石英、Pl-斜長石

第10表 薄片観察結果

や碟状部分がすべて同じ自破砕熔岩状態のものである。斜長石の斑晶が認めらることもある。試料数は16点である。"緻密"および"碟岩状"でみられ黒色の不定形の暗色包有物は、石材がハイアロクラスタイトであればアクチノ閃石が集合した部分か不透明鉱物である。玄武岩であればカンラン石である。変蛇紋岩であれば蛇紋石の集合したものとなる。つまり岩石薄片を作成しなければ判断ができない物質であるため、ここでは暗色包有物とした。

b. 比重測定

比重測定の結果は、表面観察結果とともに第9表に示す。砂岩では2.67を示し、泥岩では2.70、2.79、2.76を示している。塩基性岩では2.78-3.04を示す。塩基性岩のうち、組織の様子と比重の関係をみると、"緻密"2.80-3.04、"礫岩状"2.92-2.97、"凝灰岩状"2.86-3.01となった。比重測定では、風化のひどい遺物については、水中に没したときに水分を吸収してしまい、正確に体積を測定することができないものも存在した。

c. 薄片観察結果

観察結果一覧を第10表に示す。納所遺跡出土の3点(3FNO039,3FNO1145,3FNO0238)以外は、すべてアクチノ閃石を主成分鉱物とするハイアロクラスタイトである。組織はガラスが発砲したような組織(杏仁状組織)を持つものである。アクチノ閃石以外の鉱物では緑簾石、緑泥石、カリ長石が見られた。長柱状の不透明鉱物を含むものもある。

納所遺跡3FNO039は、表面観察においても砂岩と 判断できたのだが、薄片も作成した。等粒状組織を 持つ。主成分鉱物は、石英・長石・斜長石である。 泥岩の小礫を含んでいる。

納所遺跡3FNO1145は、表面観察では礫岩状の組織をもつ塩基性岩であったが、薄片の監察の結果、変質したカンラン石の斑晶をもつドレライトであると判断された。

納所遺跡3FNO0238は、緑泥石と蛇紋石を主成分鉱物とする変蛇紋岩である。蛇紋岩状の組織をもつが、主成分鉱物が緑泥石もしくは緑泥石に置換されつつある蛇紋石であることから、変蛇紋岩とした。

d. 蛍光X線による全岩化学組成

	宮山遺跡	宮山遺跡	永井遺跡	大谷遺跡	納所遺跡	朝日遺跡	朝日遺跡	朝日遺跡	朝日遺跡	朝日遺跡	朝日遺跡	朝日遺跡	朝日遺跡	朝日遺跡
	C33	原石?	O64fG56D	3EOTC4KR6	3FNO大溝4	60A553	60A583	60A579	60B2409	60E483	60A584	60A597	60A592	60B132
Si02	51.79	50.14	51.54	4692	51.61	50.74	49.95	47.59	48.02	51.08	49.72	48.90	47.89	43.91
Ti02	2.07	2.11	2.36	2.48	20.8	2.25	2.29	2.43	2.44	1.83	2.27	2.04	2.45	1.39
Al203	12.58	14.76	13.78	14.17	15.00	13.84	14.60	14.11	15.07	13.88	13.98	14.40	14.15	6.72
Fe203	11.02	11.27	12.74	13.68	9.82	10.49	10.73	11.26	11.28	10.26	10.78	10.34	10.92	11.95
Mn0	0.18	0.14	0.20	0.20	0.16	0.17	0.14	0.17	0.16	0.15	0.17	0.16	0.16	0.17
Mg0	7.84	7.08	9.18	8.05	9.13	8.00	8.19	10.10	8.94	8.55	8.44	8.09	10.35	21.78
Ca0	6.81	7.32	7.29	7.26	6.05	7.97	7.48	7.72	6.73	7.12	7.32	7.96	5.41	7.30
Na20	5.64	6.08	5.28	4.40	4.75	4.43	4.18	2.42	3.95	3.86	3.98	4.48	3.60	1.26
K20	0.14	0.50	0.14	0.27	0.18	0.42	0.41	0.17	0.49	0.41	0.25	0.19	0.19	0.16
P20	0.22	0.26	0.24	0.25										

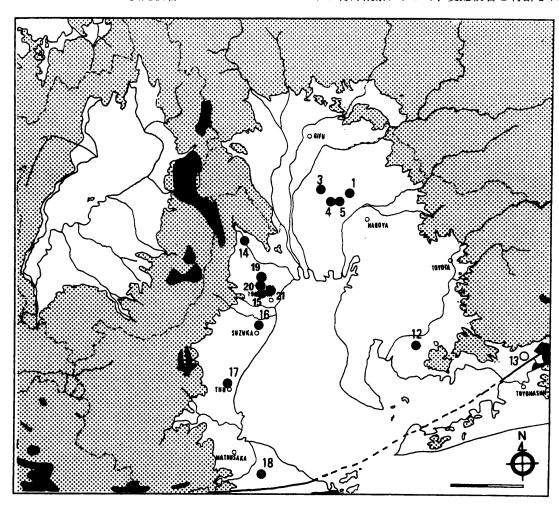
第11表 蛍光 X 線による全岩化学組成

今回分析を行った4点の分析結果を第11表に示す。また、楯(1992)が行った納所遺跡および朝日遺跡の分析結果を合わせて表記する。いずれの試料もSiO₂の含有量が52%以下を示し、Na₂OやK₂Oの含有量が多いことから塩基性の岩石であることが裏付けられた。またその他の成分においても、1992年の分析値と大きく違わない。これらのことから朝日遺跡で多く出土したハイアロクラスタイトと、今回分析を行ったハイアロクラスタイトが同一の岩石であることが確認できた。また、宮山遺跡で出土した未成品の分析値も他の分析値と差が認められない。

(4) まとめ

a. ハイアロクラスタイトと変蛇紋岩

ハイアロクラスタイトは、伊勢湾周辺地域および 濃尾平野の弥生時代中期の遺跡において、磨製石斧 として共通して用いられる岩石である(第80図)。楯 (1992)によれば、岩石中の角閃石の化学組成や組織・ 鉱物などから内帯に産する岩石の一種である可能性 が指摘されていたが、その供給地を特定するには至っ ていない。今回の分析のきっかけとなった宮山遺跡 では、ハイアロクラスタイト製と思われる磨製石斧 の未成品が大量に出土していたことから、磨製石斧 を供給した遺跡ではないかと考古学的に指摘された。 ハイアロクラスタイトが出土している遺跡のうち、 納所遺跡では磨製石斧にハイアロクラスタイト以外 の岩石で砂岩や泥岩などが数点認められた。その中 には薄片観察によって、変蛇紋岩と判断されたもの



塩基性の岩体 を含む地域

標高 100m 以上の山地 1. 朝日遺跡(清洲町)

3. 一色長畑遺跡(稲沢市)

4. 大渕遺跡(甚目寺町)

5. 阿弥陀寺遺跡(甚目寺町)

12. 岡島遺跡(西尾市)

13. 麻生田大橋遺跡(豊川市) 18. 金剛坂遺跡(津市)

14. 宮山遺跡(大安町)

18. 金剛坂遺跡(津市) 19. 大谷遺跡(四日市市)

15. 永井遺跡(四日市市)

20. 上畑遺跡(四日市市)

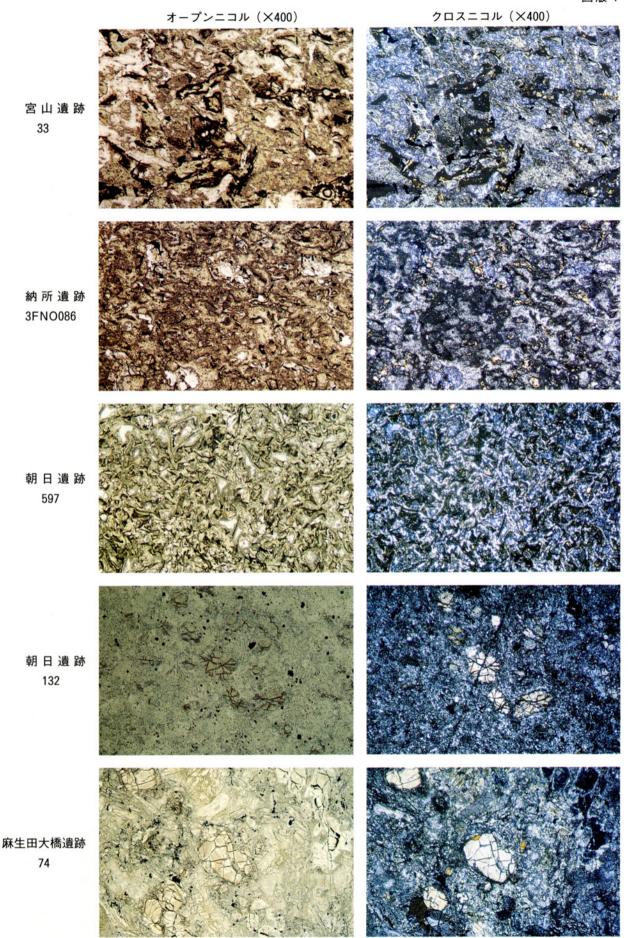
16. 上箕田遺跡(鈴鹿市)

21. 上野遺跡(四日市市)

17. 納所遺跡(津市)

● ハイアロクラスタイト製磨製石斧

○ 変塩基性岩製磨製石斧



塩基性岩類偏光顕微鏡写真

があった。この変蛇紋岩は麻生田大橋遺跡〔愛知県豊 川市・縄文時代晩期)において大量に出土した岩石 であり、石の供給地は遺跡の東方を流れる豊川とさ れ、産地は外帯の三波川帯に存在すると推測された (森ほか.1991)。この変蛇紋岩は、宮山遺跡より20km 程度離れた納所遺跡や朝日遺跡(愛知県清洲町他) でも出土しているが、確認された数量は数点である。 今回、表面観察を行った磨製石斧のうち、"緻密"も しくは"凝灰岩状"の組織をもつ塩基性岩としたも のの中にこの変蛇紋岩が含まれている可能性はある。 それは、変蛇紋岩は表面の特徴や比重の値がハイア ロクラスタイトに酷似しているために、岩石薄片の 観察もしくは全岩化学組成の測定をしなければ同定 できないためである。岩石薄片では、変蛇紋岩は蛇 紋岩組織を持ち主成分鉱物が蛇紋石および緑泥石で あることが確認できる。それに対しハイアロクラス タイトは杏仁状組織を持ち、主成分鉱物がアクチノ 閃石となる。また全岩化学組成では、変蛇紋岩は Al₂O₃が5%程度と少なくMgOが20%以上と多い。 ハイアロクラスタイトではAl₂O₃が12-15%、MgOが 7-10%程度である。変蛇紋岩はその化学成分の値か ら外帯で産した岩石であると考えられるため、内帯 で産するハイアロクラスタイトとは移動した経路が 異なってくると考えられる。そのため、ハイアロク ラスタイトか変蛇紋岩であるかの同定結果は重要な 意味をもつものと考えられる。

b. ハイアロクラスタイトの供給地

ハイアロクラスタイトは玄武岩質の溶岩が海底もしくは水中で流出しながら形成された岩石であるために、表面で観察できる組織に、安山岩や花崗岩のような安定した特徴をもたない。今回分類されたように、緻密な組織の玄武岩のようであったり、自破砕溶岩のような部分があったり、流出時に他の岩石を取り込んで礫岩状になっていたりするのである。しかし、岩石薄片による主成分鉱物の観察を行うと、アクチノ閃石がほとんどでカリ長石が少量含まれるという特異な特徴がみられる。このような岩石は中・古生層のチャートや泥岩の間に小さな岩体として産することが地質学では広く知られていたが、古生層の研究では放散虫などの微化石および地質構造の研究が中心となり、変成作用を受けて化学成分が移動

していると考えられる火成岩は研究の対象外であった。そのために、遺跡から出土したハイアロクラスタイトの全岩化学組成を、比較する岩石の基礎データが存在せず、産地の推定が困難を極めていた。

そこで、ハイアロクラスタイトと思われる磨製石 斧の未成品を多量に出土した宮山遺跡の位置図と地 質図を合わせてみると、宮山遺跡の西方に大きな塩 基性の岩体が存在していることがわかる。この地域 は中・古生層および花こう岩類が広く分布している 地域であるが、遺跡の西方にかなり大きな塩基性の 岩体が存在している。遺跡の東方を流れる青川の川 原石や住居地から出土する巨大な礫に、この岩体の ものと思われる転石が多くみられた。また、今回住 居地から出土した礫や青川の河原石についても岩石 薄片を作成した結果、両者ともハイアロクラスタイ トであることが確認されている。また、今回の分析 試料には含まれていないが、遺跡で出土した数多く の磨製石斧の未成品は表面の特徴が非常によくにて おり、著者の経験上すべて同一の岩石であると判断 された。このことから、宮山遺跡でハイアロクラス タイトを原料として、磨製石斧を作成していた可能 性がかなり高いものと推測される。

謝辞

今回分析の機会を与えてくださった三重県埋蔵文 化財センター竹内英昭氏、蛍光 X 線による化学分析 を実施してくださった(株)パレオ・ラボには記し て感謝の意を表します。

参考文献

楯真美子(1992) 「朝日遺跡にみられる磨製石斧の石質と その産地.」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集 朝日遺跡II・自然科学編. 279-298.』

堀木真美子(1995)『石材の移動. 財団法人愛知県埋蔵文 化財センター創立10周年記念シンポジウム朝日遺跡を科学 するシンポジウム資料. 35-37.』

森 勇一・永草康次・楯真美子(1990)「阿弥陀寺遺跡から出土した緑色の岩石について.」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集 阿弥陀寺遺跡.330.』

森 勇一・楯真美子(1991)「麻生田大橋遺跡出土の磨製 石斧の石材について.」『愛知県埋蔵文化財センター調査報 告書第21集 麻生田大橋遺跡. 115-123.』

2. 磨製石斧製作工程の復原とその流通

宮山遺跡を原石採取地点に設けられた磨製石斧製作のための作業所的なムラとの位置づけを考えたが、出土した石斧未成品から、その製作工程をうかがい知り、その分布から地域間の交流の実態を解明し、そして弥生時代における社会的分業のあり方を考えるなど、派生する問題は様々である。これらすべてに詳論を及ぼすことはできないが、本報告書の末尾にあたり、できる限りの整理をつけておきたい。

(1) 石斧の種類と製作工程について

宮山遺跡で出土した磨製石斧の未成品には、重量 感があり両刃をもつ伐採斧と偏平片刃石斧、柱状片 刃石斧などの加工斧があり、それぞれ製作工程を示 すと考えられるものが認められる。

伐採斧と加工斧の比率は圧倒的に伐採斧が多いと 考えられる。その出土比率は、およそ伐採斧8に対 し、加工斧は2ほどである。これは大半はあくまで も未成品、とくに失敗作を通してみた上での判断で あり、伐採斧が製作工程でより破損しやすい可能性 を含むが、分析結果で示されたように比重がきわめ て大きいという使用石材の特性から考えても、生産 対象の中心は伐採斧に置かれていたのではないかと 思われる。

酒井龍一氏は、弥生時代の石器組成を分析した結果、伊勢湾沿岸地方の納所遺跡や朝日遺跡などから出土した磨製石斧は、太型蛤刃石斧が過半数を占め、加工斧は偏平片刃石斧が主体となり、偏平片刃石斧と柱状片刃石斧とが比率的に半々となる近畿地方中央部の様相と異なる点を指摘している(酒井1986)。生産地である宮山遺跡の加工斧のあり方も、酒井氏が指摘した伊勢湾沿岸地域の状況とほぼ一致する。

弥生時代の伐採斧といえば、一般的に両刃で石斧 の横断面が厚い、いわゆる太型蛤刃石斧と呼ばれる ものが西日本では主流を占めるが、宮山遺跡の場合、 両刃であることは伐採斧の必要条件としても、石斧 の厚さや基部の形状などからすると、むしろ典型的 な太型蛤刃石斧と呼べないものも含まれる。

未成品、とくに製作過程で生じた失敗作である点 を考慮に入れる必要があるが、ここでは伐採斧を以 下の2つのタイプに大別することにした。

伐採斧 I 側縁が平行し、厚みのある基部で、断面形は膨らみのある楕円形となる。いわゆる太型蛤刃石斧あるいはそれに近い形態のもの。長さ20cmを超える大型のものと長さ13~16cm程度の中型のもの、さらに長さ10cm以下の小型のものがある。

伐採斧Ⅱ 側縁は平行するか、刃部に向かって幅 広となり、基部は厚みがあり、断面形が円形に近い。 いわゆる乳棒状石斧。

本来の完成品を宮山遺跡で見いだすことができないので、他遺跡出土のものを加え、それぞれのタイプの製作工程の各段階を第81図に示した。

磨製石斧の製作は、原石を粗割り、剝離成形し (第1工程)、敲打して整形する(第2工程)。そして 全面を研磨し、刃部を仕上げ(第3工程)、完成品と なると考えられる。第1工程は、原石の粗割りとそ の後の剝離成形とは別の工程として分けるべきかも しれないが、未成品そのものからその区別は難しい。

(2) 宮山遺跡を通じた石斧生産の実態

宮山遺跡では原石として使用可能と考えられる石材が近辺より採集可能だが、剝離成形の際に生じる剝片は出土しているものの、原石の自然面を片面にもつ剝片は少なく、あるいは第1工程である原石の粗割りは青川の河原など、他所である程度行われた可能性も否定できない。

また、宮山遺跡では磨製石斧以外の石製品として、石剣あるいは石棒の一部とみられるものが出土しているが、これは結晶片岩系の石材が使用されており、当遺跡周辺で製作されたものではない。宮山遺跡では磨製石斧のみが製作されていた可能性が大きい。

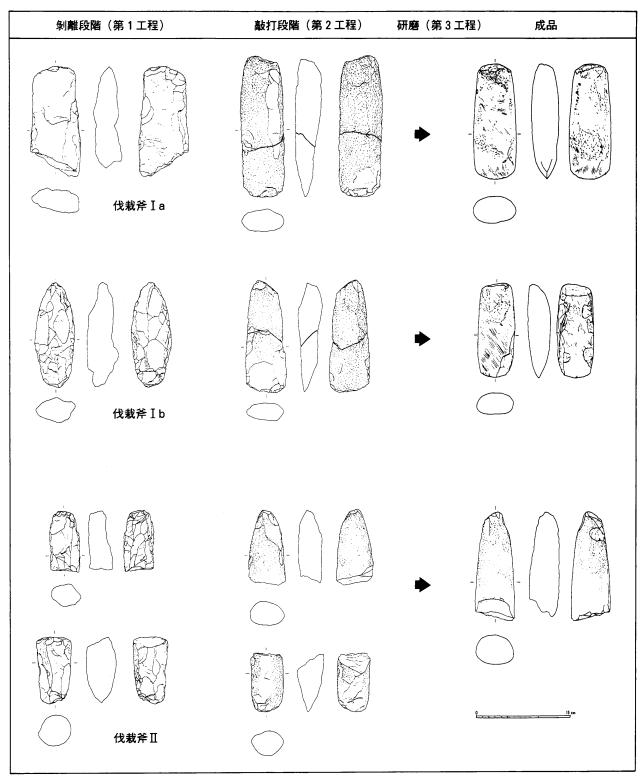
伐採斧の場合、第2工程の敲打段階での破損品が 最も多く、伐採斧の6割にものぼる。逆に良品の完 成品が見いだせない点も合わせて、今山遺跡などの 石斧製作遺跡の一般的なあり方と共通する。

最後の工程である研磨について、石黒立人氏は宮山遺跡では砥石の比率が低いことから、敲打整形後の未成品を出荷するとの見通しをつけられている(石黒1997)。

これは消費地での実態、すなわち刃部未研磨のものが集落遺跡で出土するか否かとも関わる問題ではあるが、宮山遺跡の場合、確かに砥石の出土量からすると、製作された石斧のすべてが研磨されたと考えにくいといえるかもしれない。

それでも恒常的な研磨により、研ぎ減りがかなり

進んだとみられる置き砥石も存在することから、自己消費としてのみ石斧の刃部の研磨に使用されたにとどめるにも疑問が残る。あるいは製作された石斧の一部に限っては、最終的な研磨工程まで行い、他所へ運び出していたことも、現象面的には考えられるのではないだろうか。



第81図 磨製石斧の製作工程図(1:6)

(伐裁斧Iのうちaは大型のもの, bは中型のもの)

また、伐採斧 I · II の形態上の差は、伐採斧 I が カシ材などの常緑広葉樹の利用のため弥生時代になっ て新たに登場した、いわゆる太型蛤刃石斧ないしそ れに類するものであるが、伐採斧 II はいわゆる乳棒 状石斧と呼ばれる、縄文時代以来使用されている磨 製石斧の形態を受け継いだものである。

伐採斧Ⅱは主に東海地方以東の東日本では弥生時代にも引き続き利用されていることが一般に認められており、伊勢地方でも津市納所遺跡などで少ないながらも存在する(第76図G15)。

宮山遺跡では伐採斧 I・IIの両者が製作されていたことから、西日本と東日本の狭間となる地域に当遺跡が位置づけられるとともに、弥生時代的な伐採斧 I にすべて伐採斧の生産が傾くことなく、伐採斧 II の生産も同時に行っていたことで、東海以東でこの種の形態の石斧を使用し続ける地域も意識し、その流通の射程に入れていたことを評価して良いと思う。

(3) 加工斧の地域的特色

一方、加工斧は前述したようにその出土量が伐採 斧に比べかなり少ないことから、生産量そのものが 寡少であったと考えられるが、伐採斧で多かった敲 打整形段階での欠損が生じにくく、ひいては生産上 のロスが少なかったというのも宮山遺跡での伐採斧、 加工斧の両者の出土量の差異となって表れたことも 考えられよう。

加工斧である偏平片刃石斧や柱状片刃石斧が、形態的に剝離成形の段階で、仕上がりの状態にかなり近づくため、敲打整形が伐採斧のようにさほど重要な工程とならなかったと思われ、剝離成形から研磨までの工程が比較的スムーズに進められ、破損の危険性も少なかったと考えられる。

また、片刃ではないが、さりとて両刃石斧=伐採 斧とかたづけられないものもある。(第48図232・233・239・240)など、長さがあり両刃を作りだすものの、 幅が5cmに満たず、厚みもない短冊型のものは、伐 採斧としての使用にはあまり実用的でない。

一方、偏平片刃石斧の形態をとりながら、両刃となるものも地域によっては、認められることが指摘されている(国立歴史民俗博物館1996)。一般に消費

地遺跡では研ぎだしを繰り返すうち、元の形態に比べ、長さが著しく短くなるものがみられるが、これらとはもちろん異なるものである。

こうした偏平片刃石斧の形態をとる両刃石斧は、 三重県内でも出土をみるが、四日市市永井遺跡では、 柱状片刃石斧でありながら両刃に作りだされたもの もあり、定角式石斧と紹介されている一志町高野の 端山遺跡でも同様のものとなる可能性が大きく、刃 部形態が必ずしも伐採斧と加工斧という機能に直結 しない状況がある。ただしこれは製作段階に決定さ れるものではなく、あくまでも使用者側の選択の問 題であろう。

加工用の工具として石斧を用いる場合、当然片刃 がより機能的であると考えられるが、縄文時代以来 の両刃に作りだす伝統が使用者側に根強く残った場 合もあったと受け取ることができる。

(4) 分布時期とその流通

ハイアロクラスタイト製磨製石斧は、伊勢地方をはじめ、尾張・三河といった広い範囲で出土しているが、今回の堀木氏の分析の結果だけみても、直線距離にして40km以上離れた津市納所遺跡からでも磨製石斧に関しては主体を占めるほどである。

堀木氏のこれまでの分析成果からすると、愛知県 清洲町の朝日遺跡をはじめ、甚目寺町阿弥陀寺遺跡、 西尾市岡島遺跡、三重県内では明和町金剛坂遺跡ま で、直線距離にしても60km以上は離れた範囲にも広 がっていることになる。

これは仮に宮山遺跡およびその周辺の遺跡で製作されたものが分布するのだとすれば、当然共同体内での流通の範囲を超えるものであり、石斧自体が交易されたとみる方が自然である。

ただしこれには宮山遺跡あるいはその周辺で出土する石斧とそれぞれの遺跡から出土する石斧との形態・技法などの諸特徴の比較検討も必要となろうが、宮山遺跡内だけでも伐採斧に形態差がみられたように、現実的には石材・製作地の違いによって何らかの差が見いだせる可能性は小さい。

宮山遺跡では弥生時代中期のうちでも中葉~後葉 (Ⅲ~Ⅳ期)にかけての時期に生産が限定される。中期には同石材の石斧が、東海地方に分布を広げるこ とは注目に値する。また、弥生後期以降は一般に鉄素材の普及により、石斧の生産も衰退することから、 宮山遺跡の状況もこれと軌を一にすると思われるが、 弥生中期前半以前はどうだろうか。

愛知県幸田町の東光寺遺跡では縄文時代晩期の磨製石斧にわずかながらハイアロクラスタイトが使用されている(堀木ほか1994)ほか、宮山遺跡周辺に位置する野々田遺跡や中山遺跡など、縄文時代の遺跡からもハイアロクラスタイトを用いた石斧およびその未成品が出土することから、同石材の利用は縄文時代にまで遡るのは明らかである。

しかし宮山遺跡では、縄文晩期を中心とした住居 跡群が確認されたB地区からは、石斧の未成品はお ろか製作段階の剝片なども含めて、ほとんど出土し ていない。

さらに弥生前期~中期前半の状況を考えるために、 三雲町中ノ庄遺跡を採り上げたい。中ノ庄遺跡は、 津市の南に位置し、三渡川下流の砂堆地帯に展開す る遺跡で、宮山遺跡とは直線距離にして55kmほど離 れ、伊勢平野で最も早く遠賀川文化が定着したとさ れるところである(谷本1972)。

遺跡は、弥生時代前期中段階から中期前半にかけての遺構・遺物がみられ、若干の磨製石斧も出土している。伐採斧と考えられるものはいずれも横断面が偏平で、太型蛤刃石斧とは形態的に隔たりが大きく、むしろ縄文時代のそれに近い。しかしながら、石斧石材にはハイアロクラスタイトが含まれている。

中ノ庄遺跡のハイアロクラスタイト製石斧は、残 念ながら前期に遡るものか中期前半のものかの区別 ができない。しかし、宮山遺跡では生産が開始され る以前にはなるが、弥生中期前半にはハイアロクラ スタイト製の石斧は広範囲に広がっているとみてよ さそうである。

また、四日市市の大谷遺跡や永井遺跡の磨製石斧は、前期に属する可能性があり、しかもハイアロクラスタイトが使用されているが、宮山遺跡とは流域が異なるとはいえ、基本的には大谷・永井の両遺跡で石斧石材を求めれば、最も近いのは鈴鹿山麓ということになり、ハイアロクラスタイト製石斧の遠隔地への供給例とはみなし難い。

原石の限定的な産出に比して、製品である磨製石

斧の広範囲な分布は、もちろん石材が伐採斧用として優秀であったことに起因するであろうが、消費地である集落遺跡で原石や剝離成形段階の石屑がみられないという点からすると、原石を直接採集地より集落へ持ち込むことより、宮山遺跡のような製作遺跡の介在が必須となり、やはり分業および流通体制の充実がその背景にあることになる。

以上のことを考え合わせると、少なくとも当地域の磨製石斧の場合、これを集中生産し、遠隔地の遺跡へ供給するという流通のシステムは、縄文晩期までは確立しておらず、確実には弥生中期中葉、可能性として弥生中期前半には機能していたと考えたい。

宮山遺跡で製作された石斧は、眼下に流れる員弁 川を利用し、運搬されたと考えるのが妥当であるが、 宮山遺跡が作業所的なムラとすれば、製品を一旦集 積し、各地に配送するおそらく拠点的な集落遺跡の 存在も考える必要がある。員弁川下流域(現桑名市 周辺)にその候補が求められるが、西金井遺跡など 若干の弥生中期の遺跡は存在するものの、現時点で は拠点的な集落とまでは認識され難く、中流域も視 野に入れて今後の発見を待つか、あるいは流域を異 にする集落遺跡がこの役割を担っていた可能性を考 えるかは、課題として念頭に置いておきたい。

弥生中期段階における石器生産の専業化は、北部 九州では今山遺跡の石斧や立岩遺跡の石包丁の広範 囲な流通を根底に据えて古くから論じられてきてい る。とくに下条信行氏の詳細な論究は当時の分業体 制や流通構造に迫り、北部九州の地域性を明確にし た(下条1975・1983)。しかし他地域での検討にはこ れまで資料的な制約も大きかったが、こうした問題 を議論することができる遺跡が東海地方でも発見さ れた意義は大きい。

参考文献

石黒立人(1997)「手工業生産と弥生社会をめぐるラフ・スケッチ」『考古学フォーラム』 8

国立歴史民俗博物館(1996)『農耕開始期の石器組成 1 近畿(大阪・兵庫)・中国・四国』

酒井龍一(1986)「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『文化財学報』第4集。

下条信行(1975)「北九州における弥生時代の石器生産」 『考古学研究』第22巻第1号

堀木真美子ほか(1994)「朝日遺跡の弥生時代の石器をめぐって」『朝日遺跡 V (土器編・総論編)』

谷本鋭次(1972)『中ノ庄遺跡発掘調査報告』

報告書抄録

											
ふりが	な	みややまいせき									
書	名	宮山	遺跡							·	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
副書	名										
巻	次										
シリーズ	名	三重県埋蔵文化財報告									
シリーズ番	号	$1 \ 8 \ 6 - 2$									
編著者	名	竹 内 英 昭									
編集機	関	三重県埋蔵文化財センター									
所 在	地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965-2-1732									
発行年月	日	1999年3月31日									
ふりがな		りがな	J -		ド北緯		東経		细木物眼	調査面積	曹木匠田
所収遺跡名 所		在 地 市町村		遺跡番号		0 / //	0	, "	調査期間	m²	調査原因
宫山遺跡	負弁	が、 数なう 郡大安町 本が なら なら なら なら なら なら は 国	243230		1	35° 7′ 20″	1	136° 32′ 00″	19950508	12,26	O 一般国道475号 東海環状自動車 道建設に伴う事 前調査
所収遺跡名	種	別	主な問	· 持代	主	な遺	構	主	な遺物	m :	特記事項
宮山遺跡			縄 文 暭		生器材 竪穴位 掘立材	官墓 1 住居跡 1 注建物 4	1棟 基 4棟	弥生	縄文土器·石鏃·石錘 弥生土器·石斧未成 石斧製作遺品·石斧製作工具類		
	墳	墓				周溝墓 1 後方形墳丘墓 1 	基基	弥生: 土師:	,		

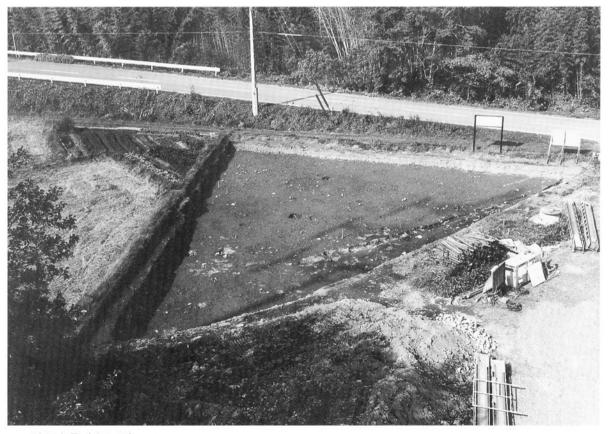
図 版



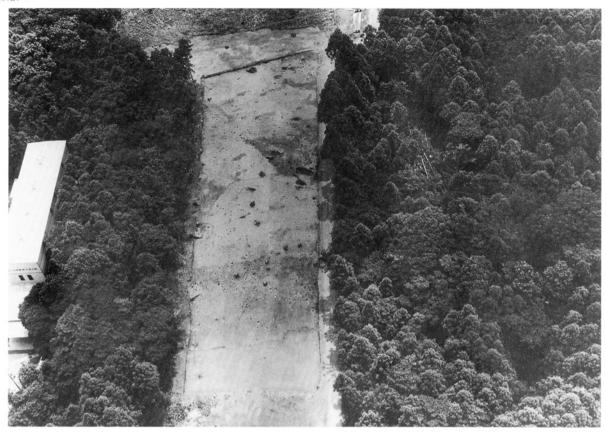
宮山遺跡遠景(南から)



A地区全景



A地区全景(南から)



B地区全景



B地区全景(北西から)



B地区住居跡 S Z 36 (南から)



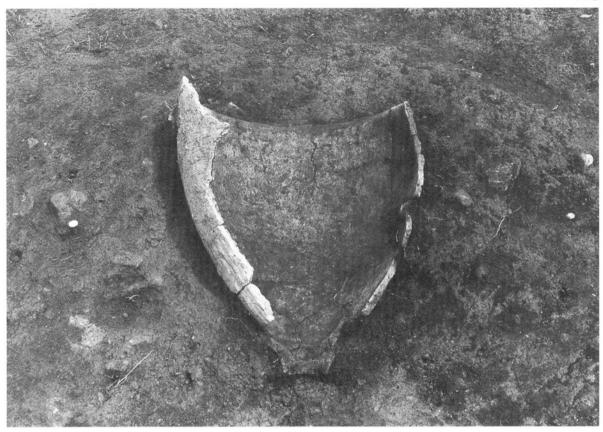
B地区住居跡 S Z 36炉跡



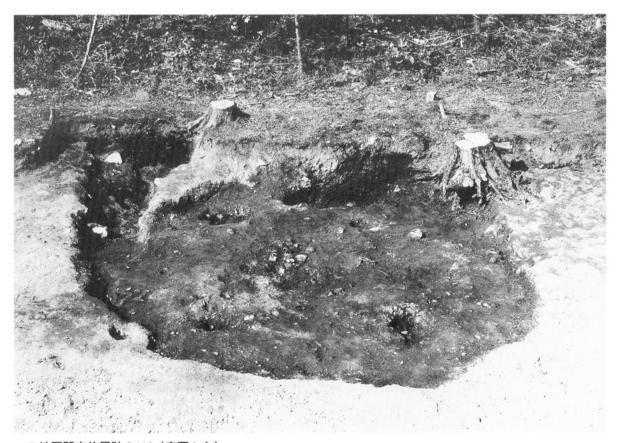
B地区住居跡群(南東から)



B地区住居跡SZ38(南西から)



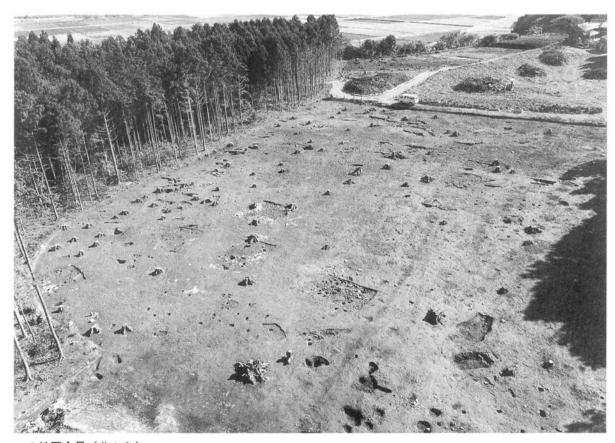
B地区土器棺墓SK18(南から)



B地区竪穴住居跡SH1(南西から)



C地区全景



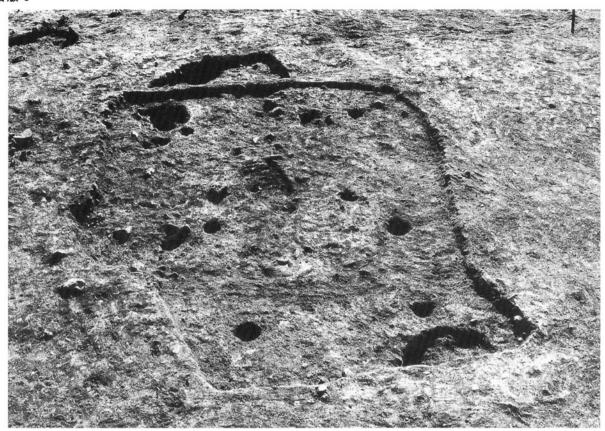
C地区全景(北から)



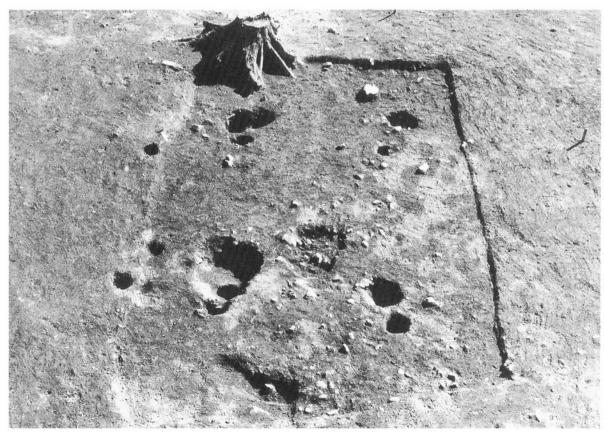
B·C地区を望む(南東から)



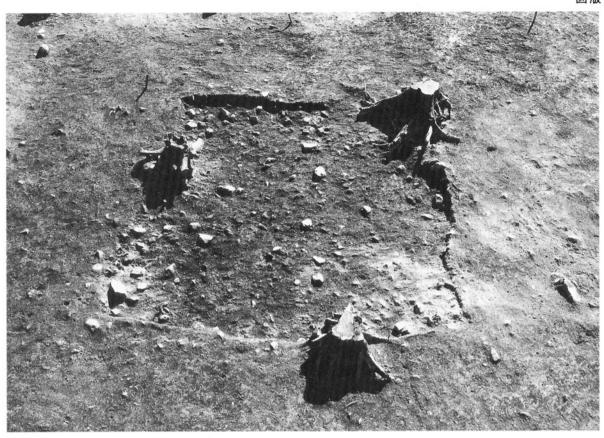
C地区竪穴住居跡SH2(南東から)



C地区竪穴住居跡 S H3・4(北西から)



C地区竪穴住居跡SH5・6(北西から)

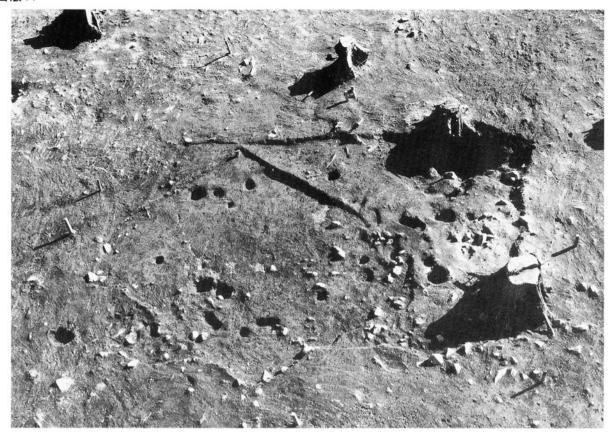


C地区竪穴住居跡SH7(北西から)



C地区竪穴住居跡SH8(南東から)

図版11



C地区竪穴住居跡 S H9・10 (北から)



C地区竪穴住居跡SH11(東から)



C地区竪穴住居跡 S H 12(北西から)

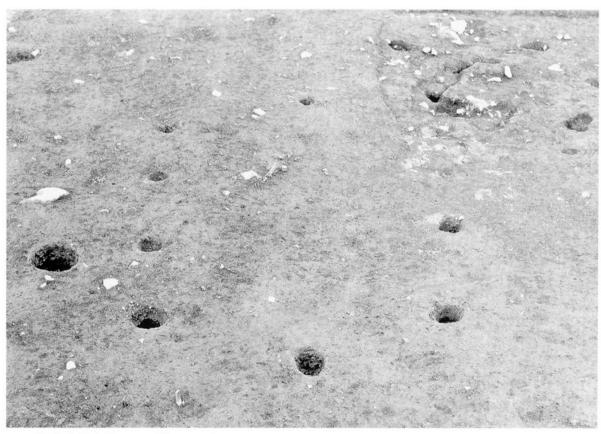


C地区竪穴住居跡SH13(南西から)

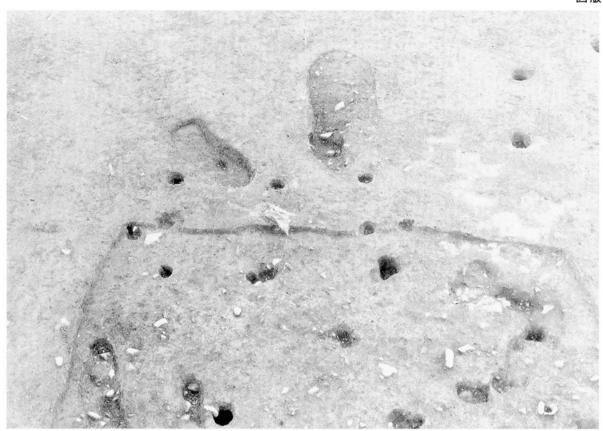
図版13



C地区掘立柱建物SB14(南東から)



C地区掘立柱建物SB15 (南西から)



C地区掘立柱建物SB16(北東から)



C地区住居跡SZ40(南東から)

図版15



D地区全景



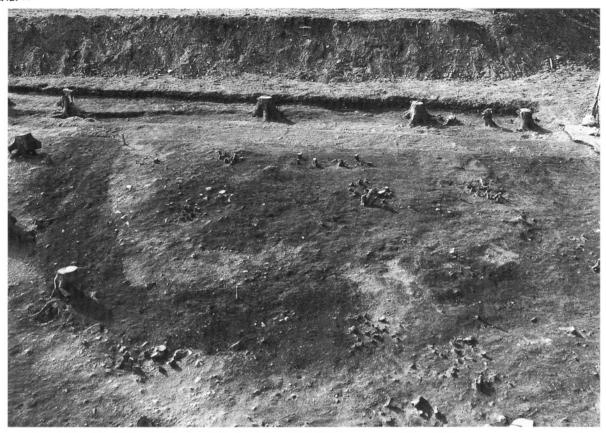
D地区全景(南から)



E地区遠景(西から)



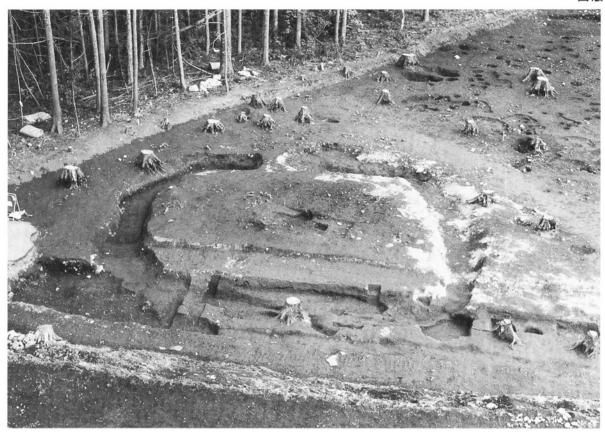
E 地区全景



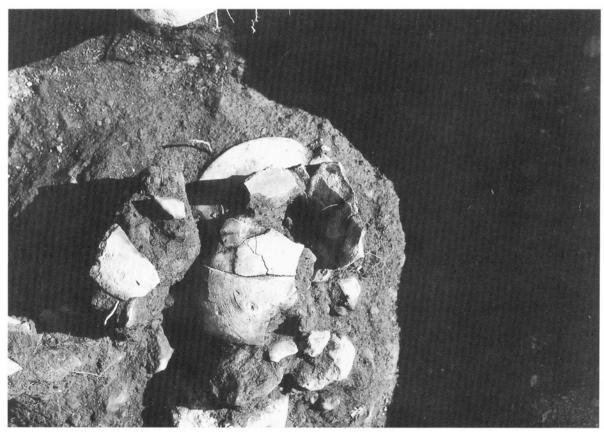
E 地区方形周溝墓 S X 19検出状況(東から)



E地区方形周溝墓S X 19 (東から)



E地区方形周溝墓S X 19 (西から)



E 地区方形周溝墓 S X 19周溝内土器出土状況

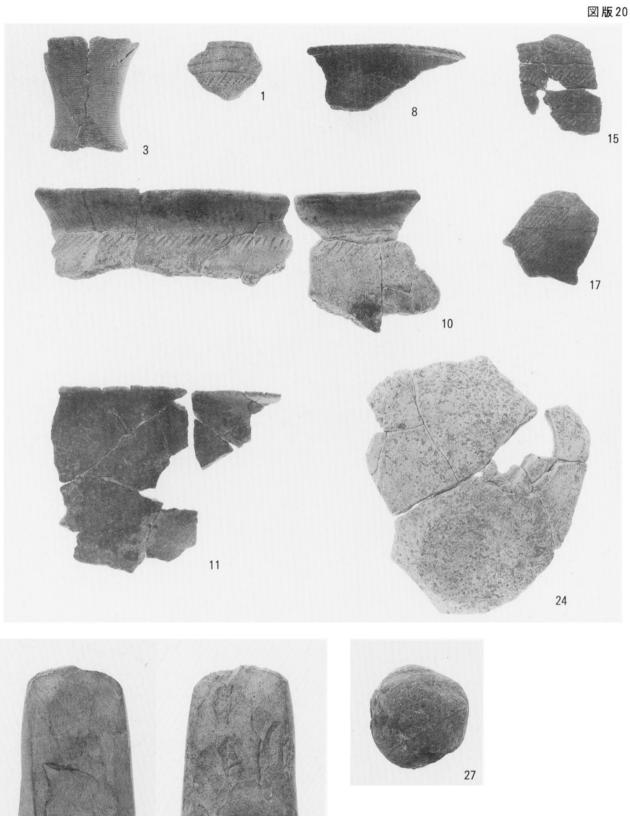
図版19



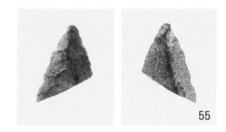
E 地区前方後方形墳丘墓 S X 20(南西から)



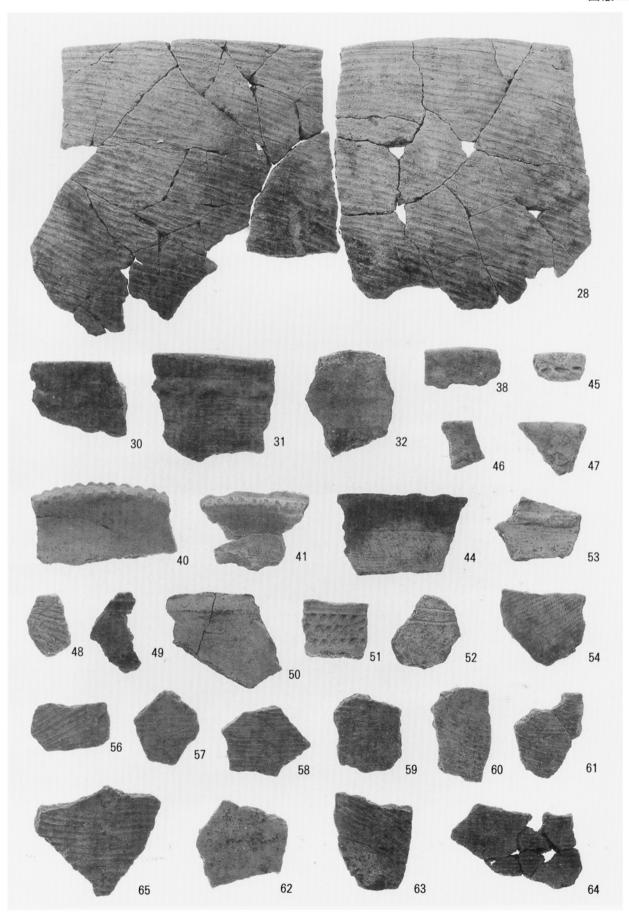
E 地区前方後方形墳丘墓 S X 20 (西から)







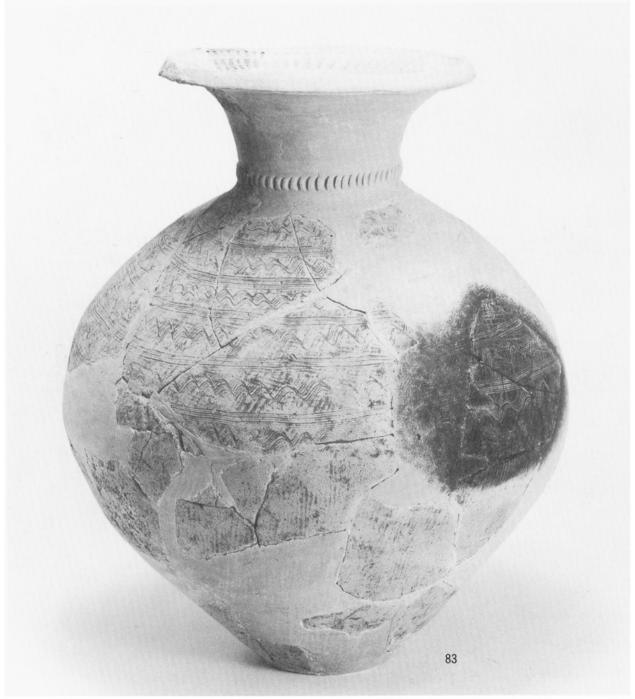




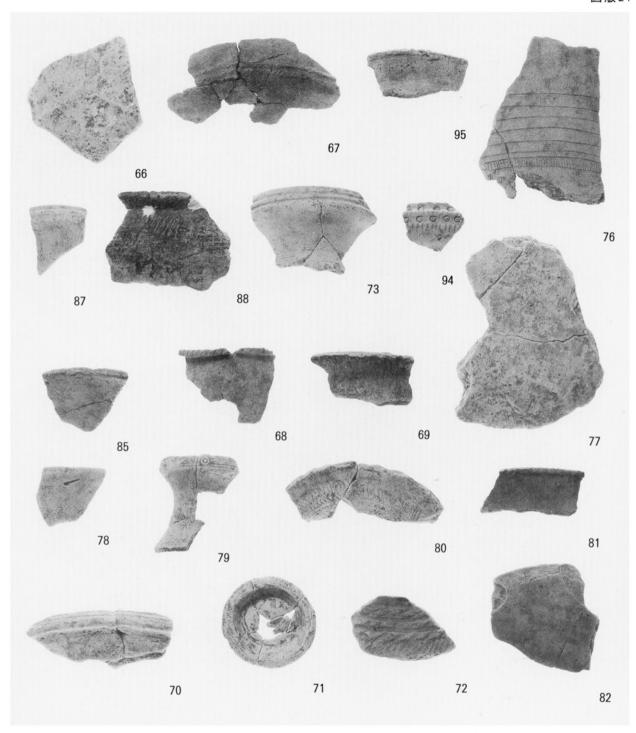
B地区出土遺物(2)



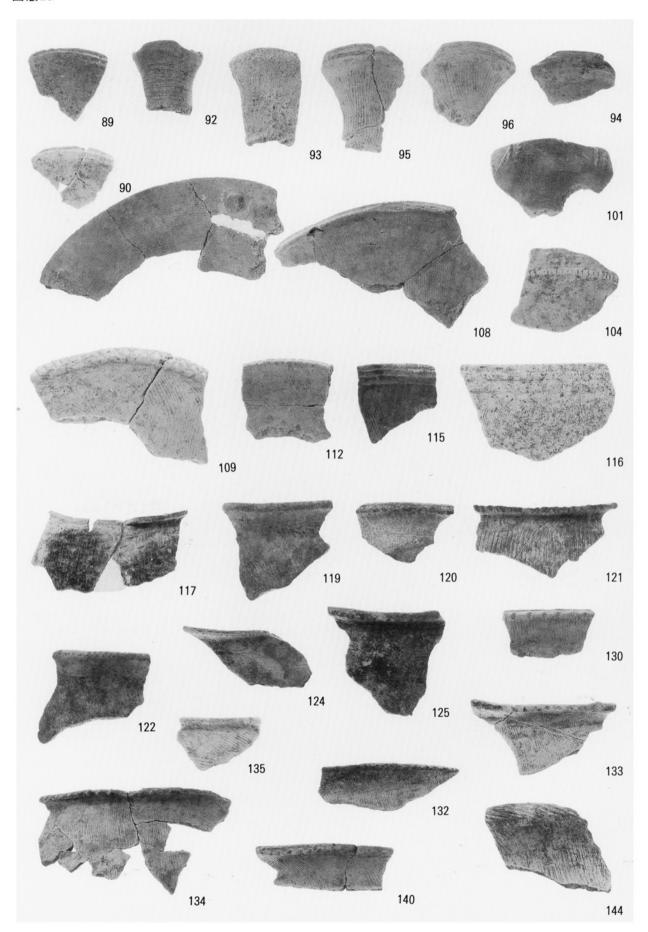




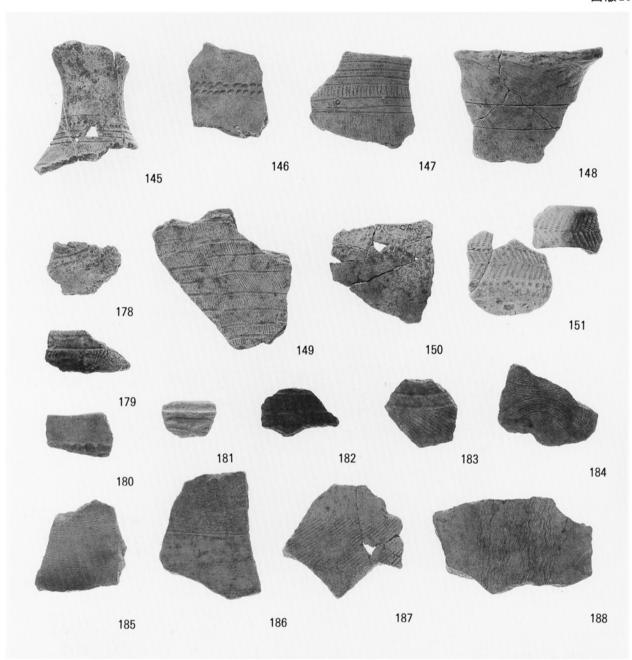
C地区出土遺物(1)



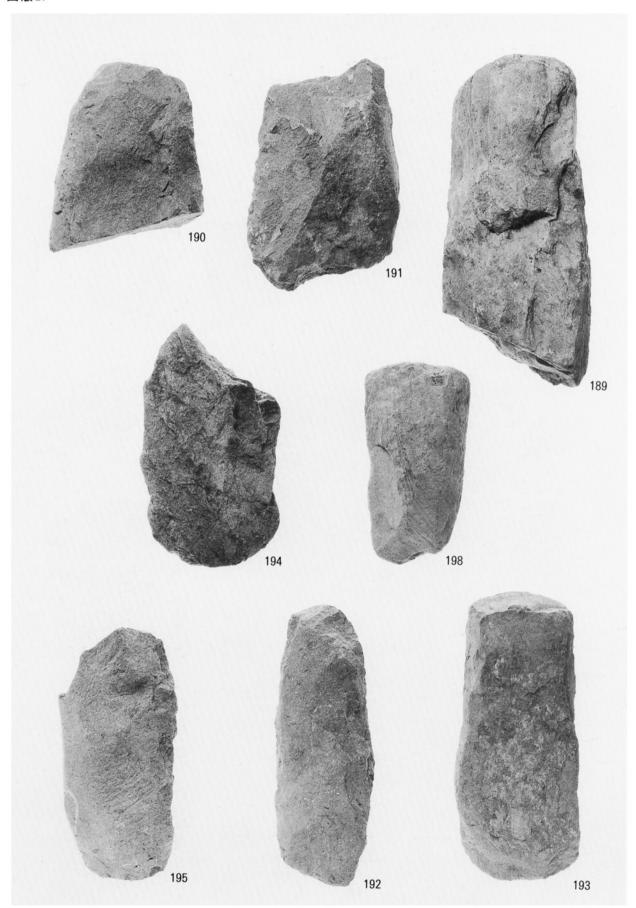
C地区出土遺物(2)



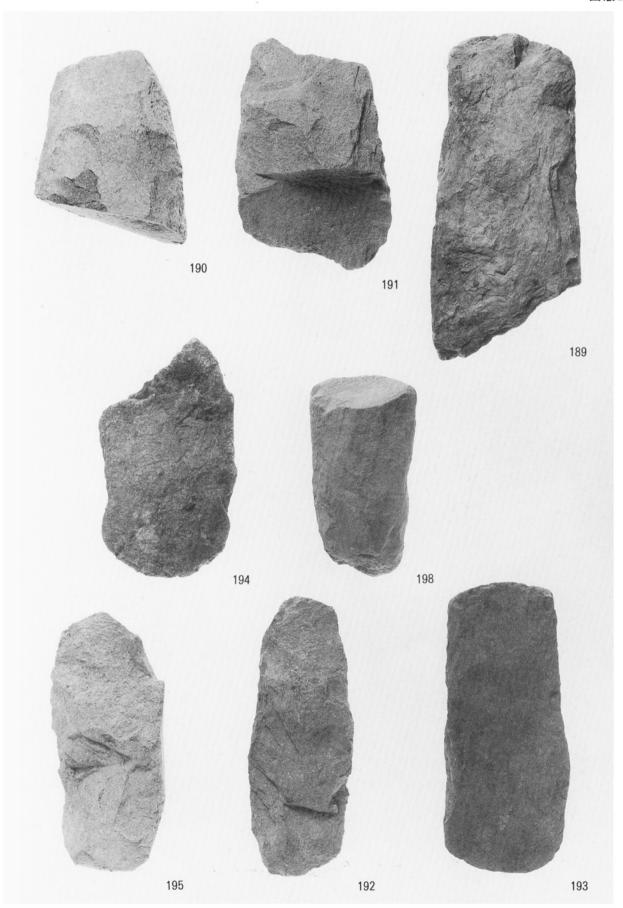
C地区出土遺物(3)



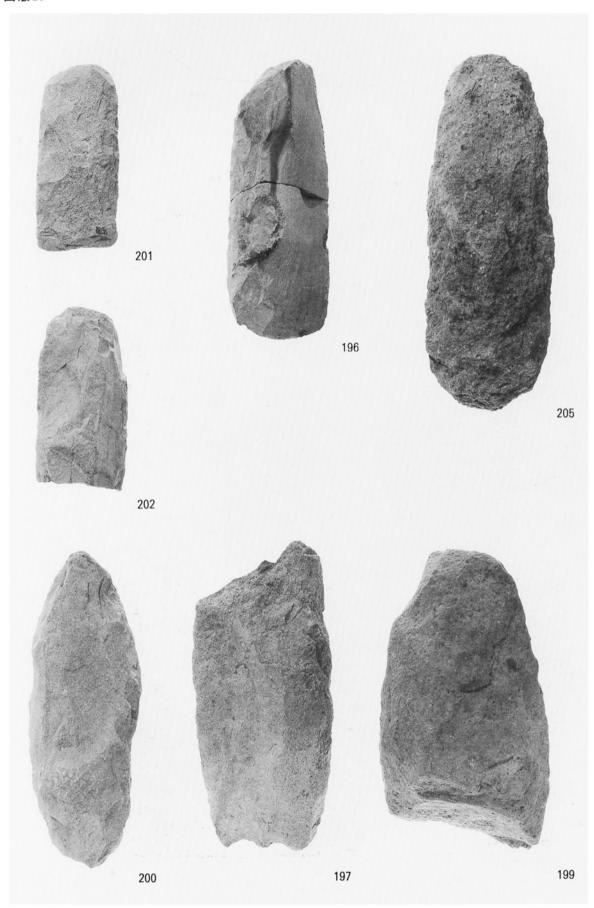
C地区出土遺物(4)



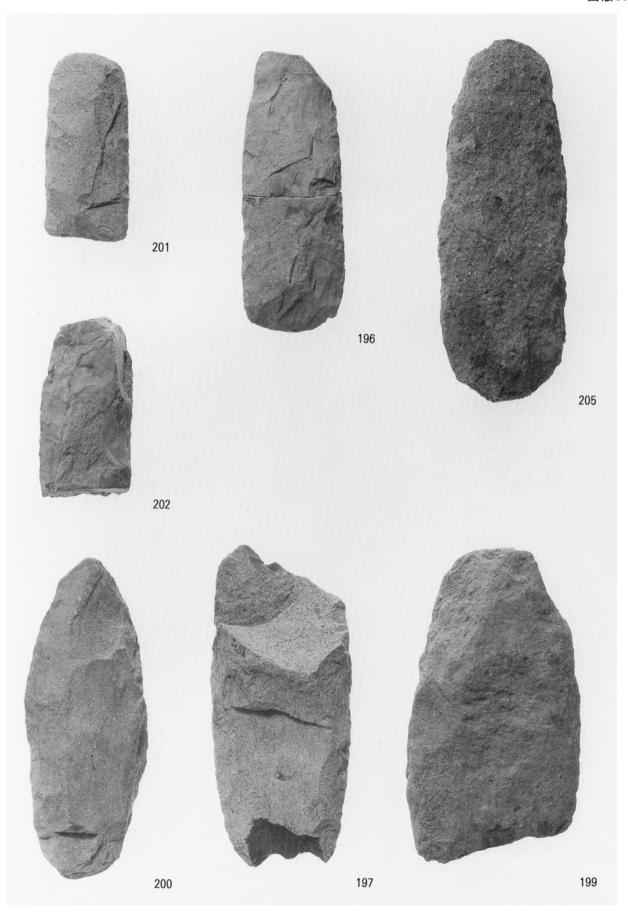
C地区出土遺物(5-1)



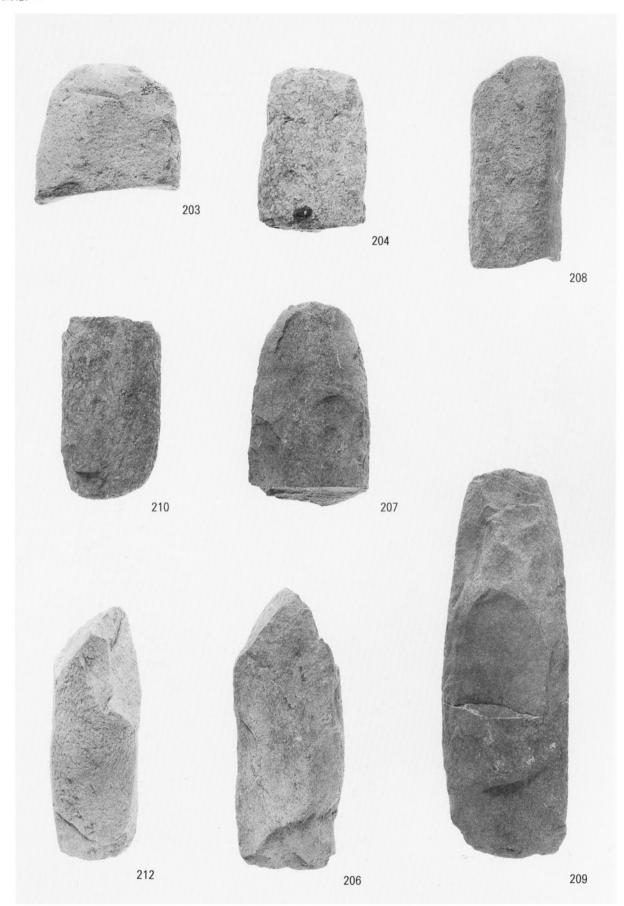
C地区出土遺物 (5-2)



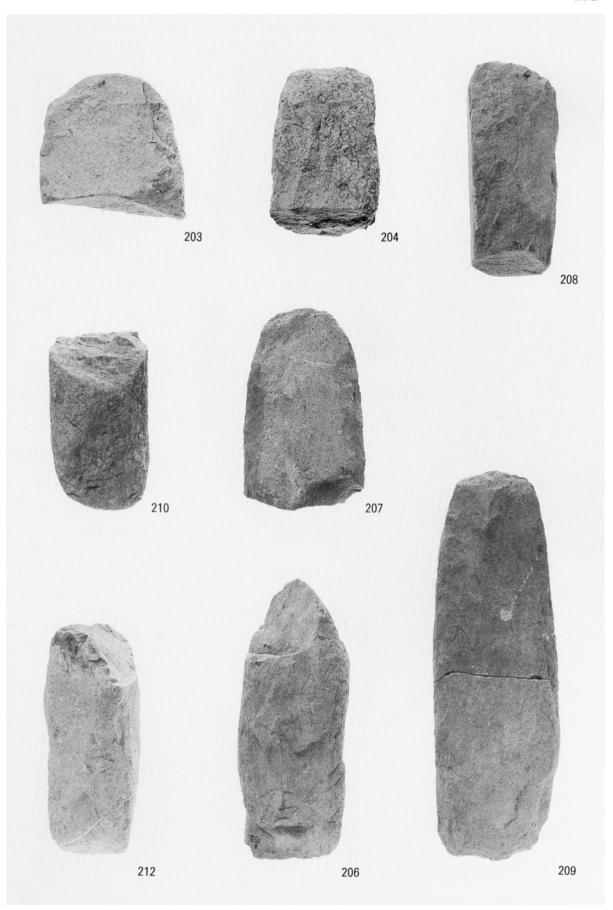
C地区出土遺物(6-1)



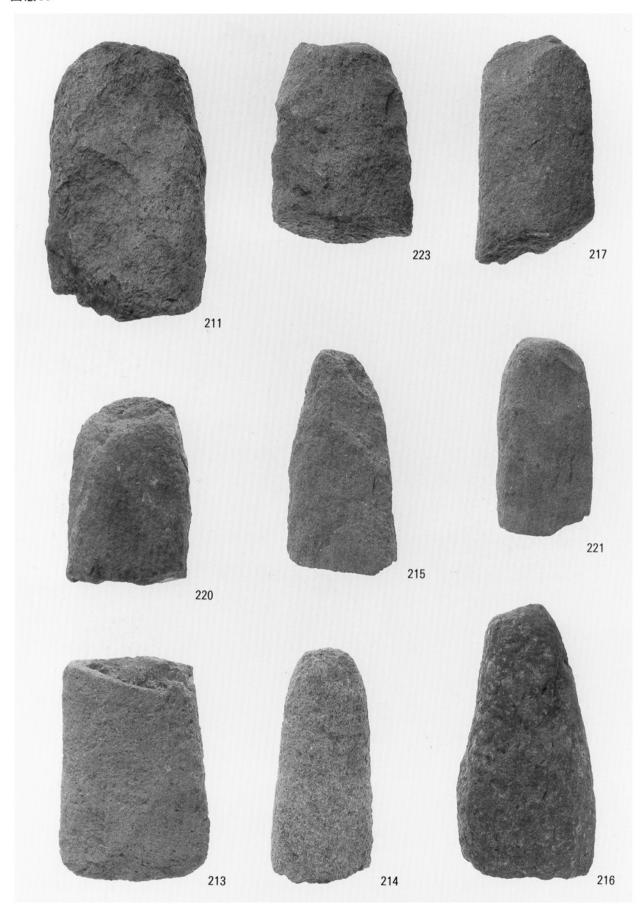
C地区出土遺物 (6-2)



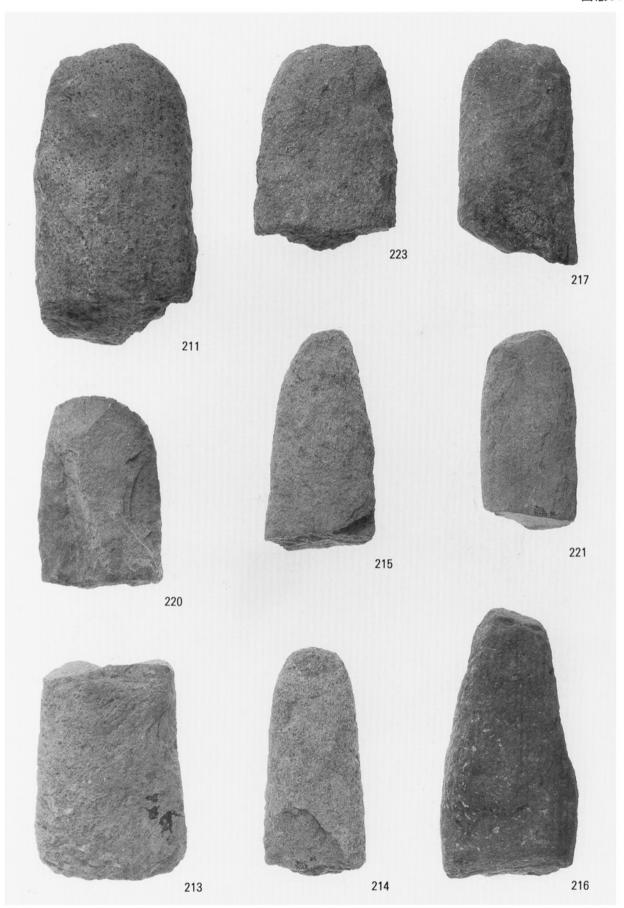
C地区出土遺物(7-1)



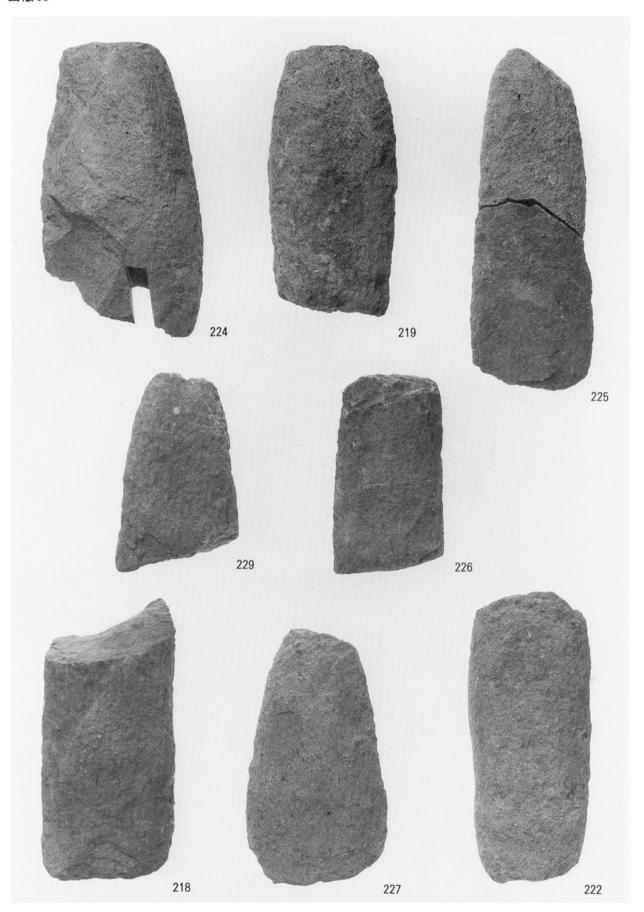
C地区出土遺物 (7-2)



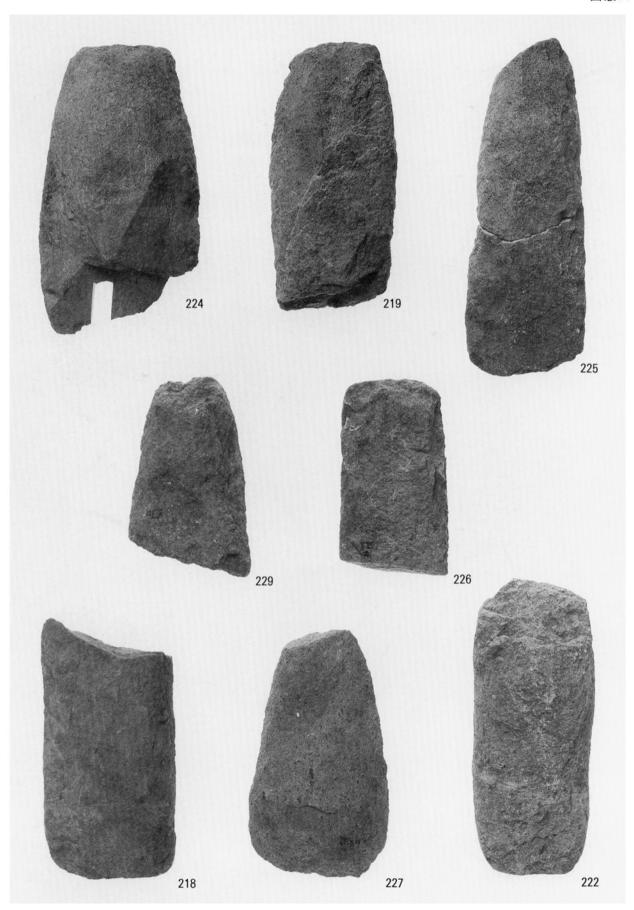
C地区出土遺物(8-1)



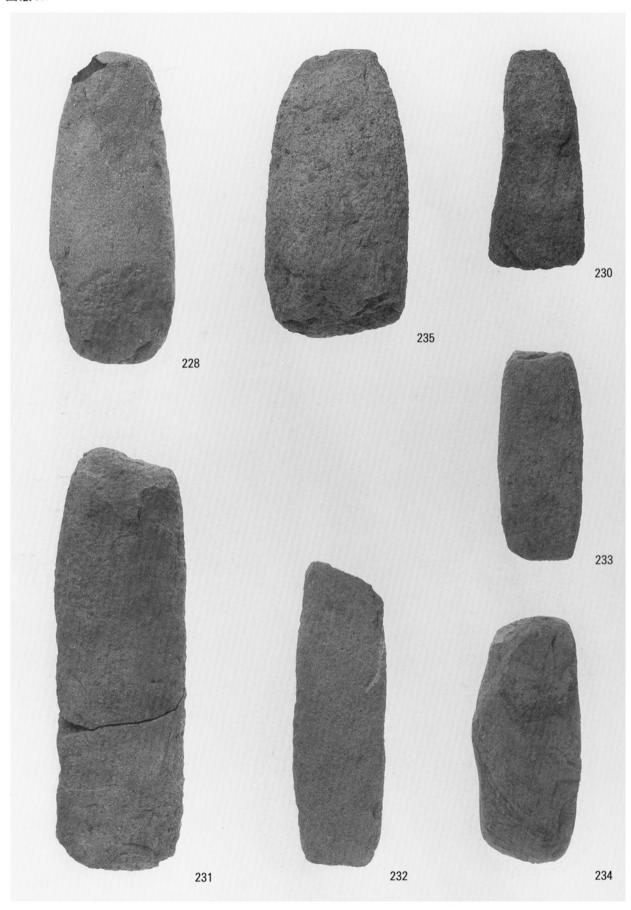
C地区出土遺物(8-2)



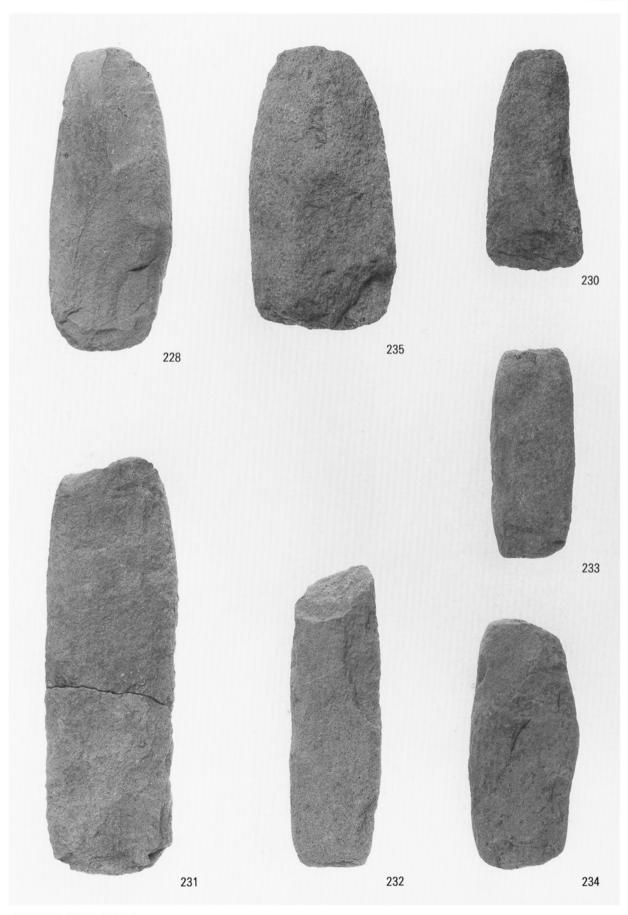
C地区出土遺物(9-1)



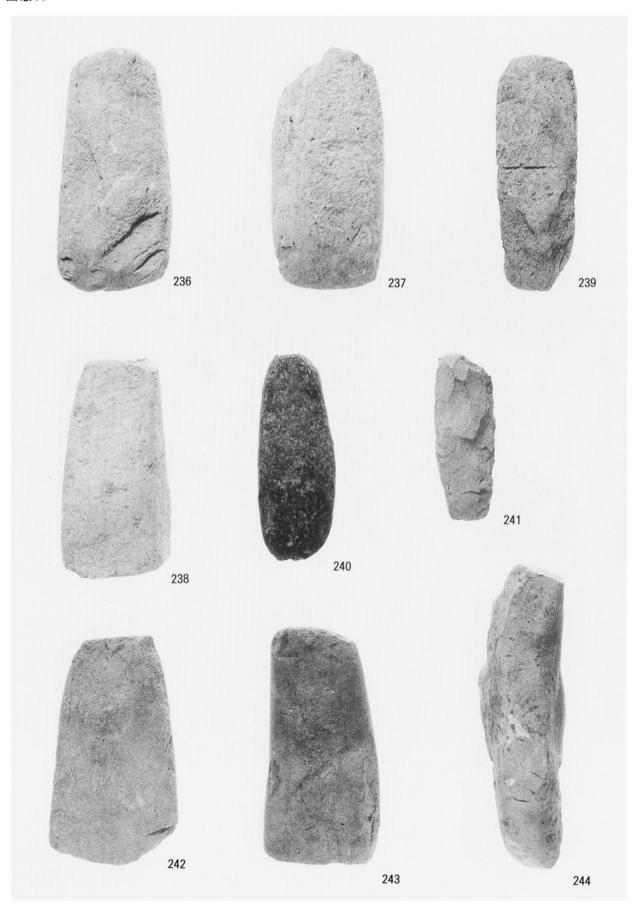
C地区出土遺物 (9-2)



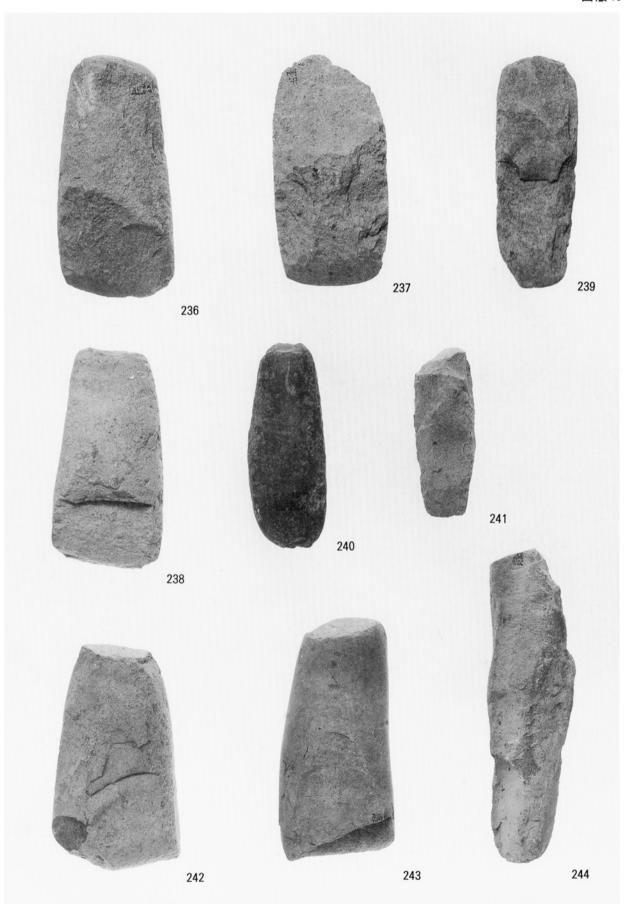
C地区出土遺物(10-1)



C地区出土遺物(10-2)

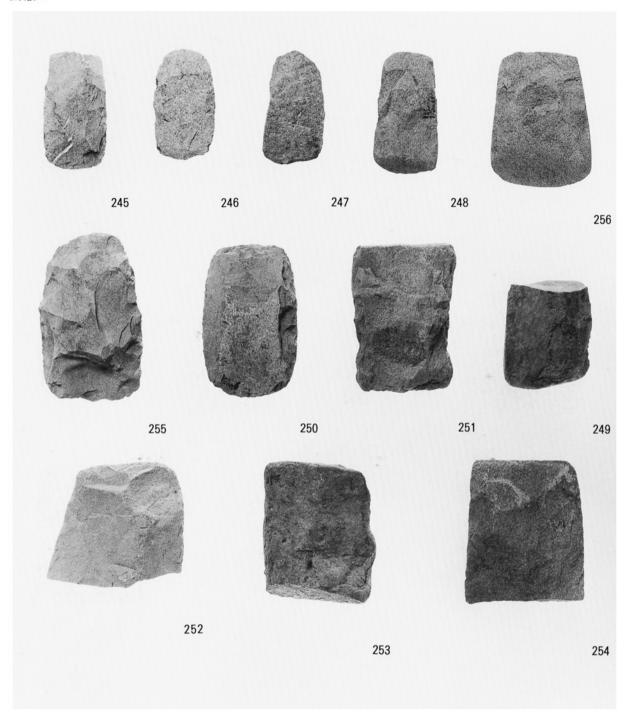


C地区出土遺物(11-1)

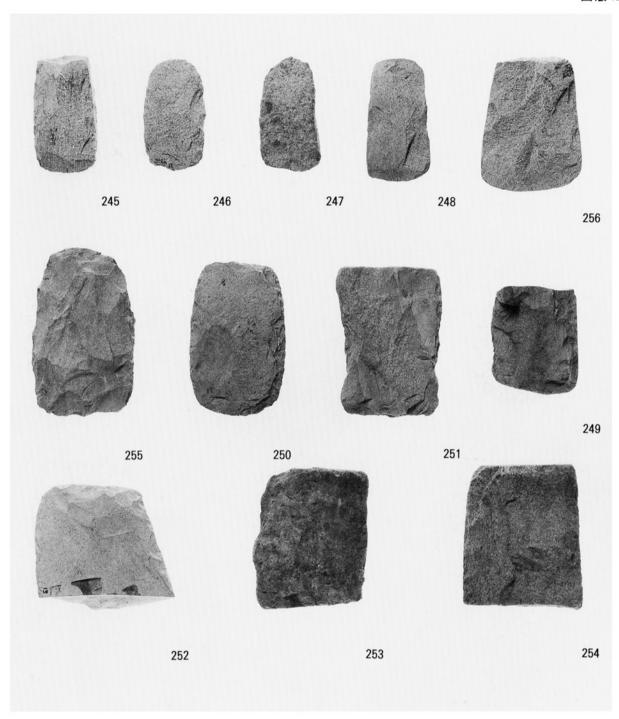


C地区出土遺物(11-2)

図版41

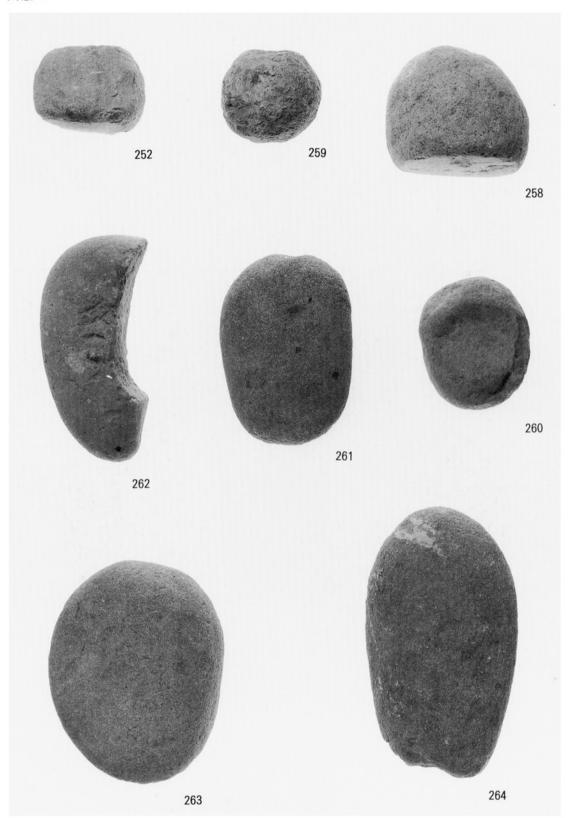


C地区出土遺物(12-1)

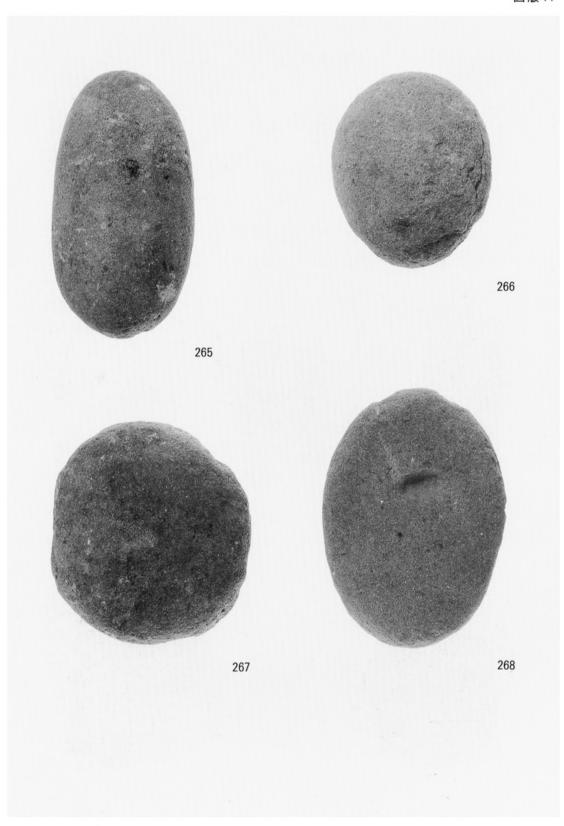


C地区出土遺物(12-2)

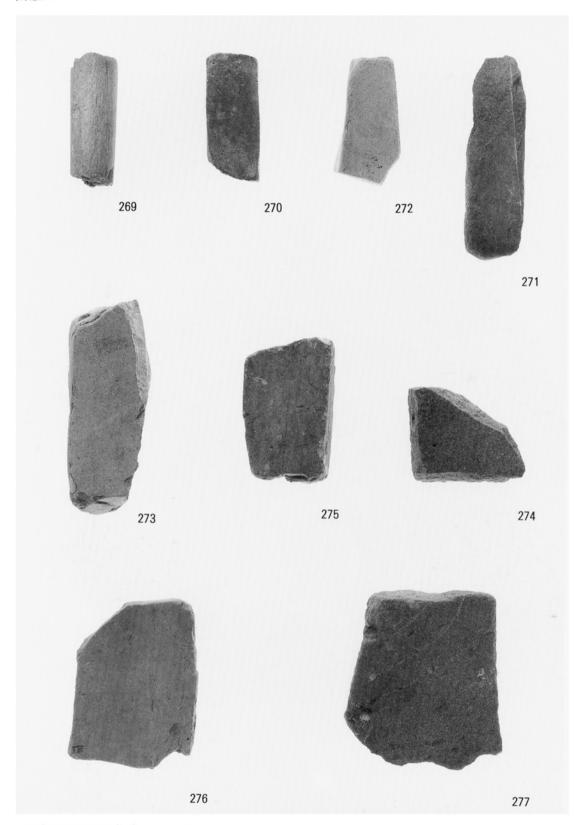
図版43



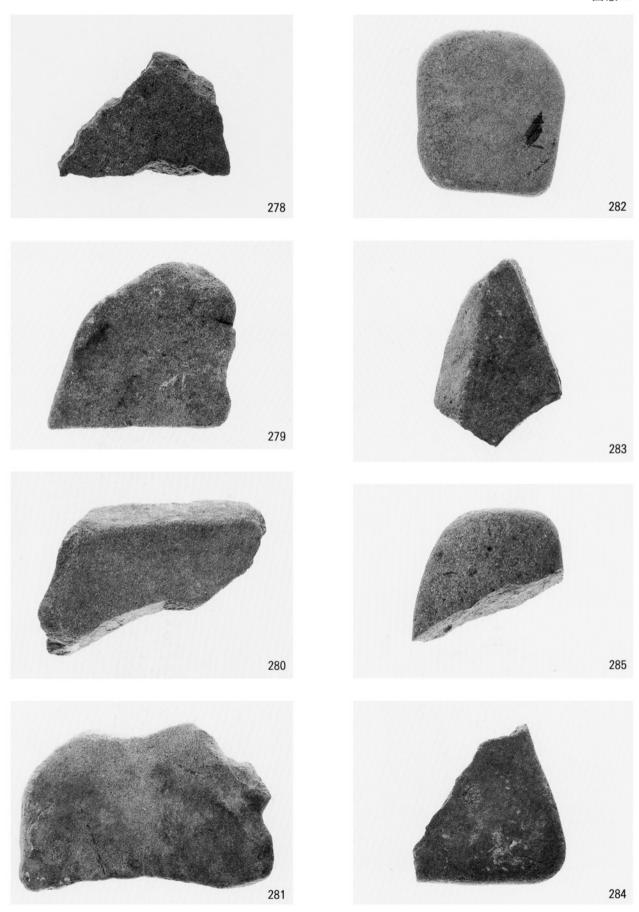
C地区出土遺物(13)



C地区出土遺物(14)



C地区出土遺物(15)

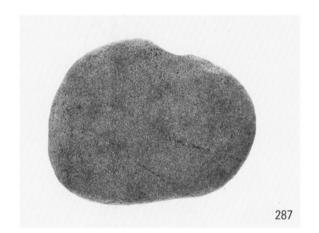


C地区出土遺物(16)

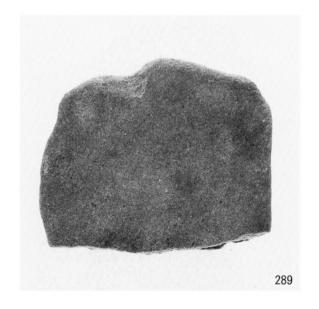
図版47

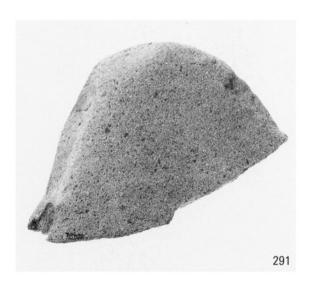










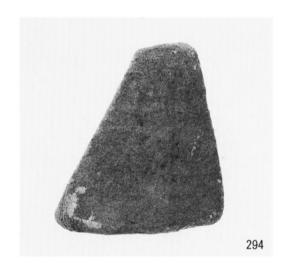


C地区出土遺物(17)













C地区出土遺物(18)

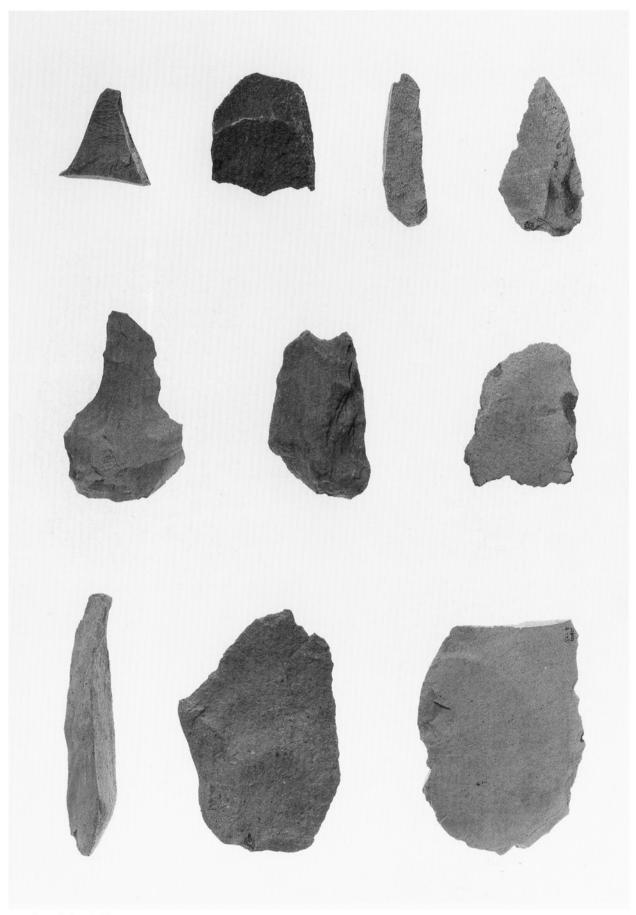
図版49





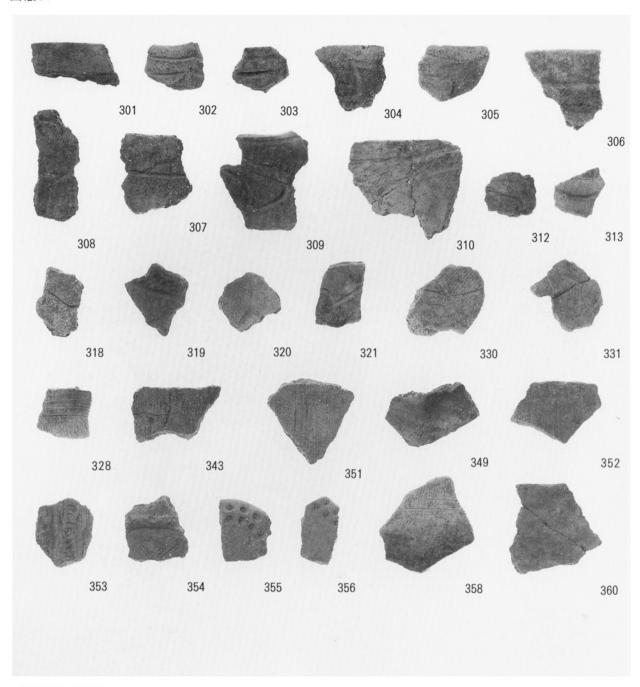


C地区出土遺物(19)



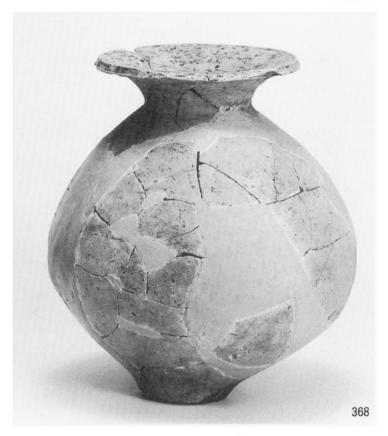
C地区出土石屑片

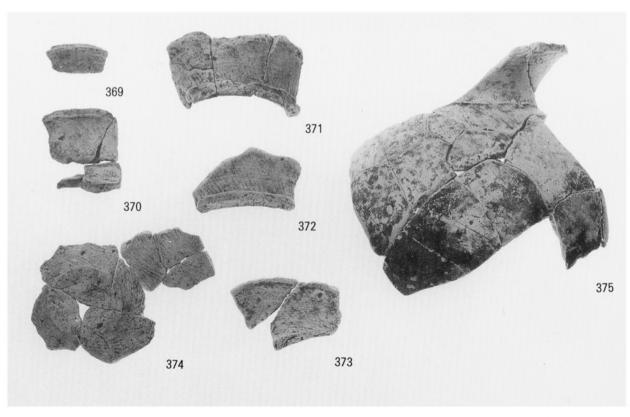
図版51



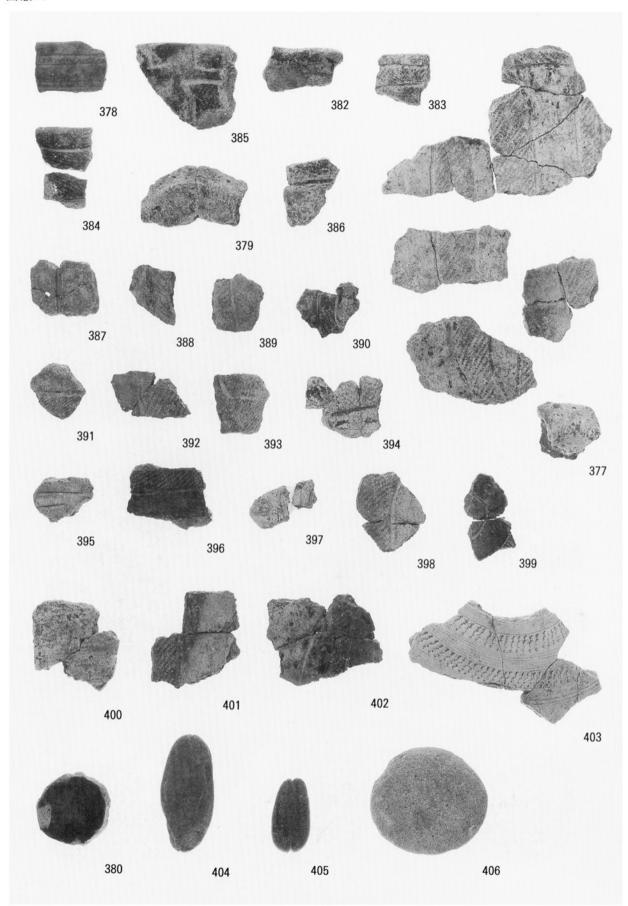
D地区出土遺物



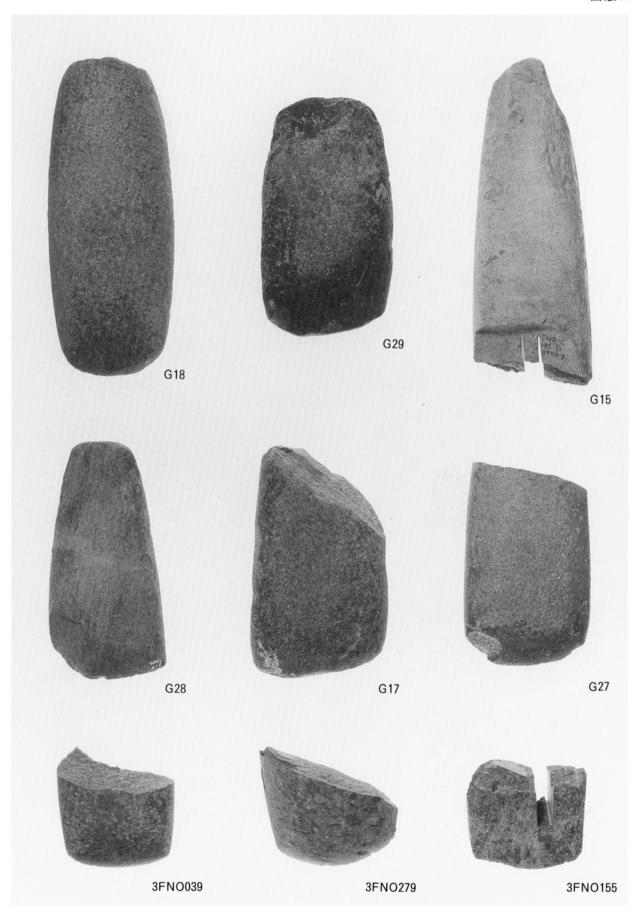




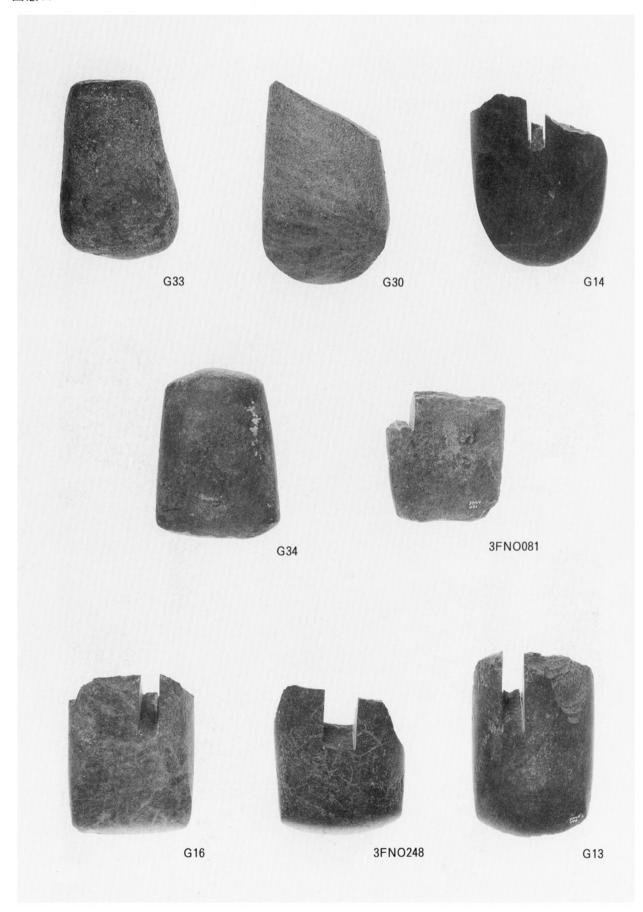
E 地区出土遺物(1)

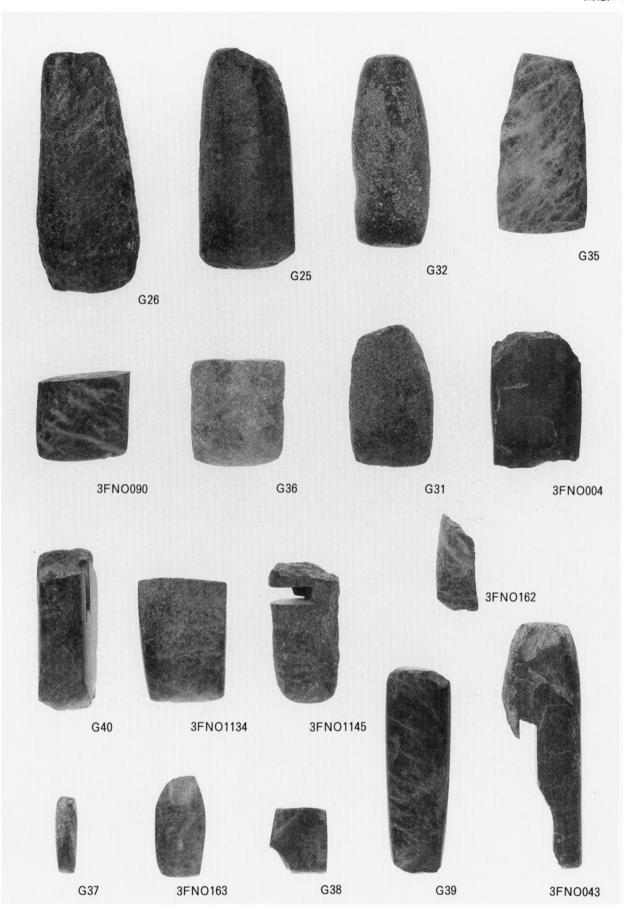


E地区出土遺物(2)



納所遺跡出土石斧(1)





納所遺跡出土石斧(3)

平成 11(1999) 年 3 月に刊行されたものをもとに 平成 19(2007) 年 9 月にデジタル化しました。

一般国道475号東海環状自動車道

宮 山 遺 跡

発掘調査報告

1999

編集 行 三重県埋蔵文化財センター 印刷 光出版印刷株式会社